

今から三年前、日本を襲った台風十八号。特別警報が初めて発表され、マスコミにも大きく取り上げられた一方で、六人の方が亡くなるなど多くの被害に見舞われた。当時私の曾祖母は、京都府綾部市にある古屋集落に暮らしていた。鳴り響く轟音と、流れ込む大量の土砂や倒木。押し寄せる台風は、過疎化の進んだ小さな集落を飲み込み、曾祖母の家を容赦なく襲った。後の復旧作業で家は元に戻ったものの、曾祖母は都会への避難を余儀なくされた。

ここ数年、大規模な台風や集中豪雨による被害が後を絶たない。地球温暖化やヒートアイランド現象が原因ともいわれている。そんな中、大阪府と京都府が「森林環境税」を四月から導入しているということを目にした。府民税に加算されるこの税は、土石流発生時の倒木・流木対策にあてられるという。さらに、根本的な森林の荒廃を防ぎ、次世代に健全な森林を残すため、基盤づくりや人材育成にも使われる。それはまさに、古屋集落が経験したような大規模な土砂災害から、人々の暮らしを守る仕組みづくりといえるだろう。

税金というと、社会保障や公共サービスに使われているイメージが強く、森林や環境のための税という考えには、驚きすら感じた。しかし、世界全体でみると地球環境を支える税は決して珍しくないという。例えば、フィンランドやオランダをはじめとするヨーロッパ諸国では、二酸化炭素などの排出量に応じて、家庭や企業から徴収する「炭素税」が一般的になっている。また、アイルランドではレジ袋の使用量を削減するために、「レジ袋税」が導入されている。日本でも、「森林環境税」は多くの都道府県で取り入れられており、環境保護を意識した税の仕組みづくりが進みつつあると感じた。

世界各地で頻発する環境破壊と、危機感を増す地球温暖化。その影響や被害は極めて深刻であり、もはや見過ごすことはできない。こうした問題と向き合い、対策していくための手段の一つに税金があるのではないだろうか。一人の力で地球の未来を変えることはできない。だからこそ一人一人が、地球に生きる人間として「税金」という会費を納め、皆で地球を救う取り組みが求められているのではないだろうか。

地球環境を支える税は、今すぐその成果が実感できるものではない。しかし、私たちが大人になった時、あるいはさらにその先の世代まで、人々の安心な暮らしと豊かな自然環境を守る財源となるだろう。地球の未来を支える上で、税金が大切な役割を担っているのだと心に留めておくことが、今の私にできる小さな一歩なのかもしれない。やがて大人になった時、税金を通して私たちの未来に貢献したいと思う。地球に生きる一人の住民として、胸を張ってその役割を果たしたいと思う。

一宮市立中部中学校3年 石川 詩菜

「無料だから、ちょっと行ってくる。」「無料だから、行ってきた方がいいよね。」「無料だから、多めにもらってきたよ。」「あと半年だけ無料だから、今のうちに、治せるところは治しておかないとね。」

中学三年生になった今、このような会話をよく耳にするようになった。これは、病院を受診する際の会話である。「無料だから」というのは、「子ども医療費助成制度」を利用して、病院で受診した場合のことを言っているのである。

私の住んでいる市では、子育て支援の一環として子ども医療費助成制度がある。これはこの市に居住する健康保険加入者で義務教育終了までの子ならば、入院・通院ともに保険診療分の自己負担額を全額助成してくれる制度である。皆が平等に、お金のことを気にすることなく、安心して病院で受診できるこの制度は、とても助かる。どうして、無料で受診できるのかというと、この制度が税金によって支えられているからである。しかしこの制度は、平成二十八年四月受診分から適応されるようになったもので、以前は、自己負担額の三分の二を助成してくれるものであり、中学二年生までは、通院だと自己負担があった。無料になったから、冒頭のような会話が増えたのだろうか。

無料だから、受診が必要とはいええない軽い症状でも、とりあえず病院に行っただろうか。無料だから、必要以上の薬を処方してもらっていないだろうか。無料だから、今ではなくてもよい治療をしてはいないだろうか。税負担が心配になった。調べてみると、実際に、医療費の自己負担が減った場合、医療機関にかかる人が、増えていた。これでは税による恩恵を、税のさらなる負担へと導いてしまう。

先日、部活動で捻挫をしてしまった。診察のうえ、レントゲンも撮ってもらい、サポーターの指導も受け、薬も処方してもらった。すべてが無料だったが、気になったため、医療費明細書で、実際にかかった金額を母に説明してもらった。中学生の私でも、税金を使っている実感がわいた。

「無料」それは、決して0円なのではない。私たちのために、築き上げられた、多額の税金の支えによるものなのだ。そして今年は、さらに多くの税金を、子ども医療にあてていただいたのだ。そのことを利用する私たちも、しっかりと心にとめておくべきだと感じている。

私たち中学生はさまざまな場面で、このような税金の支えによる「無料」に遭遇している。その時は、「無料だから」こそ、税金のありがたさを実感し、正しく、大切に使い、決して無駄使いのないようにしたい。

遠野市立遠野中学校3年 佐々木 英鈴

両親の国、日本とブラジルの二か国で育ったためか、私の中には常に二つの伝統文化や風習、価値観が存在する。時としてこの両面が良くも悪くも作用し、私を悩ませることが多いのだが、偶然にも共通するものがあると、私の興味関心は一気に高まる。

中学生にとって夏の風物詩とも言える税の作文。高校生の兄が中学生の時から夏になるとこの作文をきっかけに税の話題になる。この夏も家族で税について話しているとき、ある共通点に気がついた。それは日本もブラジルも自ら進んで納税しようとする人が少ないのではないかという疑問である。

今年の夏は、リオオリンピックがマスコミに取り上げられることが多かった。四年に一度のスポーツの祭典で世界中が盛り上がる。その一方で、ブラジルで起こった暴動や不安定な社会情勢が招く、事件も報道されたその時、母は私にこう教えてくれた。「実はブラジル国民の中にはオリンピック開催を望んでいない人が多いんだよ」と。この事実には私は愕然とした。ブラジル国民は、自分達が納めた税金を社会問題の解決に使わずにオリンピックという一大イベントに費やしていたことに怒っていたのだ。この話題の後、父は「どこの国の人も税金を快く収める人は少ないよな」と言った。私はとても違和感を覚えた。確かにこれまでも「税金を納めなければならない」という言葉はよく耳にしたが、この時まで深く考えることはなかった。「税金を納めなければならない」をどうすれば「税金を納めよう」に換えることができるだろうか。私は、自分の意見を持ちたいと思った。

限られた期間ではあったが夏休みに私は税について理解を深め、三つの考えを持った。一つ目は、税は「どのようにして平等かつ公平に使うのか」ということが大切であるということである。平等でなければ、納める人は納税を受け入れることができず、自ら進んで快く納税することができないのではないだろうか。二つ目は税の仕組みを単純なものにするということである。複雑な仕組みの税をできる限り分かりやすいものにすることによって、税が私たち国民の生活をいかに支えているのかということが分かる。そして三つ目は税の使途が透明であり、多くの人に支持されるものでなければならないということである。自分たちの生活のこの部分に、この税が使われているということが見えれば、もっと生活をよくしたいと考える人は進んで納税するのではないだろうか。少しでも税を納める側の立場になって税の仕組みづくりができれば税を取り巻く環境も変わるのではないだろうか。

将来にわたって日本を良くするための方法の一つは、優れた税制度を構築することである。国民が支持する税制度を築くことができれば、「税金を納めなければならない」から進んで「税金を納めよう」という声をよく耳にする社会になるのではないだろうか。

ニホニウム。原子番号一一三番。九州大学の森田浩介先生を中心とした理化学研究所のチームが発見した新しい元素である。間もなく世界中の教科書の周期表にこの元素名が載ることになるそう。私はこのニュースを聞いてすぐに理科の教科書を開いてみた。確かに周期表の一一三番は空いている。そしてそこに「日本」を連想させるニホニウム元素が載るのである。なんてすばらしいのだろう。ニホニウム発見は日本中の人々の誇りとなるに違いないと思った。しかし、なぜ名称が発見者やチーム名ではなくニホニウムになったのだろうか。素朴な疑問を感じこの新元素に関する記事を調べてみた。森田先生は、研究が国民の税金で支えられていることへの感謝の意を示したかったと述べられているのだ。研究が税金で支えられているという事実には私は新鮮な驚きを感じた。研究には様々な分野があり、多くの研究課題が存在しているのだろうと思う。その中で特に国に認められ税金が投入された研究には、研究に対する責任と使命が加わるのではないだろうか。そしてその研究は、研究者にとって誇りと励みとなり、質の高い研究結果を生み出すことに繋がるだろうと思う。また、税金を納めている国民には、研究の恩恵を受けることで、より良い生活と福祉がもたらされるだろうと思う。研究にはお金がかかるものもあるだろう。特に今回の新元素開発のためには、全長約七〇メートルの巨大な加速器が必要であり、理化学研究所の施設が無かったら新元素は誕生しなかった。税金が無かったらニホニウムは生まれなかったと言えると思う。何よりも税金は、様々な仕事に携わる納税者から集めた貴いお金だから、税金が支える研究というのは、たとえ納税者が研究者ではなくても間接的にその研究を応援していることになる。私は不思議な温かさをそこに感じた。科学の発展を納税者みんなで支えるという現行の税金制度の理念は、本当にすばらしいと思った。

私はこの夏休みに肺炎を患った。肺炎と診断できたのはレントゲンの発見したX線のおかげであり、すぐに回復できたのは薬学の研究者が開発してくれた抗生剤のおかげであり、肺炎の原因がマイコプラズマという微生物だと判明したのは生物学の研究のおかげである。私の病気の回復という小さな出来事にも科学の発展、研究の貴さが含まれている。このような医学上の発見や研究は、日本人に限らず世界中の研究者の努力も内在しており、科学の発展は国境を越えて平和と福祉をもたらしてくれる。だから科学の発展を支える税金は、グローバルに役立っていると言えるだろう。

私は、ニホニウム発見に勇気もらった。税金で賄われ無償で支給された教科書を大切に使うって勉強を続け、将来周りの人々を幸せにするような職業に就きたいと思う。そして、これまで受けてきた科学発展と税金の恩恵に恩返しできるような納税者になりたいと思う。

姉から教わった税金

北海道砂川市立砂川中学校 3年 片山 穂南

「あんたのクラスは、税金を無駄遣いしている。」姉の言葉でした。姉は今年で二十一歳です。働いてきちんと税金を納めています。「だって、あんたのクラスは冬の寒い日なのに窓があいているでしょ。教室の暖房はついたままで。おまけに机やイスは落書きだらけじゃん。」

私のクラスは男子を中心にやんちゃ系の人が多く、世間一般では「荒れ」ていると言わざるを得ないクラスです。一部の男子は、雪が降ってテンションがあがるのか、窓をあけて雪合戦を教室内で始めます。女子はきちんと過ごしたい人が多く、寒いから窓をしめてと優しく頼んでいるのに、好き勝手です。まさに暖房の無駄遣いなのです。

「あのさ、あんたたちが学校で使っている教科書、教えてくれる先生たちの給料、机やイス、暖房など学校の施設にかかるお金は、みんなわたしたちのような大人が働いて払う税金で賄っているんだよ。」

なんとなく学校の授業で習ったこともあるような気がしました。でも、まさか学校の暖房にも税金がかかっているなんて…。

私の知っている税金といえば、消費税くらいなもので、税金を意識して生活することは今までありませんでした。しかし、姉の言葉で、税金が私たちのとても近くで、しかも私たちのために使われていることに気づくことができました。私は、早速インターネットで税金について調べてみました。

「こんなにも様々なところに税金が活躍しているんだ。」と、私にとっては驚きの連続。姉ともずいぶん税金について語り合いました。

私のクラスの、特に男子の人たちは、税金を本当に無駄遣いしている。なのに、消費税が高いとか、働きたくないから大人になりたくないとか、そういうことばかり言っています。だんだん腹が立ってきました。でも、気づきました。

「もしかしたら、私も同じ…かもしれない。」

私は姉の存在のおかげで、税金の有り難さに気づくことができました。もし、姉と税金の話をしていなかったら、結局はクラスの男子たちと同じなのです。テスト前なのに教科書すら開いていない自分がいます。消してはいますが、学校の机の上に落書きしていることもあります。自分の目の前にある学校のもの、いや学校自体が当たり前の存在です。安全に学校へ行けるのも、通学路が整備されているからです。道路の安全維持にも税金は使われていました。また、学校へ行けば、移動教室で誰もいなくなった教室の電気がつけっぱなしだったり、掃除のときや手洗いのときには水を出したままおしゃべりしたり。すべてが税金の無駄使い。私も男子のことを責めることはできません。同じでした。

もし今年の冬も、暖房のたいている教室の窓を開けているようなことがあったら…。

私のすべきことは、もう決まっています。

「美しい国」へ

北海道教育大学附属函館中学校 1年 竹中 梨紗

外国人留学生に日本の印象を尋ねると、「日本は美しい」と返ってきます。日本特有の建造物や景色に、美しさを感じるのはうなずけます。しかし、留学生が感じている「美しさ」はそれだけではないようです。

私の家は、ホストファミリーをしています。アメリカやヨーロッパ、アジアの学生の受け入れをしています。彼らは、当たり前で暮らしている日本の素晴らしさに、気がつかせてくれます。彼らが感じている「美しさ」は、町にゴミが散らかっていないことや空気のきれいさにもあるようです。私たちは、街の環境の良さを感じているのでしょうか。日本の公園や道路には、ゴミが散乱しているというイメージはほとんどありません。この「美しさ」は、なぜ維持できているのでしょうか。それは、当たり前で捨てているゴミの処理や収集が、きちんと成されていることにあるのではないのでしょうか。いつも決まった曜日に、必ず収集しゴミを処理する。このサイクルは、税金によって保たれています。このサイクルが、一度崩れてしまうと、町はゴミの山となり「美しい」とはかけ離れた場所になってしまいます。

また、彼らが感じる「美しさ」は、水のきれいさにもあるようです。日本では、蛇口をひねると浄化された美味しい水が出ます。世界中で、蛇口の水をそのまま美味しく飲むことができる国は、とても少ないようです。様々な生活用水にも、清潔な水が使われており、感染症や伝染病が流行するなどという事態も起こりません。その透明で清潔な水を作り出し、供給することにも税金は使われています。

このように、私たちが普段当たり前で生活している、当たり前の日常を維持するために、日々税金が使われていることを再認識しました。私たちにとって当たり前の生活は、他国の人々にとっては、とても豊かで「美しい国」という印象を与えているようです。このような「美しい国、日本」に、暮らせている毎日は当たり前ではないのだと思います。日本の中で暮らしていても、見えない日本がありました。世界の人々の目線から日本を見てみると、日本の沢山の素晴らしさがみえてきます。

このように、普段の生活の中で、有意義に使われている税金があります。日常の中の当たり前の日本の「美しさ」を維持するために、使われている税金があることを誇りに思いました。いつまでも豊かで「美しい日本」を、つなげていくためにできることを、私は、しっかりと考えていきたいです。

「税金に支えられて」

酒田市立第二中学校3年 今井 奈央

私は、今、税金で支えられている義務教育の大切さを実感しています。重度障害の四肢麻痺の私が、字を読めて計算ができて社会の仕組みなどが分かり、こうして作文が書けるのは、これまでの教育があったからです。

私は、一般公立高校入学を目標にして勉強を頑張ってきました。しかし、私が中学三年生の六月に県の教育委員会から、高校は義務教育ではないという理由で、教育支援員の先生のサポートを受けたり、支援学級で受けていたような特別措置もないと回答がありました。その結果を受けて、私は自宅から遠く離れた養護学校へ進学することを決めました。家族と離れて寄宿舎に入ることになります。この経験から、もし義務教育がなかったら自分はどうなっていたらろうと考え、恐ろしくなりました。もしかしたら、一生施設で暮らす人生を歩むことになっていたかもしれないと思いました。

障害者であっても、きちんと教育を受ければ自分でできることが広がります。また、収入に結びつく仕事に就けば、納税者となり歳出で最も多い社会保障の費用がおさえられると思います。少子高齢化で働き手が減っていく中、一人一人が自分の力を十分に発揮して就労することがより重要になってくると思います。私は身体障害者で、常に介助を必要としていますが、口頭で自分の考えや意志を伝えることができます。今も、母に代筆してもらいながら作文を書いています。将来は、文筆家になりたいと思っています。英語が好きなので、語学力を高めてインターネットのスカイプなどを通じて海外の人々とコミュニケーションをとってみたいと思っています。こうして私が、前向きに夢と希望を持って家族と生活できるのも義務教育のおかげです。

学校で配られた資料から、公立学校の児童生徒一人当たりの年間教育負担額が小学生は約八十六万三千円、中学生は約九十九万三千円であることを知りました。こんなに多くの税金が使われていることに驚きました。私は特別支援学級に在籍していて、三つ子のきょうだいもいるので、その三倍以上の額になります。姉と兄は生まれた時から一緒に育ち、療育センターへ訓練に行く時も付いて来ました。日常的に障害者や、それに携わる医療関係者や福祉用具製作者に接してきた経験から、姉は看護師に兄は介護ロボットの開発者になりたいと思うようになりました。今年の夏休みは志望校合格を目指して勉強を頑張っています。姉と兄が希望する仕事に就いて納税者となり、次の世代の教育費を支える人になることを期待します。

私は現在、福祉や教育などみなさんの税金に支えられています。自分が存在していただけるのも税の配分のおかげだと感謝しています。それゆえに、将来は税金を納める側に立ちたいと強く思っています。

「こんなにお金が必要だったなんて。」

私は今年、中学三年生としての夏休みを迎えています。そして来春には高校受験。二年前くらいからは、自分のこれからの進路について、色々と具体的に考え始めていました。

この春、私達の中学校は、修学旅行で東京を訪れました。二日目の日程は班別学習。各班が自由にスケジュールを決めて、自分達でそれぞれの目的地に向かうのです。私達の班は、都内の私立大学のキャンパスを見学する事に決めました。行き先を間違いそうになりながらやっとたどり着いたそこは、伝統を感じさせる本当に素晴らしい所でした。何度も画像で見た通りの広大な敷地と圧倒されるような建物。沢山の学生が生き生きと行き交うのを私は羨ましく思いながら眺めていました。

旅行から帰った私は、初めて訪れた興奮を忘れない内にと、学内から持ち帰った学校案内を開き、更に詳しく調べてみようかとパソコンに向かったのです。そして、卒業までにどれだけのお金が必要なのかを知って驚いてしまいました。

しかし、なぜ学校に必要な金額にそれ程の差があるのかにも気がつきました。中学校を卒業するまでは義務教育の期間であり、基本的に無償であったために、学費としてのそんな金額を目にした事がなかったのです。

本来はもっと高額である教育費が、国や地方自治体のおかげで低く抑えられ、誰もが等しく学ぶ事ができるようになっている。この事が保障されているのは、本当に素晴らしい事だと私は実感しました。

税とは、未来のために、誰かが誰かに手を差し伸べる手段であると思います。

社会に出て行くスタートラインにつくために、必要な知識を身に付ける。教育に限らなくても、健やかに暮らし未来を創るために、健康な身体を維持する。そのために健康保険制度が存在し、個人の支払う医療費を低く抑えてくれている。

二年前、私は震災後初めて仙台港に行ってみました。震災の時に報道された惨状が忘れられず、そこに行くのが何か後ろめたいような気がして、訪ねる事ができなかったのです。しかし、そこには想像と全く違った景観が広がっていました。港は、何が起こったか全く感じさせない程、完全に元の姿を取り戻していたのです。そこに差し伸べられた多くの手。その時に感じた、多くの人々の結集された力の大きさを自分の未来に思いを馳せる今、私は改めて強く感じています。

誰かのために誰かが手を差し伸べてくれる。

力を貸してもらった人が今度は力を貸してあげる。その手段として税が存在し、より健やかな未来を実現し、受け継がれて来た事を次世代に託す事が可能になるのだと思います。

今までも、これからも沢山のの人に支えられて来た私も、誰かに手を差し伸べようと思います。納税する事によって。

就学援助制度

那須塩原市立日新中学校 2年 廣木 ひなこ

「私だけ手紙をもらってきたけど、これは何？」

小学校三年生のとき、学校から封書を渡されました。中身が見られないように封がされていたので疑問に思い、母に渡しながらずねると

「国から援助金がもらえるのよ。」

と言って、就学援助制度というものを教えてくださいました。

東日本大震災により観光地に勤務する父の給与が激減したこと、乳児の妹がいたため母が無職だったことで生活が厳しくなりました。そこで学校に相談し就学援助制度があることを知り、手続きをしたところ補助金を受けられることが可能であることの通知だということでした。

就学援助制度とは、小学校・中学校に通うために必要な経費が市町村から全額または一部支給される制度です。対象になるのは、生活保護世帯などの、市町村が独自に決めた所得基準限度額を下回る世帯だということです。

私はその時、就学援助制度というものを初めて知りました。当たり前前に学校に行っているだけで、結構な出費があることも後から知りました。補助金を受けられたことで、学用品や給食費など学校生活に密着したものに不都合がなくなるのだ、と母は説明してくれました。自分の家が所得額を下回る世帯だということは少なからずショックでしたが、補助金のおかげで習っていたピアノを続けられることにもなり安心したものです。

その就学援助金は税金から出ています。私にとって税金とは、消費税というなぜ払わなければならないのかわからない八%の金額でしかありませんでした。他にも色々な税金がありますが、どれもピンとこないし正直自分には関係のないものだと思っていました。しかし補助金を受けることで今までの生活を保つことが出来ると知り、税金に対する考え方が変わりました。私たちの身の周りをよく見てみると、私たちはたくさん税金のお世話になっています。学校や図書館、病院の保険料など身近で様々なところで税金は役立っています。役立っていることに気づくと、税金はなくてはならないものだということを実感してきました。

私たちが納めている税金は、一人一人は大きい額でなくてもたくさん集まることで誰かを救うお金になります。私もその税金に助けられました。今度は私が納める税金で誰かを救うことができるのです。税金をとられる、という表現ではなく、よりよい社会にするために会費をはらう、と考えると税金はなくてはならないものです。みんながそう思えるような税金であって欲しい、とそう願います。次世代の誰かのために、きちんと納税しようと心に刻み、みんなが助けあう社会の一員として自分の責任をしっかりと果たしたいです。

私の祖父母の家は、車で片道一時間ほどのところにあります。数年前に高速道路が開通し、所要時間が半分ほどになりました。しかし正直なところ、日常生活の中ではさほど意識することがありませんでした。それがあの日——祖父が亡くなった日、感謝にかわりました。高速道路があったおかげで祖父の最期に立ち会うことができたのです。悲しみの中で駆けつけた時の母と祖母の表情は忘れることができません。私が税について関心をもったのはこのことがきっかけでした。それまで私にとって「税」は、なんとなく損をしているような、負のイメージを伴うものでした。まして税の使い道についてなど、「大人の世界のこと」として、関心さえ持てませんでした。

調べてみると、税金は、道路の建設や整備をはじめ、普段使っている教科書や学校内にある多くの備品や設備、さらにはケガや病気で病院にかかった時の医療費等、思ったよりも身近にあったことに気付き、意外に思いました。税を収めるという側面からさらに調べをすすめていくと、税率は国によって異なり、日本が八パーセントであるのに対して、デンマーク、スウェーデンなど北ヨーロッパの国々の税率は二〇パーセントから二十五パーセントと、かなり高い率になっています。ここで注目したのは、そんなデンマークの人々の幸福度ランキングが私の予想に反して世界で一番高いという統計があることです。その一番の理由は、福祉や教育、医療が充実していて、多少高い税金を納めても、それによって充実した生活が保障されているという安心感が大きいためだそうです。つまり、人々が重要視しているのは、納税額ではなく、納めた税が正しく適正に使われているかどうかであって、税の支払いが少ないことと幸せであることはイコールではないということです。デンマークの人々は、そういった背景もあり、政治に対する関心が高いことで有名だそうです。

多分私が税に対してプラスのイメージを持てなかったのは、知識が不足していたうえに社会について無関心だったからだと思います。たくさんの恩恵を受けていながらそれに気付かず、日常を当たり前としか考えていなかったことに、今回あらためて気付かされました。また、税を支払っていれば保障を受けるのは当然という考えも間違っていて、納税することで誰かのために役立てるという考え方が大切なのだと思いました。

こうして考えてみると、税は温かい心のバトンであるように思えます。そして私はすでに、そのバトンを受けとっていました。誰かの役に立ち、誰かを幸せにする、そんなリレーがいつまでも続く社会であってほしいと思います。そして私も、そのチームの一員として自分の責任を果たしていきたいと思います。

税金で働く父

三芳町立藤久保中学校3年 鈴木 佳音

私の父は白バイ隊員である。もう二十年以上も白バイ一筋で仕事をしている。今回、税の作文を書くための参考資料に「まちの安全を守る白バイ隊」として写真が載っていたので改めて父の仕事について深く知ろうと考えた。

父の朝は早い。ほぼ毎日、始発で出勤している。それなのに、帰りはいつも八時や九時である。その上、事故や事件があると帰ってこない。父は、黙々と仕事をしているが時々漏らすことがある。交通違反をした人を取り締まると決まって「税金泥棒」と言われるというのだ。交通違反は重大な事故を引き起こす危険な行為だ。交通事故で不幸になる人は数知れない。そのことを身に染みて知っている父は、根気よく違反者を諭すそうだが、怒鳴られたり殴られそうになったりすることもあるというのだ。日本という国を安全にするための仕事だから税金が使われていると思うのだが、税金で仕事をする人への社会の目は厳しい。

特に税金で仕事をするということが大変だと感じたのは災害時だ。記憶に新しいところで東日本大震災時は、一週間近く帰ってこなかった。どこで何をしているのかわからなかった。帰ってきたと思ったら、東京が落ちついたので次は東北に行くという。父は宮城県の気仙沼に行くことになった。気仙沼市は津波被害だけでなくその後、火災も発生し、二次被害の大きかったところだ。あとから聞いたことだが、高速道路は所々うねり、亀裂がはいっていたりと白バイで走るのは大変だったそうだ。そして、被災地の現状は目を覆うものだったという。しかし、白バイでパトロールすることで泥棒などの犯罪の抑止力になると聞いた時にはすごいと思った。

災害時には警察官だけでなく多くの公務員が家族を顧みず働いていたのを私は知っている。それが税金で働くものの使命だと父は言っていた。非常事態時に特にしっかりと機能しなければ国民は納得しないだろうと話していた。

そのため、ニュースで取り沙汰される政治資金の使途不明金などの不透明な税金の使われ方は納得がいかないのである。仮にも国民から選ばれた人々は税金がどれだけ重要であるか知っているはずである。また日本がいまどのような財政状況にあるかも知っているはずだ。中学生の私でさえ、日本の行く末を案じている。税金を納める人口が少ない社会をこれから日本はどのように乗り切るのだろうか。一番費用のかかる人件費を削減するのだろうか。きちんと税金で働く人を確保しなければ日本の安全・安心は守られないと私は思っている。そして私は税金をしっかりと納め、税金で働く人々に感謝して生活できる大人になりたいと思う。

すべての人へ、未来の私へ

新潟市立小須戸中学校3年 小畑 萌

遠くから近づいてくるサイレンの音に、部屋の空気は緊張で包まれた。私たちが、辛そうな祖父を見つめている時、サイレンが鳴り止み、ストレッチャーを抱えた救急隊の方々が家に入ってきた。彼らの素早い行動と、てきぱきとした対応のおかげで、祖父は救急車を呼んでから間もなく、病院へ搬送された。命に別状はなく、翌日はベッドの上で元気な様子を見せたようだ。

このように、急な病状で具合が悪くなる人が助かるのは、隊員の方々がいてこそ、そして、税金という制度があるからこそだと実感することができた。

中学校一年で受けた租税教室で、「私たちの暮らしには、税金はなくてはいけないものなのですよ」と先生がおっしゃっていた。租税教室では、普段使う学校の教科書、冬場よく見かける除雪車、休日に利用する公共図書館などは、国民、県民が納めた税金により無償で支援、建設されるもの、ということを教わった。租税教室で教わった内容には、もちろん救急車や消防車の出動も含まれていた。しかし、私はいまいち理解できず、税金に感謝するまで至っていなかった。むしろ、「どうして消費税を払わなくてはいけないのだろう」「どうして消費税率を引き上げるのだろう」とさえ思っていた。

ところが、それが全く覆されたのだ。

私を含む全ての県民が納めた税金で、私の祖父はすぐに救急車で運んでもらえた。これは逆のことも言えるはずだ。私が払う僅かな消費税という税金で、誰か苦しんでいる人を救えるかもしれないのだ。しかも、私が大人になり、払う税金がどんどん増えていくということは、それだけ誰かを助けることができる。また、私自身も助けてもらえる。相互の助け合い・支え合いに参加できるのだ。

しかし、誰もが自分の命や家族を危機的な状況から救ってもらう経験をできるわけではない。だから、税金を払うのを嫌がる人もいるのだ。そういう人たちには、自分が他者からの介護を要するようになった時のことを想像してもらいたい。国から年金を受け取ることで、多くの高齢者が生活している。今、私たちが納める税金は、今、苦しんでいる人を救う手助けにもなるし、将来、稼ぐことができなくなる自分への手助けにもなる。

少子高齢社会となり、これから若者が負担する税はますます大きくなりそうだ。しかし、納める税が多かれ少なかれ、自分を含める全ての人を救うことに変わりはない。事実、税金によって多くの人助けられている。「自分が稼いだお金は、自分だけで使いたい」という考え方は寂しいし、その人は、周りの人から助けてもらえなくなるかもしれない。

「困っている人を助けたい」

少しでもこんな気持ちがあれば、税金に対する見方も、自然に良いものに変えることができるはずだ。

学んだ「税金一円」の役割

学校法人長野日本大学学園長野日本大学中学校 2年 布谷 直浩

僕の家では、小さい頃から、お小遣いは、風呂掃除百円、玄関掃き五十円と、お手伝いの報酬としてもらっています。

数年前、それをコツコツ貯めた通帳を見て、衝撃を受けたことがあります。それは、利息の次の欄に記されていた、「税金一円」という文字。

「まだ小学生なのに、税金を払わなきゃいけないの？」と、損をしたような気持ちになりました。

しかし、今年七月に学校で租税教室があり、その考えが一変しました。

それは、国の財政収入の多くが税金で賄われ、(例えば消費税にしても)他国に比べて低税率ながら、最たる支出は社会保障費であることを知ったからです。しかも、その社会保障費は、遠くに住む祖父母たちにとって、^{イコール}生命維持とも言える年金や医療や介護に、主に使われていました。

今春、癌を患った祖父は、手術直後に脳梗塞を起こし、転院先のリハビリの病院を退院する際、要介護認定を受けました。二人で静穏な年金生活を送っていた最中、急に別人のようになってしまった祖父を目の前に、祖母はショックを受け、僕が電話をかけても、泣いてばかりでした。

先日の帰省で、その話題になった時、

「パニック状態じゃったけど…高くてどうしようかと思うとった手術代や入院費も、結局、自己負担は軽く済んだんよ。ケースワーカーさんも、退院後の生活の心配なこともよく聞いてくれて、退院後があまり不安じゃなかったんよ。」

と、祖母が話しているのを聞き、

「やっぱり、税金って、目に見えない形で自分の大事な人たちを支えてくれてるんだ。」

と、一ヶ月前に租税教室で教わったばかりの『税金の役割』を、身近に感じることができました。

また、この四月から自分の地域でも中学生までの医療費無償化が始まり、僕自身も税の恩恵に与っていると、母から聞きました。

あの通帳の一円も、このような役割を担ったのかもしれない。損に思えた一円も、社会という大きな目で見ると、お互いの暮らしを支え合う『会費』だったのです。

二〇二〇年からの「十八歳成人」が検討されていますが、きちんと納税する大人を増やすためにも、僕自身が今回の租税教室で意識が変わったように、早期からの租税教育の必修化が大切だと思います。

そして、国や自治体には、小・中学生でも関心が持てるような、税の使い道の発信を工夫してもらい、本当に必要とする人に確実に届く行政サービスの提供に努めて欲しいです。

より暮らしやすい社会を持続させるためにも、僕たち一人一人が税の使い道に常に関心を持つことが必要だと思います。

子ども医療費から学んだ税の大切さ

旭市立干潟中学校3年 高山 愛美理

今年の六月、消費税の増税が延期されるということをニュースで聞いた。私は、このまま増税されないことで物が高くならないという喜びと、日本の社会は大丈夫なのかという不安の二つの気持ちが混じり合っていた。少子高齢化が進む今の日本で、増税は多くの高齢者の負担になるだろう。しかし増税しないとなると社会保障をどうするのかという問題が迫ってくる。どうするのが最良の方法なのだろうか。考えてみても、結論を出すことはできなかった。しかし考え続けよう、いや、考え続けなければならないと思った。私たちは生きてきた中で、税によって救われたことが多くある。「税について考える」ということは私たちひとりひとりの義務ではないだろうか。

私は三歳から小児喘息を患っていて、定期的に病院に通っている。そして五種類ほどの薬を処方されている。十二年間ずっと病院に通うことでいくらのお金がかかったのだろうと考えた。一回につき三〇〇〇円くらいかかるのだろうか。きっと莫大なお金がかかっているのではないだろうか。そのように考えていたある日、普段受診するとき目にしている一枚の紙が鮮明に映った。それは「子ども医療費助成受給券」というものだった。よく見てみると「通院一回、入院一日につき三〇〇円、保険調剤は無料」と書いてあった。この子ども医療費助成制度は納められた税金によって運営されている、ということを母から聞いた。私はこの制度の名前は聞いたことがあったが、内容や税によって運営されていることは知らなかった。改めて考えると、この制度によって私はどれだけ救われたのだろう。病院で診察してくれる先生、処方される薬のおかげで、私は今元気に生活できている。もし、すべて自分で負担し、治療を受けるとなると治療の継続は厳しいのではないかと思った。私は「税」があるおかげで生きていると言っても過言ではない。私はこのような形で税の恩恵を受け、感謝している。

中学校で行われた租税教室で、税はみんなで社会を支えるための会費のようなものだと言われた。その話を聞いて私は、もう一つ違う考え方をした。税金というのは未来を創るための光ではないかと考えたのだ。税を納めるということは、形として見えるものもあるが、見えない方が多い。しかし、小さな光を私たちひとりひとりが灯すことで、輝く大きな光、つまり未来を創りあげることができるのではないかと考えた。

あと何年かすれば、私たちも消費税だけでなく本格的に税を納める立場になる。その時、税を納めることの意味、大切さを考え、これから自分たちが創り上げる日本を素晴らしいものにしていけるよう、国民の三大義務である納税の義務をしっかりと果たしたい。そして光を絶やさず、未来に繋いでいけるようにしたいと思う。

税が運ぶ優しさ

学校法人芝浦工業大学柏中学校 3年 鈴木 創太

昨年九月、台風による豪雨被害がぼくのおばあちゃんの住む町を襲った。忘れもしない、ぼくが前期末試験を控えた四日前の出来事だった。鬼怒川の氾濫により堤防が決壊し、たくさんの家や田畑が水没した。おばあちゃんの家は軒先まで水が来た。幸いにも水没は免れたが、ライフラインが広範囲で不通になったため、おばあちゃん家にいる家族は皆ぼくの家で数日過ごすことになった。水がひざ上まで来たというおばあちゃんの友人・知人は、自衛隊や消防の活躍により救出され避難所へと運ばれた。少し水が引き主要な道路が開通したころ、母と様子を見に行った。小高い橋の上から見た光景は、今まで見ていた景色とは程遠いものだった。家も、穂が垂れたままの稲も、乗り捨てられたままの車も、まだ水没したままだった。そんな中でぼくが見たものは、腰まで泥水につかりながら横一列になって水の中を探る自衛隊の人たちの姿や、現場でボートを出す消防の人たちの活躍、交通整理など往来を見守る警察官などの姿だった。

数日後、おばあちゃんは家が心配になり帰っていった。まだライフラインは不通のまま、町の中の各所では、給水作業や炊出しが行われていたようだ。日が経って、ぼくがおばあちゃん家に行く途中、目にしたのは、大量のゴミの山と消毒のための石灰だった。あれからだいたい一年が経ち、うそのように町はきれいになり、笑顔が戻ってきた。

もし、自衛隊や消防士の助けがなかったら、浸水した場所で高齢者や危険にさらされた人々はどうなっていたことだろう？交通混乱の中で誘導がなかったらどうなっていたらだろう？また、あの大量のゴミの回収・処理がなかったらどうなっていたらだろう？

私たちの税金には、社会保障関係、公共事業関係など様々な使い道がある。災害対策や町の整備や住宅支援、道路の整備、警察や消防などの公的サービスもそのひとつだ。

今、世の中では、町の特産品がもらえるというふるさと納税に人気が集まっている。今回の水害により、特産品のお返しができないにもかかわらず、以前にも増してふるさと納税額が急増していると聞いた。人々のあたたかい心に力をもらい、復興と被災者支援のかてになるに違いない。

「血税」という言葉を聞いたことがある。調べると、その言葉には歴史があるが、今では「国民の労力」という意味でつかわれるようになったとのことだ。でもぼくには、体を流れる「血液」のように思える。なぜならば、人の体に「血」はなくてはならないもの、それと同様に人々が汗水流して働いて納めた税金がめぐりめぐって人々のために社会の中で有意義に使われなければならない血液、それが「税金」だと感じたからである。

税金—みんなが幸せになれる手段

江戸川区立小岩第三中学校 3年 佐藤 由季子

東日本大震災から五年が経ちました。当時は小学生でしたが、テレビでは毎日、被災地の状況が流れ、とても怖い思いをしました。家では、もし東京で地震があった場合の家族の避難先や連絡方法などについて話し合いをしたことを覚えています。学校の授業で、今後首都圏直下型地震が起きる可能性がとても高いことを知りました。自然の脅威の前では、個人の力だけでは限界があります。震災では救助のため、警察、消防、自衛隊など多くのおみなさんが休みなく活動し、避難した方々への食糧や水の供給、避難場所の確保、仮設住宅の建設、壊れた道路、水道の復旧などを行っていました。これらはすべて税金によって賄われていることを知り、税金の大切さを実感しました。

東北では、道路や鉄道は九割程度復旧しているようですが、まだ災害公営住宅の建設が五割程度で、住宅を高台へ移転する造成は二割程度しか進んでいないようです。これらのまちづくりなどの復興費用は莫大であり、税金だけで賄えるか疑問でしたが、平成二十四年度から復興特別会計が創設されたことを知りました。財源は一般会計からの繰入金のほか、復興特別税や復興債を発行して確保することとなっています。これまで、私と同じ年代の人が多く被災したことを受け、私には何ができるのかを考えてきました。復興特別税は平成四十九年まで続くそうです。これなら私が働き、納税者になるまで間に合い、少しは役に立つことができそうなので、うれしく思いました。

また、私はニュースで見た話を思い出しました。それは、「自助、共助、公助」という言葉です。自助とは、自分や家族が自ら助け、守ること、共助とは地域、近隣が助け合うこと、公助とは国や都、区などの行政が救助や支援をすることです。少し意味が違っても知れませんが、私は税金とは「自助、共助、公助」であると思います。税金が教育、公共事業、社会保障に使われることは公助ですが、納税をすることは、みんなで支え合うことであり、最後は自分に返ってくるのだと思います。税金は、みんなが豊かに暮らし、幸せになるために必要な手段であることを、強く感じました。

そして、納税をするということは大きな責任を持つということです。今年から選挙権が十八歳になりました。三年後、納税できる立場になっているかわかりませんが、税金の使い道を真剣に考えている方に投票したいと思います。また、これまで税金によって充実した学校生活を送れたこと、毎日が幸せに暮らせたことに感謝したいと思います。

四年後には東京パラリンピック大会が開催されます。障害のある方をはじめ、すべての人が豊かに暮らせる社会を実現し、世界に誇れる東京とするためにも、納税の義務と責任をしっかりと果たせる大人になりたいです。

豊かで安心して暮らせる未来

学校法人大妻学院大妻中野中学校 1年 飯島 享奏

税金とは「みんなのために役立つ活動」や「社会での助け合いのための活動」に必要なたくさんのお金をみんなで出し合って負担するものです。つまりみんなが社会を支えるための会費といえます。また、もしも税金がなかったら、救急車が有料になり、医療費もすべて自己負担となり、ごみ収集も交番も有料となります。このように、税金がなかったら公共サービスを受けるのにすべての費用を自分で負担しなければならず、困ります。みんなが豊かで安心して暮らしていくために、税金はとても大切なものです。

では、税は具体的に何に使われているのでしょうか。主に三つに分かれています。

一つ目は公的サービスです。安全な生活を送るための消防や警察の活動にも税金は使われています。さらに綺麗なまちづくりのために行われるゴミの回収と処理にも税金が使われています。また、私の住んでいる町では、子どもが病院などで受診した医療費のうち、医療保険の自己負担額を助成する制度などがあり、そこにも税金が使われています。

二つ目は教育費です。私たちが普段使っている教科書や実験器具などにも税金が使われています。

三つ目は公共事業です。私たちが毎日水を使うことができるのは上下水道の整備がされているからです。そこにも税金が使われています。そして安全に通学や通勤ができるように、道路を整備するのにも税金が使われています。このように私たちが払った税金によって私たちの生活は支えられています。

しかし、私たちが払っている税金は高齢者の年金にも使われています。今は高齢者の人数はそれほど多くありませんが、二十一世紀半ばには二・五人に一人が高齢者となる超高齢化社会になるといわれています。また、日本の労働力人口は減少してきています。減少している理由としては、生まれてくる子どもの数が減っていることや、若い人たちの中でも働かない人が増えていることが考えられます。さらに、働き方も多様化し、会社に勤める正社員ではないフリーターやパートとして働く人の数が増加しています。つまり、これからの日本では少子・高齢化や厳しい財政状況を考え、豊かに安心して暮らせるための制度や持続可能な財政構造の構築が必要となります。そのためには、社会の変化に合わせて税のしくみも考えていくことが必要となります。具体的には、歳出面の改革とともに、必要なサービスを安定的に支える歳入構造の構築が重要となります。

豊かで安心して暮らせる未来のためには公平な税の負担と給付の関係について、私たち一人ひとりが考えることが大切です。

これからも、国民が気持ちよく、安心して安全に過ごしていけるような国が続いていくために、私も社会人になった時に、国に貢献できるような大人になりたいです。

税に守られ、税に救われる

大田区立御園中学校3年 金子 千尋

一歩家から出れば、きれいに舗装された道路、安全を守るガードレールや信号、点字ブロックがあり、少し歩けば、学校や図書館、病院がある。いたって変わりようもなく私たちの町にある日常。そのことに驚くことも目を輝かせることもない。でも世界に目を向ければ、これだけ充実した町づくりが行われている国は多くない。これも全て私たちの国は税金によって守られているためである。

私たち納税者は様々な所で税を収めている。一番身近なものとして消費税があげられるが私たちの知らないところで払われている税金もあるのだそう。例えば「入湯税」温泉に入る際に課税されるそうだが、ここに税金がかかっていることを知っている人は半分にも満たないと言う。他にもゴルフ場利用税、キャンプ場利用税、空港施設利用税、さらには復興特別法人税という東日本大震災による復興施策に必要な財源を確保するための特別措置で、現在は行われていないが、回収した税もあるのだそう。これだけ多くの税が課せられていると私たちの負担も多く感じる。それでも納税を義務化しているのは、国や地方自治体が私たち国民を守ろうとしてくれている意志の表れなのだと思う。もちろん国を安定させるためでもあるだろうし、それが私たちの安全につながっているなら、納税は大切なものだと思う。

実際に税で救われている人もいる。五年前のあの日、東日本大震災後に派遣された警察官が一人で立っている男の子に声をかけた。男の子は、学校の窓から自分を迎えに来た父が津波に呑みこまれていったところを見たのだと言った。警察官は持っていたパンを男の子に渡した。すると、男の子は自分で食わずにパンを配給用の箱に置きに行ったのだ。驚いた警察官に男の子はこう言った。

「ほかの多くの人が僕よりもっとおなかがすいているだろうから。それに、この町をすぐに元通りにしてくれる人がいる。」

この男の子の言葉が口づてで回り、ベトナムの新聞記者に伝わった。それが報道され、ベトナムで話題になり、ベトナム国民からの義援金が殺到したのだという。

男の子が語った希望は税があるからこそその希望である。税による国の支援で復興に希望をもてるという国への信頼感は、あれだけ絶望的なことが起きても希望が生まれるほど素晴らしいものだ。これは日本にとって、大きな財産なのだと思う。

税と聞くと、あまり良い印象をもたない人もいるだろうが、それは税について知らないことが多すぎるからだと思う。税を知り、税を考えることが今の日本国民として必要なことなのではないだろうか。税は日本の未来だ。

回覧板が手がかりに

伊勢原市立山王中学校 3年 中村 文哉

ふと目に留めた自治会の回覧板。周知依頼事項の欄に防犯灯の新設要望を促す一行があった。そうだ、三年前にも隣家の方から母が相談を受け家の近くにも新設されていた。僕達の、そして街の日常ささやかな箇所、そっと大切な税金は役立っている。

つい目に見えない、成果がこの手に伝わりにくい事に対し不平不満が集中するのが税金の使途のように思う。僕達が直接関われる消費税は実感が伴う。五%から八%へ変わった時も何かに還元される期待を持ってその三%の差を心の中で埋めていたように思う。そんな時僕は夕張市に思いを馳せる。

夕張に家族とスキーに訪れたのは財政破綻後だった。空港からバスで二時間弱。途中雪深い山を抜け、ひっそりと佇む炭鉱住宅跡を通り更に先へ進む。宿泊先では夕張の街の方々が丁寧に対応して下さった。しかし市民税、水道料、軽自動車税等が値上げされ、何より若い人達が街を離れて残る高齢者の負担が大きいとのお話だった。市内の六小学校三中学校も一校に統合されたそう。それを聞き、兄弟三人でお小遣いを出し合い、恥ずかしい程ほんの少しだが市へお渡しした。その際僕は驚き、そして嬉しくなった。何故なら、市の方からお渡ししたその使い道を選択できるとお話し頂いたからだ。兄弟で話し合い、学校図書を購入して頂く選択をさせて頂いた。僕達の気持ちがきちんとした形になることに心が躍った。昨年暮れに久しぶりに訪れた夕張で、現在でも苦しい財政下でありながら変わらない優しい対応をして頂いた。僕達に出来ることは限られているけれど、訪れることで住んでいる方々の負担が心身共に少しでも軽減できたらと願っている。訪れる度にアイデアも広がっている。夕張メロン関連で多種類の商品も開発されていた。きっと市では、市民からの大切な税金を未来へ繋がる発想の下でじっくり取り組まれていると思う。財政再建の道が少しずつ希望へと繋がることを祈るばかりだ。

税金と聞くと、確かに払うことへの切迫感が生まれるような気がする。しかし家から一步出れば、公道にも橋にもパトロールしてくれる消防団にも、一人一人の志が詰まっていると感じる。回覧板にはもう一つ、給付金の案内があった。消費税率値上げに伴う影響の緩和の為の案内だ。目に見えない返還ではなく、僕自身が周りを社会をよく見ようとすれば、こんなにもはっきりとした答えがたくさんあったのだと気付いた。そんな風に思いながら、僕は隣の家の玄関へ回覧板をそっと置いた。

未来のために

海老名市立柏ヶ谷中学校3年 角森 優実佳

私の父は朝早くから夜遅くまで働いている。母も家事をしながら仕事をしている。働いて得た収入から毎月税金はひかれている。私自身、買い物をした時に消費税が追加され予想金額より多くなり驚いたこともある。今まで税金に対し「払わなければならない」といったマイナスのイメージしかなかった。では、支払われた税金はどのように使われているのだろうか。

先日、足の痛みがあったので整形外科に受診した。その時、会計では健康保険証と医療証を提示したのみで支払いはなかった。予防接種を受けた時も自己負担はなかった。それは税金により負担してもらっているからだった。公立の小学校や中学校では、教育費は一人当たり小学生で約八十六万円、中学生では約九十八万円も税金が使われているらしい。それだけではない。税金は日々の安全を守る警察や消防の組織、道路や上下水道などの設備の建設、整備、医療福祉、教育などの制度の充実など、例を挙げればきりが無いほど多岐にわたり使われていたのだ。仮に税金からの財源が確保されない場合、公共サービスは受けられなくなるためごみはあふれ、警察も消防も機能しなくなる。教育は受けられなくなり、医療費は格段に上がる。道路がなく流通が麻痺する。人が人としての生活をしていくことが不可能になってしまう。

今までマイナスのイメージしかなかったが、税金により私達の生活は支えられ、守られているのだ。そう考えると税金に対してのイメージが私の中で大きく変わった。今まで当たり前のように毎日の生活を送っていたが、多くの人が納税しその積み重ねにより、私たちは今の生活を成り立たせることができるのだ。人が人を支え、支えられることにより安全にそして安心して暮らせる環境が築かれていたのだと。

日本は少子高齢化が進み、超高齢化社会を迎える。高齢者の中で生活に不安を感じている人が増えているらしい。高齢になればなるほど健康状態が悪くなり、収入が低くなる傾向にある。高齢化社会ということは、働きながら納税をする人の数が減ることになり、医療や福祉にかかる費用は確実に増えていく。しかし、だからといって、受けられる医療や福祉に制限ができてしまったり、その質が低下してはならない。全ての人が、どんな時でも継続して安心して暮らせるために公平に税金が使われなければならない。そんな大切な税金だからこそ無駄がないように、適切に正しく使われて欲しいと思う。そのためにも一人一人が税に対し正しい認識を持ち、税金の重みを感じてほしいと思う。

これからの未来を担う私達が、教育をしっかり受け、いずれ納税する立場になった時は誰かの幸せのために、そして自分自身の幸せのためにその使命を果たしたい。豊かで温かい未来のために。

「消費税増税を再延期」というニュースに、私は驚いた。今年の六月一日、安倍首相は、二〇一七年四月に延期していた消費税一〇パーセントへの引き上げを、二〇一九年一〇月まで再延期すると表明した。

消費税は、私たち中学生も納める機会のある税金だ。一九八九年四月に初めて導入された時には三パーセントだった消費税は、その後一九九七年四月に五パーセント、二〇一四年には八パーセントと段階的に引き上げられてきた。私にとって初めての消費税増税となった二〇一四年の時は、本を買っても文具を買ってもいつもより値段が高くなって、不愉快な気分だったのを覚えている。

しかし、消費税の増税について調べてみると、日本は今財源不足で、増税は避けられない状況にあると分かった。特に、高齢化社会の影響によって社会保障費は年々増え続け、国の歳出の約三分の一を占めている。そのうえ、国が抱えている借金は、今年六月末時点で、一千五十三兆四千六百七十六億円になり、すでに一千兆円の大台にのってしまった。この莫大な借金が、いずれ私たちの世代に譲り渡されてしまうのかと思うとぞっとする。少しでも早く増税して、国の財政を再建していかなければならないという現実があるのだ。

私には、九十七歳の曾祖母がいる。その曾祖母は、よくデイサービスを利用している。そこの介護士の方たちは、曾祖母に対してとても優しく接してくれて、

「今日はお風呂に入れてもらって、とても気持ち良かったよ。本当にありがたいね。」

と、曾祖母はうれしそうに話してくれる。介護の専門知識がない私にはできないことを、介護士の方たちはいつでも手際よくこなし、曾祖母の笑顔を届けてくれる。私は、いつも尊敬と感謝の気持ちでいっぱいだ。こうした福祉サービス事業も、消費税などの財源によって支えられているのだ。

今回、消費税増税が再延期されることにより、待機児童解消などの子育て支援策や、介護保険料の軽減拡大などの医療・介護の制度改革、低年金者に月最大5千円の給付、年金受給資格期間を一〇年に短縮等、消費税増税を財源として予定していた社会保障の充実策の実現が危ぶまれている。一体どうしたら、社会保障を充実させていくことができるのだろうか。

やはり、医療や介護、年金、子育てなど社会保障をさらに充実させていくためには、消費税増税が必要不可欠なのだ。私は、消費税の大切さを改めて実感した。そして、曾祖母を笑顔にしてくれる消費税の存在意義を理解することができた。

今後、例えば消費税が一〇パーセントに増税されたとしても、私はもう不愉快だと感じることはないだろう。曾祖母の笑顔と同じ笑顔で、消費税を納めていこうと思う。そして、私が社会人になったら、しっかりと納税し、より良い社会のために貢献していきたい。

恩返しは納税で

砺波市立庄川中学校 1年 土居野 心彩

私は、この春に、小児慢性疾患に指定されている病気になりました。その病気は、原因がまだ解明されていない難病です。告知された時は、なぜ、私が、と、病気になったことを受け入れらず、心の中に真っ黒いうずがまき、嵐の中にいるような気持ちになりました。

私は、国立大学病院で手術、入院することになりました。不安でいっぱいでしたが、看護師や検査技師の方が、少しでも私の心を軽くしようと丁寧に治療や検査の説明をしてくれ、そして、優しく話しかけてくれました。先生方も休むひまなく治療にあたって下さいました。私の不安をみんなが受けとめてくれました。そのおかげで落ちついて手術にのぞむことができました。

その後、手術は成功し、私の病状は回復に向い、無事退院することができました。我が家が支払った医療費は、あれだけの大手術にもかかわらず、わずかであったことを母から聞きました。そしてそれは、税金でまかなわれているものだと知りました。そのおかげで、より良い治療をうける選択ができ、治療に専念することができたのです。

「たくさんの人に支えられている。」

入院中に母から何度も何度も聞いた言葉を痛感しました。

治療をうけられたおかげで、二度の手術を乗り越えて私は健康を取り戻すことができました。私は、右手のまひがすっかり消えて、今、こうして作文をかけるようになったことを心からうれしく思います。税金は、私に未来と希望を与えてくれました。

世の中には、私の病気以外にも原因解明されていない病気がまだまだあります。より良い治療の研究や新薬の開発にもたくさんの資金が必要です。それだけではありません。大学病院には、たくさんの医学生が学んでいました。人材を育成するには、やはり資金が必要です。その資金は税金です。

医療費以外にも、教育、災害の復興、道路管理、治安の維持など、自分の周りを見わたすと、こんなにもたくさんの税金が使われていることに気づきます。それはどれも、より優しく安全で、快適な社会を作っていくためには必要なものです。

私は将来、バリバリ働いて納税します。そのためにも今、一生懸命勉強します。いつか支える側にまわりたい。これが、私ができる恩返しです。

私はがんばります。

中学生の私が持つべき自覚

魚津市立西部中学校 3年 梅原 那奈

「税金」と聞くと、最初に思いつくことは、消費税増税です。現在は五パーセントから八パーセントに上がっており、この先も十パーセントに増税されるとニュースで聞きます。私たち中学生が直接関係する税は消費税だけなので、増税と聞くと良い思いはしませんでした。しかし、私の父は公務員として働いているので、給料は国民が納める税金から支払われていると考ええると、意外に身近なところで直接関わっているのだと感じ、さらに詳しく税について調べるきっかけとなりました。

消費税を増税することによる最大のメリットは社会保障の安定化です。社会保障にも色々ありますが、そのうち「年金」を取巻く現在の日本の状況は、少子高齢化の影響で大きな問題に直面しています。少子高齢化で、働くことの出来ない高齢者が増え、働くことの出来る世代が負担する社会保障費が年々増加しているのです。その状況を、消費税で補おうというのが、この消費税増税の目的であり、それがうまく機能した場合には、国民にとって大きなメリットであると言えます。また、その増税される税の種類がなぜ消費税であるかという点、所得税や法人税に比べ、消費税は、国民全員に対し、広く薄く増税することが出来る税金だからです。子どもからお年寄りまで、さまざまな立場の人々から平等に税金を集め、社会全体で社会保障費を補おうという意図があるので

す。

しかし、デメリットもあります。増税によって物の値段が上がり、個人消費が減ることで景気が悪くなります。その結果、集められる税が減り、メリットである社会保障費を補うことすら出来なくなってしまいます。

私はまだ中学生ですが、この先、日本の社会を背負っていく責任世代となります。選挙権が十八歳以上に引き下げられたこともあり、ますます様々な問題を身近に感じるようになりました。少子高齢社会の真ただ中を生きる若者として、将来の日本の姿に責任を持つ必要があると思います。「まだ中学生だから関係ない」ではなく、中学生の私たちだからこそ、今のうちから税金などの日本の問題について、考えていかななくては、ならないのです。

私は、今回の税の作文を書いたことをきっかけに、日頃から、新聞の政治経済の記事を読んだり、テレビのニュースなどを見たりして、勉強していきたくて思いました。なぜなら、今のうちから税金についての知識を身につけておくことで、いざ有権者になったときに、自分が納める税金を正しく使ってくれる政治家を選ぶことにもつながると思ったからです。今は他人事に聞こえる税金も、将来は自分にも直接関係してくるので、自覚を持って、税金と向き合いたいと思います。

今日私は地元東海市の芸術劇場でウクライナ国立キエフバレエ団の公演を観てきた。優美なプリマの舞、華やかなコール・ド・バレエ、きらびやかな衣装…本当に美しく、まだ夢の中にいるような気分だ。

うっとりしながらパンフレットとチケットの半券を見ていて現実にはひき戻された。私のチケット、子供料金でなんと千円!?外国からのプロのバレリーナがあんなにたくさん出演してたのに!?安くない!?びっくりして母に聞くと

「東海市の企画の公演は市の補助があるからお値打ちなんだよ。」

「市の補助？」

「市の財政の中から文化振興のために予算が組まれているんだよ。」

市の財政？それはつまり税金が使われているということか。こんなに素敵な体験をさせてくれて本当にありがとう東海市！

私たちが学校で勉強するための教科書は無料で配られていることは知っている。みんなが納めた大切な税金を使っているのだから、教科書を大切にしっかりと勉強するよという話を度々きいてきたからだ。それは教科書だけではない。学校にあるパソコンもボールも図書室の本もすべて税金で賄われているのだ。でも日常生活においてあまりに身近なあらゆるところで使われているので、当たり前のことのように感じ、感謝の気持ちを持つことがなくなってしまっていたと思う。

今回のバレエ鑑賞をきっかけに、私の住む東海市が、立派な芸術劇場を建設し、心を豊かにする芸術の振興にも税金を投入できる、経済的にも精神的にもゆとりある街なのだと実感した。そしてそれは働いて税金をきちんと納めてくださっている方々に支えられているからこそできることなのだとことを認識し、改めて本当にありがたいことだなあと思った。子供料金が特に格安なのは、次の時代を担う私たちに勉強や運動はもちろんのこと、芸術に触れて感性を磨き豊かな未来を作ってほしい、という願いが込められているのだと思う。私はこの恵まれた環境に暮らせることに感謝を忘れず与えられた機会を大切に、期待に応えられるように成長していきたいと思う。

「高い」とか「取られる」とかマイナスイメージを持って語られることのほうが多い税金だが、私は自分の納めた税金が心豊かな社会を作っていくのに役立つと考えると、なんだか誇らしくも思える。そしてこんな風に使ってほしいなあといういろいろイメージもわいてくる。私も将来は一生懸命働いて、次の世代の子どもたちのためにも喜んで税金を納めたい。そしていつまでも平和で安心して暮らせる世の中が続き、基本的な生活プラスアルファの楽しみをみんなが持ち続けられる、そんな社会を作っていきたい。

当たり前前の生活を享受するために

朝日町立朝日中学校3年 飯田 真央

私の身近には、様々な税金がある。国に納める税金、県や町に納める税金、また、直接納めるものもあれば、消費税のように商品やサービスを購入することで納める税金もある。税金と聞くと、何か難しくて面倒である。そして、何となく嫌なイメージをもっていた。しかし、勉強してみると、とても大切な仕組みだと分かってきた。

現在、私が通っている中学校の土地、建物、水道、光熱費全てが税金で賄われている。生徒である私たちが使う教科書も同様である。さらに、私の住む三重県朝日町では十五歳に達した後の最初に迎える三月三十一日までは医療費が免除されている。この費用も元をたどれば税金なのである。朝日町は三重県で一番面積の狭い町である。この朝日町ですら、町民のために図書館があり、家の前の道路はアスファルトで舗装され、夕方には灯りのともる街路灯がある。全て税金のおかげである。私や家族が快適に過ごすことができるのも、全て税金の恩恵なのである。

税金の使われ方が分かってくるにつれ、分からないことも出てきた。日本は今後、人口が減少していくという。すると、税収は減少していくのではないだろうか。税収の減少に伴い、現在実施されている福祉政策、公共サービス、公共施設の維持などは大丈夫なのであろうか。反対の立場から考えてみると、公共サービスなどを維持するために、国民一人当たりの税金の負担は重くならないのであろうか。また、税金で賄われている警察や消防サービスはどうなっていくのであろうかと。

私が日々、安心して生活することができるのは税金の恩恵を受けているからである。諸外国と比較し、事件や事故の発生率が低く、紛争もない。全て税金のおかげである。私が生を受けてから今日まで、当たり前前に享受している、この平和。実は、視野を広げてみると、当たり前前ではないのである。税金により、守られているのである。

三重県では、伊勢志摩サミットが開催された。テロが起こることはないと思っていたが、自身がソフトターゲットになる可能性はあるだろうと思っていた。しかし、準備・運営・警備などに多くの税金が投入され、サミット開催地である三重県はもとより、日本国内でサミットに関する目立った事件は起きなかった。何も起きないことが当たり前と言え、当たり前前である。しかし、この当たり前前のことを当たり前前に実行することの困難さを、いったいどれ程の日本人が感じていたことであろう。

中学生である私には、国民にかかる税金が多いのか少ないのか、一元的に判断することは不可能である。しかし、当たり前前の生活を当たり前前に享受するために税金が必要であることは分かる。だからこそ、納めた税金がどのように使われるのか、関心をもって見守ることのできる自分でありたいと思う。

「確定申告せんといけんのじゃ。」

僕が生きてきた中で最も税の存在を意識したのは、数ヶ月前に祖父の確定申告の手伝いをしたときだろう。

ある日、祖父から電話があり、インターネットで確定申告をやってほしいと頼まれた。祖父は僕の近所に住んでいるということもあり、困ったことがあれば僕によく相談してくれる。祖父は八十歳にして車を運転するとても元気なおじいちゃんなのだが、パソコンには滅法弱い。そこで僕に白羽の矢が立ったわけだ。

そうはいうものの、僕は確定申告などやったこともなく、名前を知っている程度だった。出来る自信はあったが、税金に関わることなので難解な用語や操作が必要なのではと少し身構えていた。

早速祖父の家に行き、作業を始めた。ネット確定申告はe-Taxと呼ばれていて、そのメリットは何と言っても楽であることだろう。わざわざ税務署に足を運ぶ必要もないので祖父はこれを選んだそう。実際にやってみたら思ったよりもずっと簡単だった。祖父に渡された資料をもとに数値を打ち込んでいくだけで確定申告が出来てしまった。

そして無事最後の手続きも終わり、祖父もとても感謝してくれた。このことを通じて、僕は確定申告について興味が湧いたので自分なりに調べてみることにした。

そもそも確定申告とは一年間の収入や支出を税務署に提出し自分が納める所得税を決定するものだ。会社勤めの人には会社が申告している場合が多いので、存在を知らない人も多くいるらしい。税金といえば消費税が最も身近だが、実は国の収入で見ると所得税が消費税を上回っている。つまり確定申告はこの国になくってはならないものなのだ。しかし、確定申告の役割はそれだけではない。なんと医療費や保険料などが基準を上回る場合、申告によって所得税が差し引きされ、その負担が少し軽くなるのだ。これが今回申告をした理由の一つらしい。今年祖父は外出先で足を打撲するケガをしてしまい、医療費が例年よりも高くなっていた。しかし確定申告によってその負担はずいぶん軽くなったようだ。

この体験を通じて僕は「祖父がこうして元気に暮らしているのも税金があつてこそなんだ」と気づかされた。確定申告を実際に手伝ったことでその具体的な金額を知り、税金に対する実感が湧いた。納めるべき税金をきちんと納める。そしてその税が国を潤し、なんらかの形でまた還元される。当たり前のことだがそれが最も重要なことなのだろう。今回その税制度の一端を垣間見ることができて本当に良かった。

最後に確定申告という子供には滅多に出来ない体験をさせてくれた祖父に感謝したい。

日本の伝統と税

学校法人三田学園三田学園中学校 3年 達川 美優

「助六所縁江戸櫻」。赤い隅取の男伊達が、紫縮緬の鉢巻をキリリと結び、花道を闊歩する様は正に壮観。これぞ日本の伝統といえましょう。この国の文化を代表する「歌舞伎」。これにもまた、税金が使われています。正確には、独立行政法人日本芸術振興会が、歌舞伎を上演する国立劇場を運営するために、国からの補助金、出資金といった形で税金が使われているのです。約四百年もの歴史を持つ、歌舞伎を後世に伝えるために。しかし、税金とは、社会共通の費用をまかなうための会費であり、国民の生活をより豊かに、安全にするために使われるべきものはずです。では、国民の中でも一部の人達が楽しむような伝統芸能に、税金を使う理由はどこにあるのでしょうか。また、直接の関わりがないのなら、これらの文化に税金を使わなくてもよいのでしょうか。私は、伝えられてきた伝統や文化に国のお金、ひいては私達国民のお金が使われるべき理由があると考えます。古くから伝わるこれらが今に存在することによって、日本の、根本的な何かを支えられているような気がしてならないからです。私がそう考える理由は三つあります。一つ目は、これらの伝統や文化に、私達は日本人として誇りを感じる事が出来るということです。自分の国に、他の国との比較や、相異という点に関係無く、誇れるものがあるということは、とても尊いことだと思います。そういった自国への陽的感情が、この国をより良いものへしようという大きな意思の流れにつながってゆくように感じられるのです。二つ目は、日本の、海外における文化的価値を守るため、という理由です。日本は世界で最も長い歴史を持つ国とされ、現在ではその長い時の中で生み出された、それこそ歌舞伎のような、特徴ある文化が、多くの外国人を魅了しています。観光業の発展は、経済に大きな影響をもたらし、他国の日本への関心を高めて、結果的には外交上の日本の立場にも関係してきます。政治や経済に関わる物事、その源の一つとして、文化が挙げられるのではないのでしょうか。そして三つ目は、これらが「日本」という国の性格を形づくるものであるということです。近代的な建物、次々生み出される流行や、統一的な気質。しかし、その奥にある雅と粋が、この国を新と旧を併せ持つ、鮮やかなものになっているのだと思います。

文化を尊重し、伝えてゆくことはとても大切だと思います。しかしそれは容易なことではなく、現在、失われつつある伝統や文化も少なくありません。時の流れによって私たちに身近なものではなくなってしまったことも一因でしょう。もしかしたら私達は未来、失われた文化に思いを馳せることになるのかもしれない。そうならないためにも、日本を鮮やかに保つためにも、私たちの税金を、伝統の保持のために使う必要があると思います。

税金のおかげ

湖南省立石部中学校3年 谷村 和哉

「なぜ、子どもが消費税を払わないといけないのか？」

消費税がなくなれば、欲しい物が安く買えるのになと何度か思ったことがあります。なぜ、税金を払うべきなのか、何のために使われているのか分からず、僕にとっての税金のイメージは、あまり良いものではありませんでした。

夏休みの家庭科の課題に、自分の成長をまとめる「自分史」作りが出されました。これをきっかけに、僕は初めて「母子手帳」を見ました。母子手帳は、妊娠が分かると住んでいる市町村から配布されるらしいです。中を見ていくと、僕が生まれる前から生まれた後のいろいろなデータが記入されていました。その中でビックリしたのは、僕が生まれるまでの通院回数です。僕が、

「こんなに病院にいったの？」

と聞くと、母はうなずきながら、

「病院に行くと、赤ちゃんが元気に育っていることが分かり安心するけど、結構お金がかかったよ。」

と返してきました。しかし、市から健診の補助があったり、出産後に出産手当金がもらえて、とても助かったそうです。予防接種も、国が決めて薦められているものは、公費負担となっていました。僕も、受けていました。子どもの健康を守るために、生まれてくる前から、僕たちに税金が使われていることを知りました。消費税なんてなくなればいいのにと思っていた自分自身が恥ずかしくなりました。僕が元気に生まれて健康に育っているのは、税金のおかげだと思ったからです。また、小学校入学までは、医療費も全額公費負担だったと聞きました。僕は三人兄弟なので、母はとても助けられたと話していました。

そして今、僕は中学校に通っています。授業料も教科書もお金はいりません。教科書の裏を見てみると、「この教科書はこれからの日本を担う皆さんへの期待を込め、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と書いてあります。一人一人に、机と椅子も用意され、何不自由なく勉強をすることができます。このような恵まれた環境で学校生活を送ることができるのも税金のおかげなのだと思います。

僕は今まで、税金についてあまり考えることはありませんでした。しかし、母子手帳をきっかけによく考えていくと、世の中にあるもののほとんどが税金で賄われているのだと思いました。税金は、納税者一人一人の大切なお金が集まったものです。だから、大切に使われるべき存在です。まだまだ税金について知らないこともあるので、これからもっと意識して考えていこうと思います。今の僕は、税金に支えられ、お世話になっていることばかりです。だから、今は一生懸命勉強して、社会人になってしっかりと税金を納め、社会を支えられる一人になりたいです。

「税金って何？」と聞かれた時、皆さんは何と答えますか。私は、まだ幼いところに聞かれた時、あまりうまく答えることができなかった。それは、私にとって税は、遠い存在だと思っていたからだ。ただ、日々の生活の様々な形で納めている税が、日本の社会の為に、そして私達が、健康で文化的な暮らしを送るために使われているのは知っていた。しかし、中学校生活最後の、今夏に、税に感謝しなければいけないと思った出来事があった。

東日本大震災。そう名付けられた巨大地震は、あまりにも多くのものを奪っていった。私は震災後、いったい自分には何が出来るのだろうと深く考えた。そして、一つの考えにたどりついた。私は、歌が大好きで、歌がもたらす力もすごく大きなものだと思っている。だから、実際に東北に行って、音楽を届けたいと思った。だが、そう簡単にはいかない。京都から東北への道のりは、ほど遠く、そうとうなお金も必要になる。まだ小学四年生だった私には、やはりどうすることも出来なかった。でも、決して諦めたわけではなかった。私は、遠くても音楽は届くと信じ、小学五年生から、市少年合唱団に入団した。これが、私の人生を大きく変えた。この合唱団は、平成二十九年に創立六十周年を迎える。その記念事業の一環として、東日本大震災の被災地である東北に行く事になった。東北に行けると聞いた時は「やっと夢が叶う」と思い、涙を流して喜んだ。実際、東北に行くにあたってどれくらいの旅費が必要なのかを母に聞いた。母に「旅費の一部を市の税金から負担していただいているのだから、よく感謝して、より多くの事を学んできなさい。」と言われた。私は、それを聞いて、国民の皆さんが、一生懸命に働いたお金で行かせていただくのだから、より多くの事を吸収し、心を込めて演奏しようと思った。

あの震災から五年たった今、実際に東北に行って、全く復興が進んでいないことに、衝撃を受けた。仮設の市役所や交番などがあり、あれも全て税金で建てられていると知った。そこには「復興特別税」という税が関わっていた。この税は、東日本大震災からの復興に当てる財源の確保を目的として、所得税、住民税、法人税の三種類の税に上乗せする形で、平成二十五年から平成四十九年までの二十五年間に渡って納税するものである。今、税金は復興を支える大きな柱となっている。

これまで私は、税金というものを深く考えたことがなかった。しかし、今回の東日本大震災によって、税金とは納めるだけでなく、人を助けてくれる素晴らしいものだ気付いた。

私も将来は納税者になる。自分の払っている税金が、誰かの役に立っていると思う事で、未来はきっと明るくなる。そんな社会を目指して、与えられた恩恵に感謝していきたい。

命を救う税金

王寺町立王寺南中学校3年 笹原 千里

「税金なんて、なければいいのに。」正直、小学四年生くらいまで私はこう思っていた。おつかいをたのまれてスーパーへ行くたびに「税金がなかったら、余ったお金でお菓子が買えるのに」と思っていたからだ。

そんな私の意識を少し変えてくれたのは、クラス換えで同じになったある女の子だった。彼女の父親は救急車に同乗する医師だったので彼女と仲良くなった私はその仕事の話がおもしろくてずっと教えてもらっていたのだ。

ある日彼女は「日本みたいに救急車を呼んでもお金がかからない国はめずらしいんだって」と教えてくれた。実際その話は本当らしく、アメリカではもちろん、共産国である中国などたくさんの国では救急車を呼ぶと何万円もお金がかかってしまうのだという。日本ではなぜ無料なのだろうか。それは、税金でまかなわれているからだ。私はこの事を知っても、特に何も思わなかった。ただ、税金って悪い事ばかりじゃないんだなとは思った。

それからしばらくして、事件がおこった。私の父が会社でたおれてしまったのだ。あの時の驚きと不安でいっぱいだった気持ちは今でも忘れられない。父は救急車で近くの病院に運ばれ、入院した。一ヶ月後退院した父がずっと私に言っていた、「救急車が、すぐ来てくれて本当に助かった」は十回くらいは聞いたと思う。そのたびに思い出すのは税金で救急車の費用がまかなわれているということ。いらないと思っていた税金が私たちを救ってくれたのだ。

税金は多くの人を救い、希望をあたえてくれている。例えば、国が認定した難病患者の方、障害者の方などの医療費の一部もしくは全額を公費で補助するケースがある。公費には税金もふくまれている。さらに国立病院・県立病院・市立病院は税金などで創立・運営されている。他にもたくさんのところで税金が使われている。税金はなくてはならないものなのだ。

税金を払うということは、助け合っていることなのだと思う。私の父が乗った救急車はきっと私の知らない人たちが払った税金で動いていた。私たちは直接ではないけれどたくさんの人に助けられたのだ。だから、今度は私が誰かを助けたい。大人になったら、しっかり働いて、しっかり税を払いたい。

最近私はスーパーで会計をしているとき、少し考えてしまう。今払った税金はほんの少しだけれど、誰かの役に立っているのかもしれない。税金はすごいと思う。命を救うこともできるから。

税務署体験を通して

和歌山市立貴志中学校2年 瓜生田 彩月

私は今年の夏、忘れられない貴重な体験をしました。それは、中学校の総合学習で税務署へ職場体験に訪れた時の出来事です。

職場体験一日目、税務署がどんな所なのか分からなくてとても不安でした。しかし、職員の方が私たちに親身に教えてくれたので安心しました。体験の内容は租税教室を開いて小学生に税金を知ってもらおうというものでした。そのため職員の方が私たちに税金について詳しく教えてくれました。その話の中で、驚いたことや、心に残ったことがありました。

私が驚いたのは、和歌山県に独自の税金があると知ったことです。その税金は紀の国森づくり税というもので、和歌山県の森林を守り育て、次の世代に引き継いでいくために使われていると聞きました。和歌山県の豊かな自然も、税金があるからこそ守られているということに気付きました。改めて、税金の素晴らしさを実感しました。

そして、体験中に心に残ったことは、一億円の重さを模擬紙幣で体感したことです。一億円を初めて持った感覚は重く、軽々と持ち上げることができませんでした。ただでさえ、一億円は大金だと思います。それなのに、学校の建設費用は約十三億円、つまり今持ったお金の約十三倍もの税金が必要になることを知り、衝撃を受けました。私たちが充実した生活を送るには多くの税金が必要だと分かりました。

これらのことから、税金は私たちの身近な所で使われることを学びました。そして、今度は学んだことを小学生に伝えるためにチームで何度も練習し、どのようにすれば税について分かりやすく説明できるのかを話し合いました。

いよいよ迎えた本番、とても緊張しましたが税のおもしろさが伝わってほしいという思いを胸に、小学校で租税教室を行いました。小学生は私たちの話を真剣に聞いてくれ、終わった後の達成感は大いいものでした。そして、授業を受けた後の小学生の感想には、

「税のことがよく分かった。」

「税金はやっぱり必要だと思った。」

など書いてくれ、小学生が税について理解してくれたことがなによりうれしかったです。今回、学んだことを発表させてもらえる機会を作ってくれた税務署の方に感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、この体験を通して税金の大切さを知り、税務署で働く人の姿を見ることができました。舗装されたきれいな道路を歩いたり、ゴミ収集車がゴミを持って行ってくれたり、無料で授業を受けられたり……。外に出てみると、当たり前のようにも思えてしまうことが税金がないとできないことがよく分かりました。税金は、社会の人々が力を合わせて、私たちの生活を安全で豊かにするためのお金です。そのことを忘れずに今回の体験で学んだことを今後に活かしていきたいと思います。

人はなぜ働くのか

近畿大学附属広島中学校東広島校 3年 木内 香緒

父も母も仕事をしている。私は一歳の時から保育所に入り、働く両親に代わって保育所の先生に育ててもらった。

時々テレビで「子どもが小さいうちは、母親が育てるべきだ。」というコメントを聞くことがある。私は昼間はほとんど保育所の先生に育ててもらい、平日は、遅く帰ってくる父とはほとんど会うことができなかった。また、母が保育所に迎えに来てから寝るまで、せいぜい三時間程度しか同じ時間を過ごすことはなかった。テレビのコメントが真実だったら、私は小さい頃から母と過ごせない可哀想な子どもなのだろうか。私は一人っ子なので、いつも賑やかな保育所で友達と過ごす時間が大好きだった。物心がついた時から母は働いていたので、それが当たり前のことである。だから自分がテレビで可哀想と言われるような子どもだった、とは思っていない。

母は、いつもこう言っている。

「働くことは日本に住む人の義務。税金を納めることも義務。働くことができない特別な事情が無い限りは、働かないと。これまで自分より年上の方が苦労して納められた税金で教育を受けさせてもらったのだから、同じようにお母さんが働いて、次世代の教育を守っていかないと。あなたも大きくなったら、当たり前前に働き、納税する人間になりなさい。働くことは恩返しであり、自分の子どもだけではなく、日本で暮らす未来の大人たちへのプレゼントでもあるんだよ。」

こんな立派なことを言いながらも、

「正直たまには仕事を辞めて、のんびりしたくなる日もあるんだけどね。」と笑いながら話す母は素敵だと思う。

私は今、中学三年生だ。私はこれまでみんなの税金にどれだけ育ててもらったのか考えてみた。

生まれる前 母子手帳、パパママ学級

生まれてから 予防接種、健康診断、熱が出た時に行った病院代

保育所に入ってから 保育所の建物、給食、おやつ、先生の給料、遊具、工作の材料など数えきれないほどある。

小学生 校舎、体育館、教科書、安全な通学路、先生の給料、プールの水、遊具、大好きだったウコッケイのエサなど、たくさんある。

中学生 教科書、安全な通学路

自分が想像しただけでも、私が大きくなるまでに誰かが納めてくれた税金に支えられてきたことがわかる。その税金のおかげで、私は勉強し、友達と楽しく過ごし、安心して生活することができている。

これから私は、だんだん大人に近づいていく。選挙権が与えられるのが十八歳になったので、あと四年で大人の仲間入りだ。まだ将来やりたいことは、漠然としているが、これだけははっきりと言える。

将来の夢 働き、税金を納める人になる。

税金で守られている「当たり前」

島根大学教育学部附属中学校 1年 片岡 愛望

中学生になってもらった教科書を見ると、文字数がぐっと増えていました。「教科書は一字一句もらさず読みなさいね。」という母の口癖が頭に浮かび、頭がクラッとしました。

そんな時、新聞で、紛争地域で教科書が配られたという記事を読みました。子どもたちに「何が一番したい？」と聞くと、「学校に行って勉強がしたい!」という言葉が返ってきていました。そして、その記事の最後には、教科書を受け取り、笑顔になった子どもたちの姿がありました。平和な日本では、学校に行くのも、教科書が無料で配られるのも当たり前のことです。当たり前が当たり前でないことの大変さに衝撃を受けました。

小学校の社会科資料集に、日本国民の三大義務である納税・勤労・教育の記載があったことを思い出しました。そこで、私は両親に、なぜ働いているのか聞いてみると、「社会に少しでも恩返しをしたいからだよ。」と答えてくれました。

両親は、今の職業に就くまで国の税金のおかげで、様々な知識を習得したり、勉強する環境を得ることができたりしたのだ、ととても感謝しています。二人は、皆が教育を均等に受けられるということが、とても尊いことだといいます。

この時、あの母の口癖は、テストでいい点をとらせるためではなく、大勢の人が私たちのために出してくれたお金で作った教科書を、無駄にしないための願いだったことに気がつきました。そう思うと、文字や写真がぎっしりと詰まった教科書には、いろいろな人の想いも詰まっているような気がしました。

平成二十七年四月から、税率が5%から8%に上がりました。いろいろなものが値上がりし、私は自分のお金がどんどんとられてしまうような気がして、とても惜しく感じていました。今は、そんな自分がとても恥ずかしく、幼稚に思えてきました。

私はまだ中学生で、税金の恩恵を受けてばかりです。祖父母も年金の恩恵を受けており、両親ですら、子どもの医療費の免除や義務教育の恩恵を受けています。私が大人になり、税率が今より上がり、私の子どもが不満を口にした時、私は私の両親のように、子ども自身に、今の「当たり前」はどうして成り立っているのかを気づかせてあげることができると思います。

現代の私たちは、与えられることばかりに慣れてしまっているのかもしれない。無料で配られる教科書にありがたみを感じず、当たり前と思うことがその証拠だと思います。今年小学一年生になった妹は、学校で教科書をもらい「ただでこんなにたくさんの教科書がもらえるんだ。」と目をキラキラさせながら、喜びいさんで帰ってきました。それが、私にはとても新鮮でした。妹も私自身も、学校で配られた教科書を大切に、今ある制度に感謝して、勉学にしっかりはげもうと思います。

森林税について

山陽小野田市立高千帆中学校 1年 新野 光

ぼくは、毎年夏休みに、厚東川ダムの上流にある親せきの家に遊びに行きます。その時にいつも気になることがあります。それは、親せきの家の裏にある山が、年々荒れてきていることです。しかも、最近では、「危ない山に入らないでね。」と言われるほどになってきてしまいました。

行く途中では、何年か前の大雨の影響で崩れているがけがあり、今もそのままになっています。親せきの人に聞いてみると、「山の持ち主の方が亡くなってしまったり、高齢になったりして、誰も山の手入れをしなくなったからだよ。」と教えてくれました。

ぼくの住む山口県では、手入れの行き届かない森林を次の世代の人に引き継ぐために、森林の整備を目的とするための税を県民に支払ってもらおうというしくみがあります。「やまぐち森林づくり県民税」というもので、「安全で快適な暮らしを守るための森林の整備」などに使われています。

税の作文を書くためにこの県民税について調べているときに、あることを思い出しました。

ぼくが小学生のころ、里山で竹を切り倒し、その竹を使って竹炭を作ったり、竹のコップで水を飲んだりするイベントに参加したことがありました。「里山を守ろう」というそのイベントもこの様な税金を使ったものだとして初めて知りました。その時主さい者の方が、「不要な竹を切ることによって、里山を健康に保つことができるんですよ。」と言っていたのは、こういう意味だったんだと改めて思いました。

ぼくの父親は会社員なので、直接山の手入れをしたりすることはありませんが、税金を支払うことにより、地球温暖化の防止や水源の確保、土じょうの破壊を防ぐなどの大きな役割を果たしている山や森林を守る手助けをしている事を学びました。

税金とは「私たちが健康で文化的な生活を送るために、個人ではできない様々な仕事をするための費用」とあります。

私たち一人ひとりが直接できることは限られています。きちんと納税をすることによって、私たちが豊かに生活していくことが出来るのだと学ぶことができました。

僕も将来働くようになったら、しっかりお金をかせいで、きちんと納税をして、少しでも役に立てるような大人になりたいと思います。

家族としての税金

田野町立田野中学校3年 村田 百合香

「高知県はひとつの大家族やき」のキャッチフレーズとともに、高知県をアピールするキャンペーンが全国で始まっています。今回、作文を書くにあたって、税金という制度も、この「家族」という枠の中で考えることができるのではないかと思えるようになりました。

税金は、子どもからお年寄りまでを支える「命綱」とも言うべきものです。私も買い物をするたびに、消費税という税金を支払っています。どうして、働いていない中学生の私も税金を支払わなければならないのだろうと思っていました。消費税が五パーセントから八パーセントに上がったときは、苦しい思いをする人が増えるのではないかと思いました。しかし、日々の生活の中で、私は、税金で作られた道を歩き、税金で立てられた公立中学校に通っています。今回、作文を書くにあたり、公立中学生である私に一ヶ月に十三万五千円もの教育費がかかっていることを初めて知りました。一年間では、百六十万二千円もかかる計算になります。毎日使う机やイス、そして教科書類など、すべて、教育費として私に費やされているのだと理解したとき、税金の持つ意味が本当に私の中に落ちてきました。誰かが払ってくれた税金のおかげで、私たち中学生は、義務教育が無償になっています。日本という「大きな家族」の誰かが、次の誰かのために支払ってくれた税金。深く考えれば、こんなにありがたい制度はありません。家族ですから当然、私が大人になったら次の小中学生に使ってもらえるよう税金を支払わなければなりません。そこは、責任だと思っています。

最近、東京都知事が私的なものに公費を使用したというニュースが報道されました。罪とはならなかったようですが、それで辞職を余儀なくされました。一般的な会社に置き換えてみれば、大変な罪になるような気がします。私はまだ中学生で、選挙権もなく、自分の力で候補者を選ぶことはできません。税金は、大人たちが必死で働いたお金です。日本という大家族一人ひとりを暮らしやすくするために使うお金のはずです。知事といえども、自分だけの思いで使っていないものではないはずです。知事の行為は日々懸命に働く人を冒瀆しています。それほど大きな意味を持つのが税金だと思います。

私の家にも祖母がいます。年金をもらい、何不自由なく暮らしています。年金にも税金が使われているようで、きっと、祖母も若い頃は、きちんと税金を納めていたのでしょう。急速に少子高齢化が進む中、私たちが大人になる頃には、二人で一人の高齢者を支える社会になるそうです。

私は、大きな日本という一つの家族を支えられるような大人になりたいと思います。必死で働いたお金を次の世代へとつなぎ、自分も支えてもらえるような社会という家族。その家族の一員になりたいです。

必要な税金について

善通寺市立西中学校 3年 竹内 梨沙子

消費税一〇パーセント実施の先送りが決まる前後でメディアの税関連の報道を見聞きする機会が増えたこともあって、私は今までほとんど関心がなかった税金について意識するようになりました。現在日本は少子高齢化の問題を抱えています。これから二〇三〇年にかけてさらに超高齢化が進展するといわれています。高齢化で一番気になるのが医療や年金といった社会保障の問題だと思います。社会保障は税金によって支えられていることを学校で勉強しましたが、既に国家予算の三分の一が社会保障費になっているにもかかわらず、予算が足りないのが現実だと知り、将来がとても不安に感じるようになりました。今でも足りない状況なのに、これからもっと必要になることが明らかだからです。将来の社会保障のために、安定的な税収の確保が必要なことは間違いないと思いました。

消費税は一パーセントで約二兆円位の税収になると聞いたので、もし社会保障費をそれだけで賄おうとすると最低でも一五パーセントが必要になるそうです。実際に欧州の消費税は一〇～一五パーセントあるそうなので、将来的に日本でも消費税が一〇パーセント以上になるのは仕方がないだろうと思います。しかし、消費税は目に見えて家計の負担が増えるので、上がるときびしいと考える人は多いと考えます。特に低所得者には税負担の増加は深刻です。また、年金も財政面での対策で受給年齢がだんだん高くなっています。実際には高齢者になってとても困っている人が多いと予想します。本来は今まで通りもらえるようにしてほしいのですが、現状ではその分を払うのに必要な税収が確保できていないので、実現できないことが分かり、悲しくなりました。必要な医療や年金といった社会保障に必要なだけの税金は絶対必要だと考えるので、国民全体でそれを考えないといけないと思いました。そして、税率をできるだけ上げないための政策には国民も協調した行動をしなければならないと思いました。

一方で私は今年に入って、企業に税金がかからないタックスヘブンといわれる税制の国に世界中から多くの企業が籍を置いて、税金を免れる対策をしていることを初めて知りました。その中には日本の企業もあると聞いて、とても驚きました。それと同時に税金が足りないのにひどいなあと憤りを感じました。どれだけの税金が減ったかは不明ですが、消費税の税率を検討するとともに、税金逃れは許してはいけないと考えます。

税金は国民の義務ですが、みんなで負担するのが基本だと私は思います。今後は生産年齢人口の割合が減るので、家計の負担や逆進性も問題があっても、景気や為替相場の影響が少ない消費税のような安定的な税金は必要だと考えます。国民生活を考慮しての税金の検討には私は今後も賛同したいと思います。

私に出来る事「税金を無駄にしない」

直方市立直方第三中学校 1年 稲波 有珠華

「今、この瞬間^とを生きること。」毎日、ただそれだけしか考えられない人々が、世界に多くいる事を、果たしてどれだけの人が理解しているのでしょうか？先日訪れた「世界報道写真展」。そこで観た写真は、私に大きな衝撃を与えました。イスラム国所属の戦闘員の焦げた肌に軟膏を塗る医師。新天地を求めて長い旅路の途中、眠れる場所を見つけて睡眠をとる難民の子供達。そして、中でも特に印象に残ったのは、内戦の続くセルビアからハンガリーへ渡ろうとするシリア難民の男性が、国境に延びる有刺鉄線の間から乳飲み子を受け取ろうとする、まさにその瞬間の写真でした。月明かりの下で、まるでこの窮地を理解しているかのように手足を縮めてすやすやと眠る子供の表情に対して、男性が心配そうに辺りを確認している緊張感のある瞳に、彼らに語る未来は無論、明日もないのだと思いました。彼らには、恐らく私達が厄介だと考える税金などありません。否、かつて制度としてはあったのですが、内戦が続くその国で、破壊されたあの町の惨状では、行政などを機能させることは不可能です。

私は今まで、税金が無い国を羨んでいました。しかし、あのときに観た数知れない“沈黙が語る瞬間”に、今はむしろ税金があることに感謝しています。それは、未来を考えられる私がいて、美しい町に住み、安心・安全な暮らしを容易に感じられる今があるからです。未来に続く「今」が、税金によって守られているのならば、厄介な税金と考えるより、税金とは平和を築く上でとても重要なものだと考えるべきではないかと思います。

その上で、より良い未来にするための方策を、私達は考えなければなりません。社会の授業で学習した「国債」。国が税込だけで必要な支出をまかなう事が出来なくなると、やむを得ず発行されるものが「国債」なのですが、国債は国の借金ですから、いずれ返済しなければなりません。借金のために、更に借金をするようなことを繰り返しては、より良い未来は築けないと私は思います。だからこそ、税金は有効活用する必要があり、私達は無駄遣いに厳しい目を向けるべきだと思います。無駄の無い税金の使い方は、将来に渡って私達が私達のために考えなければならない課題です。また、少子高齢化が進行している現代社会では、労働人口の割合が減少することで、労働者への税負担が重くなり、課題が膨らむことも予測されます。国民が気持ち良く国民の義務を果たすためにも、私達一人ひとりが自らの納めた税金がどのような目的に使われ、どのような効果を上げているのか、絶えず関心を持ち、正しい税の使い方について考えることが大切だと思います。

税金が投じられて配付されている教科書。「無駄」だと言わせない使い方。それが私にできる「税金の最大の活かし方」だと思います。

私には天国に優輔という弟がいます。超未熟児として産まれたため、弟は3か月半の間ずっと病院のNICU（新生児集中治療室）にいたそうです。先に退院した母は母乳をあげるためにいつも弟に会えましたが、私と兄はNICUに入れなかったのでもいつも待合室で待っていました。弟ができるのを楽しみにしていたのに、産まれても全然会えないので私は早く赤ちゃんに会いたい、とよく泣いていたそうです。

そんなある日、NICUの先生が

「今日は特別に入ってもいいよ。」

と、私と兄を呼びにきてくれました。泡で手を消毒して柔らかい白衣とマスクをつけて、ドキドキしながら部屋に入っていました。するとそこにはたくさんの機械と保育器が並んでいました。中には赤ちゃんから見えるようにふたの上に家族の写真や絵が貼ってある保育器もありました。

弟は細い腕や鼻にいっぱいチューブをつけて寝ていましたが、保育器の穴から手をなでると目を覚まして私を見てくれました。その時初めて家族5人全員がそろいました。両親も兄もうれしかったと思います。弟は私が想像していた以上に小さかったけれど、とてもかわいくてなぜか恥ずかしかったのを今でもはっきりと覚えています。

弟は家に帰ってくることはできませんでしたが、NICUで元気に大きくなって退院できる赤ちゃんもいっぱいいたそうです。

昔なら助からなかったかもしれない命がたくさん救われているのは医療の進歩だけではありません。NICUのように月に何百万円もかかる治療費が医療保険制度のおかげでほとんど税金から支払われていることを今回初めて知りました。学校から配られた資料には国の支出で一番大きいのは社会保障だと書いてありましたが、この医療保険制度も社会保障の一つだそうです。

中学生の私たちが納める税金と言えば買い物をした時ぐらいですが、調べれば調べるほど税金に守られて暮らしていることがわかりました。

私には「絶対保育士になってやる」という夢があります。命を預かる仕事は責任も重いし苦勞も多いと思いますが、小学生の頃からこの目標は変わっていません。ずっと待っていた弟と一緒に遊んだりする夢はかないませんでした。小さな子どもが大好きなので必ず努力して自分の仕事にしたいです。そして大人になって税金を納める立場になったら、今よりもっと税に関心をもつことが大切だと思います。税金は何よりも尊い命だって守れるものだから。

税金が支える普通の暮らし

長崎市立桜馬場中学校3年 植野 爽子

十四歳の今、改めて税について考えると私はあの日のことを思い出します。

二〇一一年三月十一日、小学校三年生の時私は宮城県仙台市で東日本大震災に遭いました。ガス、電気、水道、全てのライフラインがとまりました。私はその時初めて、蛇口をひねれば水が出て、スイッチを押せば火や明かりがつくことが決してあたりまえではないんだと思い知らされました。

体育館での四日間の避難生活では、備蓄されていたアルファ米で作ったおにぎりや水、ビスケットなどが配られました。仮設トイレが設置されたり、給水車が来たりと様々な支援を受けました。電気が通ったときには、避難していた大勢の人々から歓声が上がったのを覚えています。その後、余震が落ち着いて家に帰ってみると食器棚や冷蔵庫の中身がほとんど飛び出て割れてしまいました。それを片づけ、まとめてごみ置き場に持って行くと、あふれんばかりのごみの山ができていました。

三日後、長崎の祖父母の家に避難することになりましたが、仙台空港が津波で使えなくなってしまっていたためバスで山形市へ向かいました。ホテルに着き、洗面所の蛇口をひねって水が出てきた時はとても感動し、嬉しくなって何度も顔を洗ったのを覚えています。長崎では三週間ほど、あたりまえの生活に喜びを感じながら日々過ごしました。学校の再開とともに仙台に戻ると、ごみ置き場はすっかりきれいになり、ガスや水道も元通りになっていました。

今振り返ってみると、食べ物の支給や仮設トイレ、給水車、ごみの回収など、いざというときに私たちの暮らしを支えてくれたのは全て税金がもとになっていました。それは普段の生活においても同じです。

深刻な被害をうけた地域を何度か訪れた時には、復興のスピードは決して速いとは言えませんでした。少しずつ変化していていることが感じられました。道路にそのまま残っていた船が撤去されていたり、土地をかさ上げして新しい工場が建ち始めていたりするのを見ると気持ちが明るくなりました。

しかし、未だに仮設住宅で十分な暮らしを取り戻せていない方々がいるのも現実です。社会福祉や公共事業など、色々な分野で使われている税金ですが、5年たった今でも苦しい生活を強いられている方々のためにより多く使われたらいいなと願っています。

つい最近では、熊本でも大きな地震があり、大変な被害をうけた方々がたくさんいます。熊本も復興には、まだまだ長い時間と多くのお金がかかってしまうでしょう。みんなが普通の幸せな暮らしを送ることができるよう、税金が適正に使われていくことを願うばかりです。

復興、そして明日を支える税

熊本市立出水中学校 2年 平野 帆南

夏休み、窓から外を眺めていると、青空よりもブルーシートのかかった青い屋根が目飛び込んできた。

四月、私たちを二度もおそった熊本地震。それにより多くの方々が被災し、私たちの当たり前は突然、途絶えることになった。

私はあの日、家族と供に避難所に身を寄せた。私たち熊本県民が、あの日過ごした不安な夜を忘れることは決してないだろう。

しかし翌朝、避難所に自衛隊の炊き出しがあっていた。あの不安をかき消してくれた炊き込みごはんの味も私は忘れない。その後も各地に備蓄されていた支援物資が次々と熊本に届いた。全国に税金によって準備されていた支援物資が熊本地震を支えたのである。そして、各地から税金に支えられているパトカー、救急車、給水車などが続々とやってきた。支え合うという支援の輪で、普段通りの生活に、一步一步戻っていった。私は、全国から寄せられた支援を通して、助け合いの税を知り、思いやりの税を実感した。税が復興の一つとして熊本地震を支えたのだ。

二〇一三年、東日本大震災からの復興に当てる財源として「復興特別所得税」ができた。基準所得税額の二・一%分の金額が課税されている。そして私が何より感動したのは、日本全国の人々が復興のために納税していることだ。それも二十五年間、復興を支え続けるのである。復興税には、長い時間をかけて復興に取り組もうとする国の決意が表れていると思う。私は、税は国と人々の生活を支えているものだと授業で習っていたが、今回の熊本地震を通して改めてその税金の根本を知ることになった。税金は、私たちの安全な暮らしを支えているのだと思う。

熊本のシンボルである熊本城は今、屋根や石垣がくずれ落ち、変わりはてた姿になっている。熊本城が元の姿に戻れるまでには、およそ二十年以上の月日とばく大な資金がかかるといわれている。みんなが笑顔の美しい熊本へ戻るまでの道のりはまだまだ遠い。

復興特別所得税の課税が終わるのは二〇三七年、私は三十四歳になっている。今度は私が「助け合いの税と思いやりの税を受け継いで、今回お世話になった方々をはじめ、日本中のみなさんの明日を支える。だから、私は納税の義務をきちんと果たせる大人になりたい。そして、復興した熊本城の姿を、熊本の姿を、納税者の一人として見届けたい。

一人は皆のために 皆は一人のために

宇佐市立長洲中学校3年 常盤 優菜

それは突然やって来た。背中が突き上げられる激しい揺れに慌ててベッドから飛び起きた。揺れた時間はわずかだったと思うが、その時は長く長く感じた。体験したことのない恐怖で体が震えたのを今でもはっきり覚えている。平成二十八年四月十六日未明、震度七を観測する熊本地震が発生。私の住む大分県宇佐市でも震度四の揺れが確認された。

その日から、テレビや新聞などで地震関連の記事を見聞きする生活が続いた。昼夜を問わず、一刻を争う行方不明者の捜索に当たる自衛隊や警察、消防の方々の姿や避難所の中でケガ人や病人たちを介護する医療スタッフの方々、その他大勢のボランティアの方々の動きに一喜一憂した。また、損壊した幹線道路などのインフラ復旧の速さには驚きと日本という国のすごさを痛感させられた。被災者に物資や食料を供給したり、インフラ整備には税金が投入されている。私は、これまでこのようなことについて考えることもなかった。

この震災をきっかけに、ふと自分の身の回りのことを考えてみた。まず、朝起きて中学生の私は学校へ行く。通学路の道はきちんと整備されている。校舎や体育館などの施設は、耐震化がされており、安心して勉学に励むことのできる環境である。そういえば、冬に流行するインフルエンザの予防接種に補助金が出るようになって母が喜んでいたのを思い出す。

こういう環境が当たり前だと思って生活していた私。もし、このような生活がなくなったら私はどうするだろうか……。想像することすらできない。憲法は、私たちが健康で文化的な最低限度の生活をする権利を定めている。学校で社会の時間に習った時は、他人事のように思えたことだが、今は日本国憲法の下で基本的人権が保障されながら生活していることを実感できる。そして、この環境が維持できるために税金が使われている。

先般、消費税増税が先送りされた。私が唯一支払っている税金は、消費税である。増税が見送られた時は正直、とっつもうれしかった。少ないおこづかいの中で少しでも浮かせることができるからだ。でも、今は違う。増税を先送りするのは間違いだと考え方が変わってきた。少子高齢化の現在、税収はますます減少してくるだろう。私たちの未来のためにも今から少しずつ必要な財源は確保しとかなないと負担が増すばかりだ。

確かに低所得者等には、辛いかもしれない。しかし、救済策などを講じる手段はいろいろあると思う。何もしないでは前に進まない。熊本の被災地では、悲惨な状況下でも、皆で励まし合って、復興に取り組んでいる。納税も人のためでもあり、自分のためでもある。

一生付き合っていかなければならない税金。正しい知識を学び、理解し、明るい未来につなげていきたい。

税が良くする私達の地域

宜野湾市立宜野湾中学校 3年 長浜 菜桜

私達の住む沖縄県には、美しい海や緑、美味しい食べ物や素晴らしい伝統文化があり、それらを求めて県外や国外から毎年多くの観光客が訪れる。そして沖縄県では、観光客が楽しく快適に過ごせるように様々な工夫をしているそうだ。そのことを私が知ったのは、父と那覇の街を歩いている時のことだ。「免税店」という看板がいくつも目についたので父に聞くと、外国の人がここで買い物をすると税が免除される、と教えてくれた。そのような店を増やすことで、外国からの観光客の人達も不便することなく買い物を楽しめることが分かった。そこで私は、日本人が免税店で買い物をする場合はどうなのか疑問に思い、再び父に尋ねた。すると父は、

「日本人は自分の国や県を良くする為に税は払わないといけないさ。」
と言った。その父の言葉は、私の税に対する考えを「税＝義務」から「税＝自分の住む国や地域を支え、さらに良くしていくもの」へと変えるきっかけとなった。

税について少し興味を持った私は、この作文を書くにあたって、自分でも税について調べてみることにした。すると、税の役割として「文化の振興」というものがあることを知った。「振興」とは、「盛んにする・活発にする」という意味で、税が私達の身の回りの役に立っていることはもちろん知っていたが、国や地域の文化を活発化することにも繋がっていることを知って驚いた。ここ沖縄県に、沖縄の自然や文化を求めて毎年多くの観光客が訪れるのも、今働いている大人達がしっかりと税を納めて沖縄を支え、産業を活発にしてくれているおかげなのだと気づいた。もし税が十分に納められていなかったら、観光業も衰え、誰も沖縄に来てくれなくなってしまうのだ。そのことに気づき、納税してくれている大人への感謝の気持ちと共に、責任も感じられた。というのも、私の将来の夢は、沖縄の観光に携わる職業に就き、沖縄の魅力をたくさんの人に伝えることだが、観光業にこんなに深く関わる税のことを、今まで知らずともしなかったのだ。沖縄の良さを伝えるより先に、税をきちんと納められる立派な大人になるべきだと思った。これからの社会を担う私達が、自らの住む場所をもっと素晴らしいものにして行こう、という思いが大切だということを痛感した。

誰だって自分の住む地域や故郷は好きで、大切な場所だと思う。そんなかけがえのない場所をさらにいい場所に、他の地域に住む人からも好かれるような場所にできたら…。そう考えると、その思いを実現させてくれる税は、すごく大切なものに思えてくる。

「税が上がると物の金額が上がるから嫌。」とかそういう考えも、「その自分達のまちは暮らしやすく、また一つ良い所が増えた。」と思うと、税に対するイメージも大きく変化するのではないだろうか。

未来の力になるために

豊見城市立伊良波中学校3年 大城 杏奈

私は税金で生きている。

小学校六年生だった私が両親に連れていかれた先は大きな医療センターで、そこで私は自分の身体に病気があることを知らされた。「一型糖尿病」という、普通に生活していればあまり耳にしないうような病名に、まだ学年が上がったばかりの私は不安になった。そのまま入院し、数日経ったある日渡されたのは二本の注射器。それは私の体内で分泌できなくなってしまった「インスリン」というホルモンを補うものだと知らされた。その日から私は、この二本の注射器に助けられながら生活している。

入院しながら考えていたことのひとつに、「お金」の問題があった。これから打ち続けなければならない注射代や退院してからも通うことになる病院代が、ノートと鉛筆を買うような安さではないのは、小学生の私にもわかっていた。

ある日私が母に聞いてみると、意外な答えが返ってきた。私になくてはならない薬の大半は、多くの人が納めている税金によって助けられ、私のもとに届いているという。それは税金というものをあまり意識してこなかった私にとって、その意味と大切さを知る、ひとつのきっかけとなった。

中学生の私たちにも税金は身近なものである。特に消費税などは店で物を買うときによく目にする。中学生の感覚としては、買いたい物は高くなり余計にお金を支払わなければならないし、払った税がどこに行くかも知らず、ただ邪魔なものに感じる人も多いのではないだろうか。

最近、その影響か納めることが義務とされている税金を滞納する人も多いと聞く。それは今の私たちのように、税金の意味を理解しないまま大人になってしまった身勝手な人が増えているのも原因ではないだろうか。生活に困り税金に回せるお金がない人ならまだしも、国民として、社会人としての義務を果たしていない大人が増えていくことを防ぐためにも、私たちはもっと税金について理解を深めなければならないはずだ。

私たちが暮らすこの社会を支えているのは税金だ。しっかりとした教育を受け、国や地方によって整備された道を歩くことができる。突然の事故や病気に多額の医療費がかかることもあるかもしれない。その時私たちを助けてくれるのは、税金を基に作ることができた制度もあるだろう。不安になった六年生の私を支え、今楽しく生活することができる身体の中を巡っている薬のように。

これから私は大人になり、国のために税金を納める日も来る。その責任を果たすことが、今まで私を助けてくれた税金への感謝と、これからの希望を実現できる社会の力になるだろう。次は私が支える番だ。いつか私が、不安になった誰か一人を救える力になれるよう願っている。

平等になるために

富良野市立富良野西中学校3年 中村 董

二〇一六年七月二十六日、神奈川県相模原市の障害者施設で刃物による殺傷事件が起きた。障害のある入所者十九人が死亡、二十六人が重軽傷を負った。私は直接、関係なかった。けれど、「障害者なんていなくなればいい」「障害者を殺せば税金が浮く」そう供述した犯人が許せなかった。私には障害を持つ大叔父がいるからだ。

大叔父は七十三歳。知的障害を持っている。話は少ししかできないけれど、私たちの名前を呼んでくれる。話しかけると笑ってくれる。私はそんな大叔父が大好きだ。今年の夏休み、施設に入っている大叔父に会いに行った。いつも通り話しかけ、大叔父の好きなじゃんけんをして時間を過ごした。その時にふと、考えてしまった。「もし、あの事件がこの場所で起きていたら」と。とても怖くなった。どうして犯人は「障害者なんていなくなればいい」「障害者を殺せば税金が浮く」なんて悲しいことを思い、事件を起こしたのか。私にはわからなかった。私は障害者に関わる税金について理解したいと思い、インターネットで、調べることにした。

税金の多くが社会保障に使われていることは社会科で習った。社会保障とは医療、年金、介護、福祉などの公的サービスのこと。だが、大叔父や障害者支援施設も税金に助けられていることを詳しくは知らなかった。障害者控除と言って障害者には税が軽減される事、特定の障害者は国から給付金を支給されている事、施設は国からの補助金で運営されている事など、多くの税金が障害者やその施設などの福祉のために使われていた。私は、素直にすごいと思った。今まで、税金の使い道は「社会保障・公共事業・教育など」と大まかにしか知らなかったが、大叔父や障害者を持つ人が税金に助けられている事、普段納めている税が役に立っている事を知り、嬉しくなった。

でも、このような税金の使い道は理解されにくい。インターネットで「障害者、税金」そう調べると、「無駄」と言う言葉がたくさん出てきた。身近に障害者がいない人は「障害者は働かないのに。税金の無駄だ。」とってしまうのかもしれない。でも、そうではない。人は教わらなければ、勉強はできない。だから税が使われ、教育を受ける。病気にかかったら、火事が起きたら、事件が起きたら、一人では解決できない。だから、税がある。人には必ず自分ひとりではできないことがある。それが一人では生活できない障害者になると「無駄だ」と言うのは間違っているのではないだろうか。むしろ、支え合って生きるための、一番正しい使い方ではないだろうか。

私は、税金は人を真に平等にするためのものだと思う。人は皆、平等だ。だが、どうしたってできないことは誰にでもあるし、人それぞれ違う。だからこそ、そういう人たちがほかの人との違いを少しでもなくすために、真に平等になるために、税金が必要なのだ。

命を支える税

湯沢市立稲川中学校 2年 佐々木 遥菜

私の祖父は、障害をもっている。生まれつきの障害ではなく、交通事故によって、突然障害をもつことになったのだ。

それは、私が生まれる前のことのように。バイクに乗っていた祖父が、トラックとぶつかったそう。幸いにも命は助かったが、脊椎に傷がつき、それ以来、後遺症で、体の痛みやさまざまな身体の不調で苦しんでいる。

十数年たった今でも、体の痛みで顔をゆがめることがあるが、長くて辛いリハビリを経て、今はゆっくりではあるが、杖をついて歩いたり、自分の身のまわりのことは一人でできるようになった。

夏休みに入り、祖父の通院に母と行くことになった。その時、初めて障害者手帳を祖父から見せてもらい、その存在を知った。

祖父は、その手帳を見ながら、

「じいちゃんは、これで生かされてるんだ。」

と私に言った。

どういう意味か分からず、その時は、

「そうなんだあ。」

と、一言だけ返したが、祖父の言葉が私の心の中に残った。母に、

「生かされてるって、どういうこと。」

と尋ねたら、障害者手帳を持っている人たちが、たくさんの支援が受けられることを教えてくれた。

障害の級によって受けられる支援の内容は、かわってくるそうだが、祖父の場合は、通院のための交通費や医療費、更に一日に飲んでいく十数種類の薬代の多くを負担してもらっているそう。

これらの祖父が受けている障害者のための支援は、全て税金が支えていると聞いて、驚いた。

その税金は、祖父とは全く関係のない人たちが納めてくれている大切なお金なのだ。この時、初めて祖父の言った「生かされている。」の意味が分かった気がした。

もし、税金制度がなく、高額な医療費がかかっていたら、祖父は病院へ行き、多くの薬をもらうことはためらっていただろう。そして、今よりも苦痛を感じて生きていたのではないか。

この時、私は祖父の命を守ってくれている税金制度をありがたく思えた。

「税金」という存在を今まで気にしたことがなかったけれど、自分の家族がきっかけとなり、身近なものとして考え、知ることができた。

一人一人が納めている大切な税金は、いろいろな所で、様々に形をかえ、多くの人たちを支えている。

私も大人になったら、社会人の一人として責任をもって納税したい。そして祖父が支えられているように、障害をもつ人や困ってる人たちも安心して暮らせるよう、命を支える税で明るい社会をつくっていきたい。

世界一の長寿大国、日本。現在の国家予算は百兆円に迫り、収入のうち税金分は五十八兆円。支出では医療費が四十兆円を超え、国家予算のおよそ半分。その四十%、十六兆円の財源が税金。どの数字も、中学生の私には想像できない金額ばかりだが、家計簿で考えると実感がわいてくる。財布の中の十六%、納税額に換算すると約三十%が病院代に消えている状況だ。医師である父は、当然ながら医療費問題に詳しい。税金によって成り立つ医療の現場で働く親から興味深い話を聞き、決して他人事ではない税と医療の複雑な関係を、私も垣間見ることができた。

国内では様々な課題を指摘される日本の医療制度だが、欧米からは非常に高く評価されているらしい。軒並み二十%近い消費税が定められている各国の専門家は、八%の消費税で日本と同じ医療サービスを提供するのは奇跡に近いと口を揃えるそうだ。日本では、怪我をすれば外科へ、湿疹が出れば皮膚科へ、と患者が自由に受診先を決め、専門医の診察を受けることができる。医療のフリーアクセス制と呼ぶそうだが、日本では当たり前のこの制度が、欧米ではそうはいかない。例えば英国では、どんな病気であれ、かかりつけ医を先に受診しなければならず、専門医に紹介されるまで数カ月かかるのが通常だ。真に必要な人だけが高額医療を受けられる仕組みである。国民が平等に医療を受けられるよう、安価な医療保険を徴収する国民皆保険制度も、日本が世界に誇る一つであるが、民間保険が主流の米国では、個人が納める保険金額に比例して、処方される薬にさえ格差が出る。

医療費が、国の支出の中で大きな割合を占めるのは世界共通だ。消費税率を高く設定し国の収入を増やす。医療サービスを効率化・適正化し支出を減らす。この両輪を同時に回してはじめて、欧米各国は税と医療の問題をやっと舵取りしている。高い消費税だけでは、医療の質を維持できないのである。

日本は八%の消費税で、高水準の医療を国民に提供しているが、今の税収で巨大な出費を支えるのは限界に近い、と父は言う。最近、医療費抑制の影響から、必要な薬を充分処方できなくなり、程度によっては癌患者ですら手術待機になる、とも話していた。

消費税はどの国においても要であって、最も重要な国民の命と健康を護る医療費の財源になっている。私達は、税率だけにとらわれず、より公平かつ効果的な税の在り方を考えると同時に、めりはりのある予算配分について主体的に議論していかなければ、素晴らしい日本の医療制度が崩壊する危険性に直面しているのではないか。問題を放置すれば、やがて全てが若い世代に重くのしかかるのだ。

税金は安いまま永く健康に生きたい。誰だってそう思うに違いない。しかし、将来を見据えた新しい判断が求められている現状から、逃げることはできないのだ。

「税金」と聞けば、誰もがまず最初に「消費税」を思い浮かべるのではないだろうか。なぜなら小学生でも中学生でも、買い物をすれば必ず消費税をはらうからである。日本の消費税率は八パーセントと、世界的に見ると低い方である。例えばスウェーデンの消費税率は二十五パーセント。イギリスの消費税率は二十パーセント。ただし基本税率は高くても、生活必需品に対しては税率を低く設定するなど、国民生活に負担がかからないように配慮されているようだ。これだけを見ると、「日本は税金が安い方なのだ。」と勝手に思ってしまうそうだが、実は法人税や所得税など、集められている全ての税金を合わせると、日本は世界で二番目に高税率な国である。ちなみにイギリスは三位、スウェーデンは六位と、いずれも税金が高い国のランキングのトップ 10 に入っている。高税率のヨーロッパ諸国は、社会福祉が充実しているなど、「幸せな国」というイメージが強いが、私は日本も充分「幸せな国」だと思う。なぜならこの国で暮らしていて、治安も良く、安心して教育を受ける事ができ、医療も福祉もそれなりに充実していると感じているからである。

私は最近、税金を身近に感じる出来事があった。中学生になり、通学路で小学生の時にはなかった、押しボタン式の信号機を利用するようになった。私が利用している信号はどうやら前から押しボタンが壊れていたらしく、私だけでなく友達も困っていた。しかし、直すにも誰に頼めば良いか分からず、そのまま毎日通学をしていた。しかし今回税金について調べているうちに、信号機は税金でまかなわれている事、警察署に報告をすれば修理の手配を行ってくれる事を知り、早速警察署へと足を運んだ。案内された交通課で、地図を見せてもらいながら場所を説明し、押しボタンが壊れている事を伝えた。一通り話し終えたところで、対応してくれた方から「見落としている所が多くて申し訳ない。教えてくれてありがとう。」と言われた。確かに、いつも信号を利用する私たちが言わなければ、壊れている事には気付けない。もし、変わらない信号に待ちくたびれて、車が来ないから、と信号無視をしてしまったら、交通事故になりかねない。気付いた人が行動を起こさなければならぬ。

税金とは、地域の人が安全に、幸せに暮らすためのお金でもある。みんなが幸せに暮らすために、私達はその使い道を知り、正しく使われているかどうかを考える必要がある。また、税金がどれだけ私達の生活を豊かにしてくれているかを考える事で、当たり前前に税金を支払う事ができると思う。正しい使い方に関心を持つ事、みんなが幸せに暮らせる納税のしくみを考える事が、私達に必要な事であると思う。

取られるではなく納める

宇都宮海星女子学院中学校2年 兼目 凜

私は七月、宇都宮税務署に職業体験として四日間行きました。職業体験の場所として私が税務署を選んだのは、税務署がどのような仕事をしているか知らなかったからです。税金を、税務署でどのように扱っているのかを知りたいと思いました。

四日間、いろいろなお仕事を体験させていただき、考えたことがあります。

一つは、税についての正しい知識を身につけておかなければならないということです。贈与税の模擬申告書を作成したとき、贈与が行われる二者の関係や、贈与を受ける人が成人しているか、未成年であるかなどによって、税率が変化することを知りました。納税には細かい決まりがあり、それは税の種類によって異なるということを知らない人も多いと思います。教えてもらってない、というのではなく、自ら知ろうとする姿勢の大切さに気づきました。

二つ目は、税金は税務署によって調査され、適性に管理されていることです。スーパーなどのチラシの中で、お酒に関するものがあつたら付箋をつける作業をしました。これは、チラシに示されているお酒の値段と、実際にお店で売られている値段が違ってないかを調べるためにしているのだと教えていただきました。税務署の方が、直接お店に行き、適正な価格で売られているかを調べていることに驚きました。

また、納められた税金が記録された書類は、店舗ごとにファイルに入れられ、倉庫に保管されていました。保管されているファイルの分厚さからは、長期間にわたって管理されていることが感じました。税務署の職員の方々は、広い倉庫のどこに、どのファイルがあるのかを大体は把握していました。税務署の方々の仕事は大変だと思いましたが、その仕事ぶりから改めて税金の重要さを実感しました。

職員の方が、「税金は『取られる』ではなく、『納める』ものだ」とおっしゃっていました。消費税率が引き上げになることが報送されていますが、私はなぜ高くなってしまうのか疑問に思っていました。ですが、その言葉を聞き、私は「取られる」と意識が強かったのだと気づきました。消費税は、景気や人口の変化に左右されにくいため、安定した税収が見込めること、特定の人に負担が集中することがないこと、財源調達力が高いことなど、利点が多くあります。利点を評価し、「私たちの生活のために使ってください」という気持ちを込めて「納める」ことが大切だと思います。

今回の税務署での体験は、「納税するのは将来のことで、私にはまだ関係ない」と思っていた私の考えを変える機会となりました。これからは買い物をするときにも、納税者としての自覚を持って財布を開きたいと思います。

ありがとう、税金

群馬大学教育学部附属中学校 2年 島崎 ねね香

「ありがとう、税金。」

私はいつもそう思いながら生活している。しかし、始めからそう思っていた訳ではない。そう思い始めたのは、三年前のある出来事がきっかけなのである。

三年前の冬、私の二歳下の妹が急性心筋炎という心臓の病気にかかった。始めはただの嘔吐下痢症だと思っていた。しかし症状は悪化し、熱も下がらず体は弱っていく一方だった。心配した父と母は妹を大きな病院に連れていき、すぐ入院することになった。入院してもさらに病状は悪化して東京の病院へドクターヘリで行った。東京の病院では何度も何度も手術を受け、二週間ほどで群馬の病院に帰ってこれた。群馬の病院で私は一ヵ月ぶりに妹と面会することができた。妹の病室で妹を見たとき、私は声が出なかった。妹の体は大きな機械につながっている管だらけで、腎臓も悪くなってしまったため体全体がむくんでいた。妹の近くに手を近づけると、か細くなった手で一生懸命私の手を握ってくれた。私の目には涙が溢れていた。早く退院してほしい。私はそう心から思い、妹の手を強く握り返した。

それから半年ほどするとすっかり元気になり退院し、今は三ヵ月に一度の通院と、二、三種類の薬を飲んでいる。

ここで私は疑問に思った。病気の治療費や入院費、今の通院にかかっているお金はいくらくらいなのか。多分、相当な金額だろう。私は父と母が私と妹に隠れて大変な思いをしているのではないかと心配になり、父に聞いてみた。すると父は「そうだね。妹の命を助けるためには何千万円ものお金がかかったんだ。でもそれらは社会保障でまかなわれたんだよ。」と教えてくれた。私は税金がこんなことで使われていることに驚いた。と同時に感謝の気持ちが込み上げてきた。税金のおかげで私の妹の命は助かったといっても過言ではない。

社会保障は、医療、年金、介護、福祉などに使われている。つまり私達が安心して生活できるのも社会保障のおかげなのである。もし社会保障がなかったら、私の家は莫大な医療費を払わなければいけなかったのだ。

社会保障の財源は、私達が納めている税金である。中学生の私は、物を買うときの消費税などでしか税を納めることができないが、それだけでも社会を支える一人となることができるのだ。

ありがとう、税金。あなたがいなかったら妹は今いないだろうし、私も普通の生活はできていないだろう。今はまだ納税する機会は少ないが、大人になって納税する時にも税金への感謝の気持ちを忘れずに、社会へ貢献できる人になりたいと思う。

感謝の恩返し

行田市立西中学校 2年 金野 竹志

「痛い！」

七月の上旬、バッティング練習をしようとした僕の右脚の付け根に激痛が走った。何度も怪我を経験してきた僕でも、今回の痛みはただならぬ不安を覚えた。すぐに、病院に連れて行ってもらった。診断名は「右上前腸骨棘裂離骨折」全治二ヶ月。ひどい痛みがひけるには約一週間とのことだった。野球の大きな大会二つ控えた僕には、辛い宣告だった。松葉杖での生活を送ることになった。

少しでも早く治したい僕は、熱心に、病院に通った。駐車場から病院、診察室や検査室へと移動が多く、松葉杖では、ままならないため車椅子をお借りした。母に車椅子を押してもらっていたが、トイレを使う際自分でこいでみた。しかし、思うように進むためには練習が必要だった。車椅子専用のトイレは、今まで広々と感じていたが、車椅子ではちょうど良い広さであった。少しの段差からの振動が痛みを引き起こし、そっと車椅子を押してもらえるよう頼んだ。このように、自分が体験してみてもはじめて、細かなことに気づけるんだと改めて実感した。もし、僕が車椅子を押したり、体の不自由な方のお手伝いをする機会があったら、今回のことを思い出し、気遣えたり、声をかけられるのではないかと嬉しさが沸いてきた。

痛みがひき、歩けるように回復しつつあるときに、母の実家に帰省した。成田空港までバス、電車と乗り継いで行った。階段を昇ることはまだ困難で、エレベーターを利用した。今までは気にとめていなかったスロープやトイレ、エスカレーターなどが体の不自由な方やお年寄りにとって、使いやすいのか、数は十分なのか気になった。遠くなりすぎないように設置され動線が配慮されているところもたくさんあれば、利用が少ないところは、まだまだ不十分だと感じる場所もあった。

日本の国家予算の三分の一が社会保障にあてられていると社会の授業で教わった。公共事業や公共施設の建設もそうである。地方のそれぞれの市町村に委ねられている事業もある。僕の住む行田市では、学校のトイレの改修工事が行われ、教室にエアコンが設置された。今回の怪我同様に、医療費の負担を心配せずに治療に専念できたのも子ども医療費制度のおかげである。

今回の怪我を通して、僕は痛みと向き合いながら、家族や周りの方々の支えを体いっぱいを感じ取ってきた。そして、当たり前前の生活が送れることに感謝している。しかし、その当たり前前の生活を、そして社会を構築しているのは、まさに税金のおかげであると気付いた。毎日大変な思いをしながら働く方々の大切なお給料から支払われる税金。その大切な税金があるから、私たちの毎日の生活が維持されているのだ。この感謝の気持ちを忘れずに、将来は僕が納税者となって社会に恩返しをしていきたい。

納税は未来を創るプロジェクト

伊奈町立南中学校 2年 福島 水柚

「消費税って何故こんなに高いのだろう。」

と日々感じる中で、私は税金に関して良いイメージを持っていませんでした。また、テレビで政治家が税金を無駄遣いしているというニュースを見る度に、税金なんて払わなくても良いのではないかと思っていました。しかし、税についての作文を書くにあたり税金のことを学ぶと、私の考えは大きく変わりました。

まず私が一番驚いたことは、私達中学生はたくさんの税金によって支えられているということです。教科書などの教材費や学校のコンピューターなどの施設費、先生の給与、電気・水道代など多くの税金により私達は学校で勉強することができます。また税金は、道路の整備や警察・消防・救急やゴミの処理など、生活に必要な多くのことに使われていることも分かりました。税金がなかったら、当たり前だと思っている生活が当たり前にならなくなってしまいます。

次に印象に残ったことは、納税制度は飛鳥時代からあったということです。そして、人々が平和に平等に暮らすために、長い年月をかけて色々な工夫がなされ、今の納税制度に至っているということが分かりました。

社会の授業で納税は「国民の義務」と習いました。私は、自分で働いたお金を国に取られてしまう事を疑問に思っていました。税金のことを知れば知るほど「税金は私達のため、日本のために使われていること」が分かりました。また、税金は発展途上国の子供達のためにも使われていることを知り、国を超えてみんなの役に立っていることが分かりました。私は、納税は義務とはいうものの、皆がみんなを助けるための「協力」なのだと思います。自分が働ける時はしっかり納税し、加齢や病気で働けなくなった時にはその恩恵を受ける、税金はみんなの保険のようなものだと思います。

私は近い将来働くようになります。是非、この「納税」というプロジェクトに参加できる人間になりたいと思います。そして、私の周りの人達にも税金の大切さを知ってもらい、一人一人が責任を持ってこのプロジェクトに参加してもらいたいと思います。

また、税について学んでいくうちに、納税についての問題点もあることが分かりました。少子・高齢化が進み納税者が減っているため、税収が少なくなっているという問題です。高齢者の増加に対し、若者が減少しているため、高齢者一人当たりを支える若者の数が減っているのです。次世代を担う私達は、より良い未来を創りたいと思っています。そのために私達が今できることは、納税により私達が勉強できる環境を整えてくれている大人達に感謝し、しっかりと勉強して将来社会に貢献できるようになることだと思います。また、税について興味を持つことも続けていきたいです。

みなさんは「ドクターヘリ」を知っていますか？患者さんのいる場所から救急センターまでの距離が離れている時に使われるヘリコプターです。私が「ドクターヘリ」の存在を知ったのはかなり前です。映画で病院から遠い所にあるデパートで火事が起こり、たくさんの死傷者を出しながらも「ドクターヘリ」が飛びました。私はその時、「ドクターヘリ」が税金によって導入されていることを知りませんでした。

一般に「税金」と言うと、私たち中学生が唯一納めている「消費税」というものが一番身近にあると思います。ではその納められた税金が何に使われているか知っていますか？国の支出の約3割を占めているのは、「社会保障」です。なんと先程の「ドクターヘリ」も、この「社会保障」の事業として税金が使われているものです。

税金の使い道は学校、医療、雪国ならではの除雪、ごみの処理、エネルギー対策など挙げればきりのないほどたくさんあります。その中で、「ドクターヘリ」に税金を使うのはとても素晴らしいことだと思います。税金によって、命が救われるのです。

青森県八戸市立市民病院救命救急センターでは、平成20年度からドクターヘリを運用していて、それから着実に運航実績を伸ばし続けています。医療の中で医学略語の中に、「プリベンタブルデス（防ぎ得た死）」という言葉があります。この八戸市民病院でのプリベンタブルデスは、二〇一三年ついにゼロになりました。地方で事故等があった時、ドクターヘリはとても役に立ちます。大量出血や心臓や呼吸が停止している緊急事態では、一刻を争うからです。心臓停止後三分で死亡率五十%、一〇分で一〇〇%まで上昇します。なので、陸路で時間がかかるような遠方に患者さんがいる時、救急車よりも速く搬送することができます。

一度だけ、私の中学校にドクターヘリがやってきたことがあります。中学校の近くに搬送しなければならない患者さんがいて、ドクターヘリを着陸させる場所がなかったために学校の校庭をかしてほしいということでした。その日予定されていた避難訓練は中止になり、すぐに教室の窓の外にドクターヘリが飛ぶのが見えました。その時私は、ドクターヘリがどんな時、どんな風に役に立つのかということを知りませんでした。この作文を書く時に税についてのパンフレットを読んで、税金によってドクターヘリが運用されていることを知り、ドクターヘリについての本を探しました。図書館で見つけたのが、「青森ドクターヘリ 劇的救命日記」です。「八戸市民病院にドクターヘリがあれば」という想いから始まった救命救急センターのお話です。

税金は私たちの身近な所で使われています。ですが、その一つ一つが「私達の為」に使われているということを忘れてはいけません。

税のありがたさ

千曲市立戸倉上山田中学校3年 竹内 良南

《税金はとても大切で必要なもの》こう考えはじめたのは私が小学五年生の頃である。小学校低学年の頃は税金の存在も知らなかった。特に、社会保障については全く知らなかった。しかし、小学五年生の秋、税金について考える機会ができた。

「税金はありがたい」これは私の祖母が言った言葉だ。私の祖父は、私が五年生の秋、脳内出血で倒れ、半身不随となってしまった。

手術、入院をし、病院に大変お世話になった。その後、鹿教湯病院で約一年間、リハビリ入院をした。医療費を考えただけでぞっとしてしまうが、社会保障のおかげで、一割負担で済んだそうだ。

退院する前に、家の中のリフォームした。そして、ベットや車いす、車いすで外に出られるようにするための昇降機のレンタルをした。これらも、本来ならものすごいお金がかかるが、一割負担でまかなえており、大変助かっているそうだ。

倒れてから約五年。祖父は、週に三日、デイケアに通っている。このデイケア費用も、社会保障からまかなわれている。病気で倒れた祖父が、今こうやって元気に生活できているのも、国民が納めている「税金」でまかなわれているおかげだと痛感している。あらためて、「税金」のありがたさを感じた。

国の支出（一般会計歳出）において、社会保障が一番多く、全体の約三分の一にあたるそうだ。社会保障は、祖父のことからも分かるように、私たちが生活していくために大変必要なことであり、ありがたいことだ。老後の安定した生活や健康で文化的な社会を実現するためには、大きな費用を必要とし、その財源の中心は、「税金」である。だからこそ、未来に生きる私たちが安心な生活を創っていくことが必要だ。

これだけ「税金」は、世の中で役に立っている。これを無駄にしてはならない。だから、「税金」のありがたさを知っている私が、「税金」についてよく知らない人達にありがたさを伝えていきたい。私にとっても、私の家族にとっても「税金」という存在は、ありがたいものであり、大切なものだ。家族を支え、助けてくれた「税金」。私は恩返しをしていきたい。そのために、私たちがこれからの世の中をよりよいものに変える。そして、未来へつなぐ。これが、今に生きる私たちが出来ることだ。

税金は「無駄なお金」なのか

茂原市立南中学校 3年 渡邊 紀輪

消費税増税が延期になった。このニュースを聞いて姉は喜んでいて。私は、「どうしてそんなに喜んでいるの。」

と聞くと、姉は、

「だって無駄なお金を払わなくていいんだよ。」

と答えた。「無駄なお金」とは何なのだろう。お金は大事なのに。お金がないと生きていけないのに。私は疑問に思った。税金は必ずどこかで役に立っているはずだ。このことをきっかけに、税金がどのように使われているのかを調べ、姉ともう一度税金について話し合おうと決めた。

私は、小学四年生の頃、家の中で転び、机の角に頭をぶつけてしまった。当たり所が悪く、頭から血がぽたぽたと垂れ、パニックになった。慌てて母を呼ぶと、

「どうしたの。何があったの。」

と心配してくれたが、私は頭が真っ白になってどうすることもできなかった。すると母が、

「救急車を呼ぶね。」

と、緊急通報をしてくれた。すぐに救急隊の方が駆けつけてくれて、私は緊急病院に運ばれた。そこで五針程縫い、応急処置を行った。幸い入院するほどの怪我ではなかったが、とても辛い思いをしてしまった。のちに、医療費が税金によって負担が軽減されていたことを知ると、税金とは何なのだろう、と興味を持つようになった。

私は、税金の使われ方を調べた。すると、教科書などの学習に必要なものから、年金、公共事業費、さらには医療費などと幅広く使われていることを知った。救急車一回の出動で約四万五千円もの税金が使われていることを知ったときは、とても驚いた。もし、税金がなかったら、救急車を呼ぶのにもお金がかかり、さらに病院での治療費も全額負担となってしまう。税金がないとこれほど大変だったとは全く知らなかった。税金に助けられた、私はそう思った。

税金は決して「無駄なお金」ではないことを知った。私は、税金は身近にある様々な場面で使われているんだよ、と姉に言うと、

「税金ってとても大事なのか。教えてくれてありがとう。」

と、表情を和ませて納得してくれた。

税金があって本当に良かった。税金に助けられた。私は、税金はなくてはならないものなのだと感じた。また、税金の効果は、助けられることだけでなく、他人を助けることもできることだ。税金を納める、たったそれだけのことで社会に貢献することができるのだ。だからこそ、自分自身が納税という名の人助けに参加し、税金は決して「無駄なお金」ではなく、「大切なお金」なのだと思う人が少しでも増えるように、呼びかけていきたい。そして、これからの世の中を築いていく私達自身も税金について詳しく知っておく必要があると心から思った。税金に感謝しながら、私達は生きていくべきである。

様々な税のかたち

習志野市立第五中学校 3年 内橋 亜見子

国民が納めた税金は、様々な恩恵をもたらしている。私たちの身近なものでいえば、インフラや教育などの例が挙げられるが、それは誰もが分かる税の使われ方だと思う。しかし、私たちが気づかなかったり、目に見えにくい形で使われている税金こそが、とても大切なのではないかと思う。

私は、東日本大震災を宮城県で経験した。今まで誰も経験したことのなかった大きな揺れは人々を混乱させたが、私の住んでいた仙台市は比較的被害が少なかった。それは、三十年以内に九十九・九パーセントの確率で宮城県沖地震が起るといわれていたことで、様々な対策が事前にとられていたおかげだと思う。例えば、仙台市内では地震の起こる前年から、すべての水道管が耐震性のものに変えられる工事が行われていたため地震発生後も水道管が破裂することなく、比較的早い段階で復旧することができた。

普段私たちは水や電気・ガスがあるのが当たり前だと思いがちだが、いざ災害などでそれらが遮断されると改めてライフラインの重要性に気づく。実際、震災の時にそれを実感したが、同時にそのライフラインが税金で安定して供給されていることにも気づかされるのだ。このように、いつ起こるか分からない災害に税金をどのくらい投入するべきなのかという判断をすることはとても難しいが、結果的に多くの人々の命を救うことにつながる使い方は、これからも積極的に行われていくべきだと思う。また、学生の立場から見てみると、教育環境はもちろんのこと他にも様々なところで私たちのために税金は使われていることが分かった。例えば、最近では中学生まで医療費の補助がでる自治体も多いが、これは目に見えやすい例の一つだ。私の姉や兄は普段通学に公共交通機関を利用しているため、定期券を購入しているがその際に学割を使っている。学割を使えることは当然のことのように思ってしまうが、実はこの補助にもやはり税金が使われているのだった。ここでも、私たちは気づかぬ内に税の恩恵を受けていると知り、改めて私たちの生活の陰にある税の存在の大きさを実感した。

このように、税金はインフラや教育、その他私たちが今現在生活していく上でかかせないものであると同時に、私たち学生や子どもを育てていく上でも非常に重要な役割を果たしてくれている。それは、誰もが気づきやすいところだけではなく、普段はあまり意識しないところにも活用されており、私たちの安定した生活を支えてくれている。だからこそ、私たちは税についての正しい知識を身につけ健やかに育つことで、将来税を納める立場になった時、その成果が実るのだと思う。つまり、税金を納めていくことは、現在と未来への投資でもあるように私は思った。

納税へのプライド

渋谷教育学園渋谷中学校3年 小山 葉奈

毎年二月になると、私の父の憂鬱な日がやってきます。その原因は確定申告です。一日中パソコンに向かって作業をしています。一方、確定申告を済ませた日の夜、父はとても満足そうな顔をしています。それを見て、「無事に終わって良かったね。」と私が声をかけると、「作業が終わって嬉しいだけじゃなくて、今年もきちんと納税できたことが嬉しいよ。」と言われました。

「納税はお金を払うことなのに、どうして嬉しいの？」そう父に聞くと、ある新聞の記事を見せてくれました。それは父の仕事の取引先で、社長を含め社員のほとんどが障害者という会社の記事でした。社長の言葉で「働き、納税者になる喜びを社員に味わって欲しい。」と書かれていました。納税＝ただの出費ではなさそうです。では、「税を納めるということ」は、一体どんな意味を持つのでしょうか。

日本では、納税は三大義務のうちの一つで、様々な納税の形があります。収入を得るようになったときから、国民は国に税を納めなくてはなりません。支出が増えることを嬉しく思う人は多くないと思います。それなのに、なぜ私たちは「納税」という仕組みを長い間続けてきたのでしょうか。税金がなかったら、学校や病院には行けないし、ごみを収集してくれる人もいません。道路や水道もなく、今のような暮らしは成り立たないでしょう。税金は直接目に見えないところで私たちを支える、縁の下の力持ちのような存在です。

そう分かっているけど、税は他人のためにする支出だ、と思って、なんとなく敬遠してしまうと思います。それで聞くニュースが、「脱税」です。脱税すれば自分の収入を独り占めできます。しかし、みんなが脱税を始めたらどうなるでしょうか？今税で賄われているものは、成り立たなくなります。結局そのつけは自分たちに帰ってくるのです。

普段助けられる立場が多い、障害を持つ人が、自分でお金を稼いで納税できることに喜びを見出している、ということから、父の満足気な表情の理由が見えてきました。父はこの人との出会いに、納税の喜びを気付かされたのでしょう。自分がお金を稼いだら、税金を納めて誰かのためにそれが使われる、ということに、一国民としてのプライドを持つ。一般的には敬遠されている納税、その全く別の視点に気付かされました。

私は今はまだ税金の恩恵を受けているだけです。将来働いてお金を稼ぎ、税を納めるようになった瞬間、私は本当の大人になれるのだと思います。そのときはきちんと納税して、どのようにそれが人の役に立っているのか見ることも意識したいです。

納税することは、義務である一方で、権利でもある。誇りをもって、納税を喜べる大人になりたいです。

次は私たちが支えるために

大田区立大森第七中学校 3年 小山 玲

農民の貧しさと里長の苛酷な税の取立ての様子を歌ったのが、山上憶良の貧窮問答歌である。生活が苦しい中、重い税が課せられることの苦しさは、その時代に生きていなかった私達でも想像できる。この時代の農民たちは一日を生きるのも大変だったのだろう。

私は今まで、税は人々を苦しめるものだというイメージを持っていた。現代とは違い、米や布、兵役につくことなど、農民たちは多くの税を課せられ、苦しい生活を余儀なくされてきた。多くの税を納めていた昔の人々は「国のために」税金を納めるとは、考えもしなかったことだろう。

さて、現代はどうだろうか。今、日本には様々な税がある。私たちの身近にある税といえば消費税や住民税などだが、他にも鉱産税や入湯税というものまであるらしい。それらは日本全体で数十兆円にもなり、その大部分は私たちの健康や生活、教育などのために使われている。つまり私たちの納めた税は一周回って、住みよい街、よい暮らしという形で私たちに返ってきているのだ。私にとって税、特に消費税は商品の金額より少し多くのお金を支払わなければいけない、あまり良いものではなかったが、このことを知って税へのイメージが少し変わったような気がする。税を納めるということは、社会に貢献するということでもあるのだ。

では、具体的に税とはどのように私たちの生活に関わっているのだろうか。医療を例にとって考えてみる。今中学校三年生である私は病院へ行くとき、保険証を出せば無料で診察を受けることができる。これは決してあたりまえのことではない。他にも学校や図書館、公園など、私たちの生活には様々なところで税が関わっている。「税なんかいらぬ」なんてもう言っていられない。税を納めることに否定的になる前に、税に支えられて生活できていることを忘れてはならないのだ。

超高齢社会となった日本は、社会保障にかかる費用が増えていく一方で、それを負担する働き手が減っていくという状況にある。社会保障のための費用が不足するのであれば、私たちが負担していく必要がある。今後、私たちが働くようになり、子供がうまれるようになったときに、私たち一人一人がきちんと税を納め、親の世代や子の世代を支えられるようにしなくてはならない。親の世代に支えてもらっている分、今度は私たちが支えるということだ。そのためにもどれだけの公共サービスを受け、どれだけ税を納めるのか、そのバランスについて一人一人が意見を持たなくてはならない。

私たちは税を納めるために納めるのではなく、よりよい街、よりよい社会をつくるために税を納めるのだ。つまり私たちの暮らしをよくするためということである。一人一人が税について知り意見を持つことがよりよい社会への第一歩となると私は考える。

社会を紡ぐトライアングル

目黒区立第八中学校 3年 小林 璃奈

私は本を読むのが大好きだ。だから、図書館をよく利用する。絵本から専門書に至るまで所蔵されているこの場所は、私にとって、幼い頃から通い慣れた特別な空間だ。地元の図書館だけでなく、出掛けた先でたまたま見つけた図書館にも訪れる。目当ての本を読むことはもちろんだが、所蔵されている本の種類や陳列の方法、その図書館のお薦めコーナー等、独自の工夫が施されていて面白い。

ただ、図書館の広さや大きさを別にして、地域によって図書館の数が極端に少なかったり、所蔵されている本の冊数や本の状態に差があったり、がっかりすることもしばしばだ。利用者のマナーが悪いだけの問題とは言い難い場合も多い。公共の施設であるにもかかわらず、なぜこれほどまでに区や町によって差があるのだろうか。

図書館の費用は、全て税金によって賄われている。しかし、使い道は市区町村に委ねられていることがほとんどだ。目黒区では昨年度図書館運営費として一一八四〇三千円の予算が生まれ、開館時間の延長及び一部通年開館が実施された。そして、その事業は今年度も継続されており、区民が利用しやすくなったと好評のようで、私もその恩恵を存分に受けている。

だが、図書館を全く利用しない区民の方からすると、一億円のお金を別のことに使ってほしい、という声があがっても不思議ではない。公共性と公平性を踏まえて、税金を集め投資するのは、色々な意見をもつ市民の事情を、様々な角度から検討しなければならず、とても複雑である。その時々 の優先順位を考え、市民にとって必要かつ有益なところにお金をかけなければならないのだ。

私が税金を身近に感じるのは、買い物をした時に「消費税によってお会計が高くなる」ということぐらいだ。しかし、日常生活を振り返ってみると、図書館や区民プールの利用料、中学校の授業料や教科書代、医療費等、そのほとんどが税金によって成り立っている。しかも、見ず知らずの誰かが納めた税金の恩恵に預かっている。家族にのみ支えられていると思っていた私の生活は、顔も名前も知らない多くの人々によって支えられているのだ。この事実を再認識した今、これまでの自分を恥ずかしく思わずにはいられない。現在の私の日常生活はもちろん、これまでの私を形成してきた多くは、周囲の人々の支えなくしてはあり得ないのだ。

税金を納める人、税金を正しく使う人、税金によるサービスを受ける人、この三者のトライアングルが私たちの生活を安心して豊かにしているのである。だからこそ、これまで受けてきた恩恵をいつか見ず知らずの誰かにお返ししたいと思う。将来、このトライアングルの一端を担うためにも、今はしっかりと勉強に取り組み、社会人となった時にはきちんと税金を納められる人でありたい。

すべての人が支え合うために

大和市立上和田中学校 3年 白尾 奈津美

税金とは、私達が生活するなかでとても重要で、身近なものです。例えば、普段使う通学路、学校、病院などです。私達が今の生活をするためには、税という存在が不可欠です。

しかし、私はつい最近まで、税金がどのように使われ国民を支えているのか、また税に対し国民はどう思っているのか、ということに、あまり感心がありませんでした。けれど、テレビで見たニュースをきっかけに、税について考えるようになりました。

それは、今年七月、神奈川県相模原市の障害者施設で、十九人もの方々が殺害されたという事件です。「障害者がいなくなれば税金が浮く」という犯人の勝手な考えで、何の罪のない人達が命を奪われてしまったということに、私は胸が苦しくなりました。この事件がとても気になったので、私はインターネットで詳しく調べました。すると、悲しみの声が多いなか、「障害者は補助金や医療費が沢山かかるため、税金の無駄遣いだ」という意見もありました。確かにお金はかかるかもしれないけれど、人の暮らしを支え、幸せをつくり出すための税金は、絶対に無駄ではないと私は思います。そもそも税金とは、みんなで社会を支え、健康な人も、そうでない人も、同じ生活を営むためのものです。

五体満足で問題なく生まれることができた人達は、ごく普通の生活を送ることができるけれど、みんながそうとは限りません。障害者の人やその家族には、私達にはわからない苦しみがあるはずで、自分がもしその立場だったらと考えると、その苦労は想像できないと思います。その苦しみを軽減させてあげるにはやはり、補助や支援といったものがが必要です。辛い思いをしている人達をみんなで支援してこそ、税金本来の目的を果たせるのだと思います。

私は今、まだ働いていないけれど、毎日頑張って仕事をしている人達からすれば、このような税金の使われ方に納得できないという人もいることだと思います。けれど、今回の事件のように、多くの障害者の方が殺害されたり、最近では視覚障害をもった方が、駅のホームで転落死するなど、悲しいニュースが相次いでいます。このようなニュースを見て、胸が苦しくなるのは、きっと私一人だけではないはずです。少しでもそう思ってくれる人が増えたら、誰もが安心して暮らせる社会へと、つながっていくと思います。そのためにはまず、この地に住むすべての人々が、税金の本来の目的をよく理解し、みんなの幸せのためにあるのだということを再確認することが必要です。直接力を貸すことはできないけれど、税金で誰かを助けることができると考えると、今まで以上に税金が大切なのだ実感しました。自分一人の幸せではなく、すべての人の幸せを考える人が増えて、障害者の人も、そうでない人も、互い尊重し、助け合っていく社会になればいいなと思います。

みんなの幸せのために

横須賀市立衣笠中学校 2年 小熊 愛乃

最近、税金についてのニュースがよく見受けられるようになった。内容は様々だが、税金のことをあまり知らない人や、ただ払うだけのものだと思っている人などは興味を持たないだろう。しかし、私達の生活を成り立たせる上で税金はなくてはならないものだという事を知っておいてほしい。

私には姉がいた。私が生まれる前に他界してしまった姉は生まれつき心臓が弱く、幾度となく病院に通っていた。けれども症状が重かったため、国から特別児童扶養手当が支給された。特別児童扶養手当とは、精神や身体に何らかの障害を有する二十歳未満の子供の保護者に対して支給される手当のことである。姉は幼かったので医療費は無料だったが、ひんぱんに病院へ通っていて働くことができなかつた母にとって経済的な不安が少し軽くなったので助かつたという。

この話を聞き、税金は私達に欠かせないものだと感じさせられた。

また、介護が必要だつた曾祖母のために設置された、トイレや玄関など全ての場所の手すりの費用が補助されたということも聞いた。

このように、税金は世代や障害の垣根を越えて利用されている。もちろん、病気の人や介護が必要な人だけでなく、私達健常者にも税金は大きな助けとなっている。例えば、道。私達が普通に歩いている道は綺麗に舗装され、重要な交通網としての立派な役目を果たしている。でも、もし税金がなかつたら。道を作る資金がないため、地面には山のように雑草が生え、ボコボコで歩きにくく、ベビーカーや車椅子も進まない。そんな国に住みたいか、と尋ねられたら間違いなく「ノー」と答えるだろう。

税金は、私達の暮らしを便利にするものであるとともに、私達の生活を支えるものでもある。どんどん便利になっていく世の中にいる私達は、税金の存在に感謝しなければならないと思う。従つて、税金のおかげで今の暮らしがあるということに日々感謝し、税金のことでトラブルなどがあつても正しい税金の在り方を見つめ、適切な判断ができる社会人になりたい。税金のことをよく知らない人も、必要ないと思っている人にも税金の大切さを分かつてもらい、当たり前だつたと思つていた生活に、税金に、感謝して生きてほしい。

私は、今ならば税金は日本に必要かという問いかけに対して、自信を持って「イエス」と答えることができる。みなさんにも、そうであつてほしい。それがこの国への、この国に住む人への願いである。

税について

甲府市立富竹中学校 2年 近藤 美紅

税というと私は真っ先に消費税を思い浮かべる。現在消費税が八パーセントなので百円の商品を購入すると百八円の支払いとなる。少ないおこづかいの中から消費税分を支払うのはなんだか損した気分だ。しかも消費税の計算は少し面倒なのだ。私は小学校の社会の授業で「納税」は国民の義務のうちの一つであることを学んだ。なぜ税を納めることが義務なのか、税について改めて考えてみた。

税について調べたところ、次のような説明があった。社会の中で人は一人で生きていけない。税は、社会の中で生活していくための「会費」と考えればよい。夏になるとよく山で遭難した人を捜索したり救助したりしている映像がニュースで流れる。その費用の元になっているのはみんなから集められた税金だ。個人でやれることには限界がある。みんなが少しずつ税を負担することによって初めて安全で暮らしやすい社会になるのだ。「納税の義務」というと無理やりとられていると勘違いしそうだが、実は少ない負担で様々なサービスや恩恵を受けられる有り難い仕組みだということがわかった。

気になるのは納めた税の使われ方だ。税は、医療や福祉などの社会保障、教育、道路や公園整備などの公共事業、国を守るための費用など私たちがこの日本で安心して暮せるように様々なところに使われている。私が住んでいる地域には山梨県立美術館がある。ミレーの作品が展示され、県外からもたくさんの人々が訪れる。こうした文化的なものに対しても税が使われていることは、とても素晴らしいことだと思う。

この夏私はあるコンビニエンスストアで職場体験として三日間働いた。商品の陳列、検品、発注、最終日には揚げ物もした。初めての経験でどれも新鮮で楽しかったが、一方で働くことの大変さも実感した。今回は体験なので賃金はなかったが、私もあと数年で社会人として働き収入を得る。収入の一部を所得税など税金として納めるが、苦勞して得たお金なのでその税金は大切に使ってほしいという気持ちでいっぱいだ。夏に行われた東京都知事選挙が全国から注目されたのは、前の都知事が政治資金、つまり税金を自分や自分の家族のために使った疑いがもたれ任期途中で辞任したからだ。大切な税を私利私欲のため不正に使っていたのが本当だったら許せない。

税は私たち一人一人にとって大切なものだ。百円のものを買うと八円損をするのではなく、その八円が社会の役に立ち何倍も何十倍にもなって自分に返ってくるのだと私は改めて感じた。悪いのは税の無駄使いや不正な使用なのだ。私も大人になったらしっかり働いて、「納税の義務」をきちんと果たしたい。そして選挙では税を正しく大切にしてくれる候補者を見極めて投票するつもりだ。

期待をこめた贈り物

高岡市立五位中学校3年 前田 野乃葉

「今日もリュック重たそうやけど、大丈夫け？二宮金次郎に見えるわ。でも、野乃葉らしくていいよ。がんばってらっしゃい。」

母が毎朝、私を見送る時にかけてくれる言葉だ。中学校は自由なリュックで登校できる。ランドセルなら、教科書の折れ曲げや濡れの心配は少ないが、リュックでは、そうはいかない。だから私はランドセル似の特大リュックを買ってもらい、さらに透明なプラスチックケースに入れることで、それら二つの心配を取り除き大量の教科書を持ち運ぶ。担ぎ方を失敗すると、後ろに反り返りそうになるほど重い。それでも、私には担ぐ理由がある。

それは私が小学校一年生の時のこと。母は私が持ち帰った初めての教科書に、油性ペンで一字一字丁寧に私の名前を書きながら、話してくれた。

「ランドセルや机は、爺ちゃん、婆ちゃんやひい婆が買ってくれたけど、この『教科書』いう本は、日本に働きたくさんの人が納めた『税金』いうお金で、野乃葉のために贈ってくれたんやよ。大事に、しっかり、勉強しられ。みんな、野乃葉を応援しとるよ。」

私は、たった五人の同級生しかいない小さな小学校に入学する自分に、そんなに大勢の応援団がいてくれたことが嬉しくてたまらなかった。その時から私にとって『教科書』は大切な物となり、その思いは今も全く変わらない。税金のしくみを学んだのは、それから数年後のこと。母が小学一年生の私を一人の『学生』として接し、税金による教科書の無償支給を教えてくれたことは、とても意義があった。私の学びへの意欲は、そこがスタートだったからだ。

教科書の背表紙には「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう」と記載されている。

教科書の背表紙を見る度、自分に期待をしてくれている応援団の存在を感じ、気を引き締め、勉強に励む。

税金は教科書以外にも国民の生活の為に様々に使われているが、学生の私に大いに関係する所と言えば給食の補助がある。少ない給食費の負担で栄養バランスのとれた食事がとれる学校給食は、成長期になくってはならないものだ。給食を残さず、しっかり食べているおかげで、私は小学校入学以降、中三の現在に至る迄、一日も学校を休んだことがないのだから、そのありがたみは計り知れない。

税金の恩恵に感謝を忘れずに、今、日本の未来を担う人として期待されている私にできること、即ち一日も休まず、学校で多くを学び、たくさん知識を習得する努力をこれからも続けていき、将来日本で働く社会人として税金を納め、次の「日本を担う皆さん」に私から期待をこめて『教科書』を贈りたい。

だから私は今日も、やっぱり、二宮金次郎スタイルで学校へ行き、学ぶ。

税の在り方

多治見市立笠原中学校 3年 木村 未来

「蛇口をひねれば水が出る」その綺麗な水を得られるのは私たちが納めた税金があるからだ、その当たり前だと思っていたことの理由を知ったのは今回の税の作文を書くにあたり、インターネットで調べたり、税理士の方のお話を聞いたりして、税のことを学んだときです。

最近では、安倍晋三首相が消費税増税期間を二千十九年十月に再延期した、というニュースを見ました。日本は「低負担・低福祉」と言われています。そして、消費税を引き上げるということは国民負担率は高まるものの、還元率は低いままで。このことが、国民の不安や不満につながり、私たちは「税金を納める」ではなく「税金をとられる」という意識をもってしまいがちです。私も前まではそう考えていました。

そんな私の考えが大きく変わったきっかけは一枚の写真でした。そこに写っていたのは大きなバケツを頭に乗せ、険しい道を歩く少女でした。少女は何をしているのでしょうか。水遊びでもありません。洗濯でもありません。彼女は、五〜六キロも先にある川へ水を汲みに行くのです。なぜそんなことをしているのか。私には到底理解し難いものでした。現在、世界では約七億八千万人もの人が安全な水を飲めていないそうです。これは日本の人口の約6倍です。こんなにたくさんの人々が決して綺麗とは言えない泉や川の水を飲むことを強いられているのです。しかし、日本では国民が納める税金で下水道の整備がされており、今日もまた安心して水を飲むことができます。他にも、公園、道路、学校、病院をつくったり、教科書が無償で提供したり、年金をわたしたり、ゴミの処理や犯罪の取り締まりなどたくさんのに税金が使われていると知り、同時に、これらの当たり前だと思っていたことはそうではないのだとその一枚の写真は気づかせてくれました。

私が納めている税金だけでは、綺麗な水は作れません。しかし、皆の税金を集めることで作ることを可能にしているのです。そうやって、税金という一つの手段で日本は助け合い、つながっているのだと思いました。そして、私が納めた税金は今もどこかで誰かの役に立っています。逆に私もたくさんの方の税金の支えによって今の生活ができています。そうすると、損や得などの考えでは測れない幸せを感じられ、税金は「とられる」ではなく「納める」ものだと自然に思えます。本来の税の在り方とはこういうものだと思えます。日本全体、そして世界中が税に対してこのような意識をもつことができれば、今より一層幸せで豊かな生活が送れるでしょう。私とその世界をつかっていく一人としてまずは私が思う税の在り方を周りに伝えていくことから始めていきます。

スウェーデンに学ぶ、幸せを呼ぶ税金

浜松市立三ヶ日中学校3年 堀川 慧眞

あなたは高い税金を払いたいと思うか。もちろん答えは「いいえ。」しか浮かばないだろう。しかし、驚くことに「はい払いたいです。」そう答える多くの国民がいる国がある。スウェーデンである。

僕の母は、仕事でスウェーデンとの交流があり、それが家の話題になることがある。「ベビーカーをひいた若いお父さんが二、三人で公園で散歩してたよ。あの国は、専業主婦率二パーセントだって。男性も育児休暇を取ることが当たり前でうらやましい。」と母。「日本では考えられないね、日本の専業主婦率は三十八パーセントだよ。」驚いた父はコーヒーを片手にスマホで調べながら言った。そんな会話から、僕の頭には福祉国家、そして税金が高いことが浮かんだ。「税金が高いから夫婦二人で働かなくてはいけないと思うよ。必死なんじゃない。」数日後、母はスウェーデンの人に、税金納めることが辛いかどうか聞いてくれた。電話で雑談をしたそうだ。そしてその答えに驚いた。「消費税は二十五パーセントなんだって。でもね、驚いたんだけど、そんな高い税金なのに、知り合いのスウェーデン人たちは税金を払うことに苦痛どころか更にもっと払ってもいいと言っていたよ。」そんなの聞いたことがなく目が点になった。そこで、スウェーデンの税金の使用先を調べることにした。十八歳までは医療費が無料、また大学までの学費も教科書代を除いて無料。更には一定の期間しっかり出席すると国から援助金が出る。だから国民は納得して、高い税金を払いたいと思うことができるのだと思った。ところで日本の税金はどのように使われるの。僕は、日本の税金の使われ方さえ知らないことに気づいた。消費税は五パーセントから八パーセントにあがった二千十五年、国民から歓声はあがらなかった。あがったのは不満だ。僕も不満を言った一人だ。「計算が面倒だ。」と。今思えば税金の使われ方を知らないから、否定するのだと感じる。ニュースでとりあげられる街の声、税金は悪というコメントばかりが映し出されている。日本人の税金に対するイメージはマイナスでしかないのだ。スウェーデンにも、サービス面での競争がなく、給料も良くないので良い医者がいなくなるなどの問題がある。

幸せな税金とは何か、それは「知ること」だと思う。どのような税金を支払っているか、その税金がどのように使われるか、よく知ること、税金を払うことの幸せに繋がる。

日本人はまだまだ税金について、無知である。嫌な税金も、視点を少しだけずらすことで、様々な考えがあることに気付く。僕は海外へ留学したいと思っている。日本人としての文化や考えを尊重しつつ、海外の良さも理解する柔軟な考えを持ちたい。消費税は近いうちに高くなるが、少し立ち止まって、その影響を深く調べて自分の意見を持ちたい。

「僕の命の恩人は税」

名古屋市立日比津中学校 3年 杉原 弘晃

「よくがんばった。あめちゃんどうぞ。」

僕は、あのお医者さんを忘れない。押し入れからジャンプして遊んでいた僕は、たんすの角に頭をぶつけ、救急車で運ばれた。三針縫っただけで済んだが、父が「助けてあげられなくてごめんね。」と幼稚園年長の僕に何度も言ってくれたことは今でも覚えている。その頃はまだ小さかったから親にどれだけ心配をかけたか分からなかったけれど、今思うと、自分がふざけていたせいで大事故になってしまったと申し訳なく思う。

僕が頭から血を流しているとき、母はすぐに「119」を押して救急車を呼んだという。救急車は五分もたたず家に来て、「通して下さい。」とサイレンを鳴らしながら、病院へ向かった。

なぜ救急車は、素早く家に来て、無料で病院まで運んでいってくれるのだろうか。それは、救急車には僕たちの税金が使われているからだ。ゴミの収集・処理や警察・消防などの国や地方公共団体が行うサービスを公的サービスといい、それには税金が使われている。一回の救急車の出動では、約四万五千円の税金が使われているそうだ。もし税金がなくて僕の命が助からなかったらと思うと、恐ろしくてたまらない。救急車を電話で何度も呼んでも、家で何分も待っていても、一向に来ないかもしれない。さらには、電話代や搬送料も請求されるかもしれないのだ。

しかし、海外では、救急車の利用が有料の国もある。例えば、アメリカでは一回あたり日本円にして六万円ほど掛かる。また、タクシーのように、基本料金に搬送距離に応じた料金が加算されることもあるという。そのため、貧しい人々は救急車も呼べずに亡くなってしまう。僕はそのことを知って、「お金の問題で死亡者が出てしまうなんて。無料だったらその人たちは助かったかもしれないのに。」と悲しい気持ちになった。

病院へ着いた。お医者さんが「痛くないからね。大丈夫だよ。」と何回も声をかけてくれた。そのおかげで安心できて、無事に手術を終えることができた。実は、僕が住んでいる名古屋市には、子ども医療制度というものがあり、市の税金が使われているため、この手術も無料で受けることができた。手術後、お医者さんが「よくがんばったね。」と飴をくれた。帰りの車でなめた一粒の飴は、とても甘く、優しさの詰まったものだった。

このように僕を助けてくれた税金には、日々感謝している。僕たちが毎日安心して過ごせるように、警察の人が守ってくれているのも、学校で教科書を使って快適に勉強できるのも、公園で遊具を使って友達と安全に楽しく遊べるのも、全て税金のおかげだからだ。税金なしでは今の平和な日本は作り出せないだろう。全ての人を支える税金。そのありがたみを十分に知り、よりよい社会の実現に向け自分ができることは何かを考えていきたい。

理解と協力

甲良町立甲良中学校3年 辻 穂香

「税金」とは国民の理解と協力があるからこそ成り立っているものだと私は思います。私は日々、生活を送る中で税金に感謝していることがたくさんあります。しかし、問題もいくつかあると思います。これからも税と良い関係を保つには、より国民の理解と協力が欠かせないのではないのでしょうか。

まず、私が税に支えられていると思うのは教育費の負担があることです。教科書や学校の備品以外にも私たちの修学旅行なども税によって負担されています。税があることによって私たちは楽しい学校生活を送れています。私は昨年、海外派遣研修としてニュージーランドへ学習しに行きました。これも税があるから行くことができました。税によって費用の約半分が負担され、私たち一人ひとりの負担は最小限でした。私は、税によって学習ができること、様々な経験ができることに改めて感謝をしたいと思います。何気ない学校生活でも税によって支えられていると知ると学校生活への考え方も変わると思います。税金を納める事に不満を持っている人もいるかもしれません。目の前の生活だけを見ると税金の負担は大きいと思います。でも視野を広げると税によって支えられている事が多く見えてくるはずです。納税者にとって税金への理解と感謝の気持ちは必要不可欠だと私は思います。特に私たち中学生のように多くの税金をまだ納めることができない人は税のありがたみを感じる事が大切なのではないかと思います。

一方で、問題もあると思います。それは税金が正しい使われ方をしているかという事です。現在、日本は少子高齢化が進んでいます。このままでは社会保障の費用が増え、その費用を負担する働き手が減っていくことが予想されます。でも単に子供を増やすことでは解決できません。他に待機児童について問題もあるからです。税金を効率よく使用し、これら問題を少しずつ解決していくことがこれからの課題だと思います。税金は国民の生活を支える良いものですが悪用されてしまうこともあります。正しい使い方での国民の生活がより安心できるものになっていくことが大切です。

このように税金には国民の理解と協力が必要です。税金によって助けられている感謝と納税することに意味があることの理解。課題解決に向けての国民の協力。この二つが税というものを支えていると思います。一人ひとりが納税者として最善を尽くすことが大切だと思います。これからも人と税が良い関係であり続けてほしいと私は思います。そのためにも今、中学生の私たちがすべきことは下級生に対して学校生活の多くは税金に支えられているということを伝えていくこと、税金について自ら調べ学ぶことだと思います。税と人はお互いに支え合っているものだと思います。

「公共心」を持って

京都市立衣笠中学校 3年 加藤 優衣

平成二十三年三月十一日、私の伯母一家は東日本大震災で被災した。宮城県沿岸に建っていた家は跡形もなく津波にのまれた。幸いなことに家族は全員無事だったが、携帯電話とわずかなお金を持っただけでの避難生活はこれからの生活への不安でいっぱいの様子だった。

京都に住む私達に何ができるのか。少しでも助けになればと、震災後にできる限りのお金や物資を届けた。しかし、白紙になってしまった家族を助けることなどそうそう簡単ではなかった。元の生活に戻るためには、結局お金が必要だった。

「公共心」とは、社会全体の利益を大切にすゝる気持ち。「公共サービス」や「公共交通機関」、「公共事業」など、「公共」とつく言葉はたくさんあるが、これまで私はその言葉の意味を明確に理解できていなかったように思う。人間が人間らしく、幸福で穏やかな毎を送る。豊かで安心して暮らせる未来をつくる。そんな当たり前で基本的なことであるが、そこにはやはりお金が必要で、そのお金は私達の公共心によって生じる。

以前、母がこんなことを言っていた。

「また消費税上がるやん。保険とか年金だけでもかなりの負担やのに、税金を払うために働いているみたいやわ。いい加減にしてほしい。」

ニュース番組の街頭インタビューでも同じような意見を述べている人をよく見かける。税金を「取られている」と感じている人が多いようだが、なぜだろう。ごく一部の人が税金を悪用しているのも事実のようだ。それによって信頼が揺らいでいるのだと思う。改善策として、制度を改めなければならないのであろう。だが私は、皆が「公共心」を持って前向きに納税する世の中になるべきだと思う。また、私もそういう納税者になりたい。

一昨年、私の伯母一家は仮設住宅を出て新たな住居に移ることができた。国からの補償金によって未来への一歩を踏み出すことができたのだ。誰がいつこの立場になるかは分からない。大きな災害などが起こるたびに必要となる、被災者への生活補償金。災害から命がけで人々を救う、警察官や消防隊員、自衛隊員にも税金が深く関わっている。災害時だけでなく、普段の暮らしの中でも私達が税金にお世話になることは多い。例えば医療や教育などは身近なところだ。

税金。それは、自分が損をしているという気持ちでしぶしぶ払うものではなく、社会全体の利益を考えた上で払うものだ。社会のため、自分の払った税金が使われているという喜びを感じるべきである。公共心を皆が持って、皆の幸せは自分の幸せで自分の幸せは皆の幸せと認めて、全ての人が納税できる社会になってほしいと私は思う。

『世界で一番幸福な国』～デンマークを旅して～

清風南海中学校3年 吉田 零

「日本円に換算すると…。四百円？」

僕は瞬きしてもう一度計算してみる。確かだ。

この夏、家族で旅したデンマークで、ペットボトルの水を初めて買った時の僕の驚き。日本では百円程度で買えるはずの水に四倍近い値が付いている。デンマークを旅して気がついたのだが、人々は親切で穏やかだ。地図を片手に立ち止まっていると、必ず誰かが声をかけてくれる。

「May I help you？」

これは歴史的背景から、度重なる国土争奪戦で大きな犠牲を払ったこの国が、国土や国家を守るのは自国民でしかないという意識の元、不平等や差別の撤廃を求めて確立させた『共生』の精神による国民性なのであろう。

初等教育から大学教育まで必須となっている『倫理や哲学』が、現在のデンマークにおける税金で運営される平等な生活をもたらす社会保障や福祉制度の礎となっている。

消費税の二十五%のみならず、例えば所得税は五十五%、たばこ税は八十五%等と税金が高くても国民に不満はない。なぜならば、医療費が無料で出産も無料、待機児童ゼロの保育制度、最長四年間は貰える失業保険、更には老後の心配もないという手厚い社会保障があるからだ。中でも教育の無料はこれから受験を迎える僕が一番羨ましく感じた制度だ。授業料が無料の為、学校にランクや偏差値は存在せず、入りたい学校で学びたいものを学ぶことができるのだ。当然受験戦争もない。その安心で安定した暮らしを実現させている政府は、国民から全幅の信頼を得ているらしい。

日本でも近年、消費税を八%から十%へと上げていこうという試みがある。十%と言わず二十五%に上げてでもデンマークのようににはできないものだろうか？と、僕は考えた。しかし、両国の国土に目を向けた時、僕の頭の中のこの安易な考えはすぐに崩壊した。平地だけの国土に兵庫県程の人口がゆったり暮らしているデンマークは、北海油田や天然ガス、安定した風力発電など資源に恵まれている。酪農中心の産業で資源のみならず食料の自給率も高い。それに反して、国土の七割が山で三割しかない平地に多くの人口を抱える日本では、ご存知の通り資源や食料の自給率が極端に低く、輸入に頼る他ない状況だ。

『共生』の精神が根付いたデンマークの国民性と恵まれた国土に、この社会保障の手厚い福祉国家がマッチしたように、日本の政府も狭い国土の中で戦後の復興、高度経済成長、バブルの崩壊を生き抜いた勤勉な日本の国民性にマッチするような税の税金の使い道をより効果的に明確に示すことができたならば、デンマーク国民のように、日本の国民も政府を信頼し、納得して税金を納められるように思う。政府は上げた二%分の税金の魅力ある使い道を国民と共に考案して欲しいと願う。

私はこの前、母と一緒に「ふるさと納税」をしました。前から、テレビで採り上げられたりして話題になっていたので、母と「やりたいね。」と言っていました。そのときは、豪華なお礼品に惹かれて応募しましたが、ホームページを読んでいるうちに、私達にとってもそして納税した地域の人にとってもうれしい、一石二鳥のキャンペーンだと思うようになりました。

今、日本の地方の地域では、過疎化が進み昔はにぎやかだった商店街が、シャッター通りになっている光景も多くあります。そんな地域に寄付をして、地域活性化につなげてもらうのが「ふるさと納税」です。その地域ならではの特産品と引き換えに私達が納税することで、その地域の産業が発達する、素晴らしい関係です。税金は国民が健康で文化的な生活を送るためのお金なので、このような使い方をすることはとても素敵だと思います。

また、今回私は、熊本県にも寄付をしました。四月に起きた地震を支援したかったからです。私は地震が起きたとき、テレビで悲しいニュースが入るたびに心を痛めました。何か出来ることはないだろうかと思っていたときにこの「ふるさと納税」を見つけました。この寄付で少しでも熊本の被災者が元気になりますように。その願いが届けられたと思います。このように応援したい地域に寄付をすることで、助け合いを作ることが出来る、これも「ふるさと納税」のメリットです。

そして、全然知らない町であっても、寄付をすると、その町のことがとても知りたくなります。私も寄付をした地域のことを調べてみると、人口はどれくらいで何が有名なのかなど、とても興味がわきました。それに、この街へ一度行ってみたいなと思いました。これが観光客誘致につながって活性化になるので、良い循環が生まれると思います。

過疎化・少子高齢化が進む日本では、知らない人でも助け合う心が必要不可欠です。「ふるさと納税」は、都市と地方・人と人をつなげる大きな橋です。その橋を渡るには、助け合う心がないといけません。私達が毎日お世話になっている税金。その税金が地方では足りていないかもしれません。

未来を担う私達が、今、出来ることは、「ふるさと納税」をはじめとする、さまざまな税金の使われ方を知ることです。そして大人になったとき、その知識を活かして、助け合いの橋を渡ることが、地方活性化にもつながると思います。

「国民全員の税金」

高砂市立鹿島中学校 3年 濱崎 真名

私は今まで、「税」というものについて考えたことがありません。今回の作文を書くにあたり、初めて考えました。しかし、そうやって考えてみると私たちは多くの税に助けられているのだ。小学・中学生と使っている教科書も、毎日通る通学路も、すべて税金なのである。このように、身近といってもいいほどの税金も私の中では今ひとつぴんときません。そこで私の考えた税というものは「私たちが幸せに暮らしていくために政府に投資しているお金」である。たった一人で道路や施設を造ることは不可能だが、「税」という形でみんなが少しずつ貯金していけば、いずれ造ることができるからだ。「貯金」というものは多いほうがいいと、多くの人が考えていると思う。不景気なこの時代、小学生も「お年玉は貯金」と答えるのだから当然である。ならば、「国民全員の貯金」であるところの「税」も多いほうがいいのだろうか。例えば、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーなど、主に北欧と呼ばれる地域では税率二十五パーセント前後と日本と比べてかなり高い。日本では百円で買えるものも、百二十五円になるということだ。消費税八パーセントの世界に生きる私は正直、「そんなに値段が高くなってしまふなんて嫌だな。」と思いました。しかし、イギリスの大学が調べた「世界で一番幸せな国」はデンマークである。私は、なぜ物の値段が高くなってしまふような国が1位なのかと驚いたが、大学無償や医療費無料などの日本にはない良いこともたくさんあることを知り、現金ではあるが、確かにそこまでいろいろなことが保証されているのであれば、「世界で一番幸せな国」というものも、納得かもしれないと思うのである。私の住んでいる国・日本でも数年前から、税金の一部である消費税の引き上げの話が出ている。デンマークの話聞いた私は、「上げてもいいのではないか。」と思う。しかし、よく思わない人もやはりいるようで、なかなか現実となるには難しいものがあるようだ。確かに、貯金はたくさんあるだけでは役に立たない。必要なところに、必要な分使うからこそ、生活が豊かになり、貯金する意味があるのだと私は思います。そしてお金を使うのは、私たち人である、私たち自身が考え、選択し、必要に応じて使ってゆくもので、私たちがむだな使い方をすれば、たとえば多くの貯金があっても少ないのと同じことになる。つまり、税が「多い」、「少ない」の問題ではなく、まずは、使う人間の問題なのではないかと私は思います。誰かに任せたりせず、一人一人が考えていかねばならない。なぜなら、税金とは「私たちが幸せに暮らしていくためのみんなの貯金」であるからだ。税、税金、消費税などの「税」について考えることは難しい。しかし、税を通して自分の将来やみんなの幸せを考えることはできる。そして、それが最も大切であると私は考えています。

「介護保険と税」

太子町立太子西中学校3年 曾谷 友美

私の父は医療、福祉関係の仕事をしている。その為、小さい頃から、体の悪い患者さんや病気で苦しんでいる患者さんの話をよくしてくれた。特にデイサービスや介護施設の利用者さんのことは詳しく知っていた。実際に高齢者施設で、おじい様、おばあ様と一日過ごすという経験もあった。私のことを、まるで赤ちゃんを可愛がる様に接してくれた。胸の中が、あたたかくなったのを記憶している。

その後、介護施設の補助金は税金であることを知った。そして施設利用をするには、ケアマネージャーという役割の人が居て、病院と施設の橋渡しや、ヘルパーさんやデイサービスに行ける様に段取りをするそうだ。そういうサービスのお金も、半分くらいは税金に助けられていることを知った。介護保険制度というのは、国民の懸命に働いて納めた税金で上手く運営されているらしい。

「税金とは何のためにあるのだろうか？」

小さい頃からぼんやりとしか知らない事だった。日本の為、私たちの為に使われているのは分かるが、皆、迷惑そうに払っている様に思う。しかし私は、介護保険のことを知り、税金が必要だと感じている。なぜなら、あのデイサービスの利用者さん達が楽しそうに過ごしているからだ。働く職員さんも利用者さんが、介護設定を受ける前の生き生きとした表情で過ごせる様、一生懸命、努力している。これを「自立支援」と言うことを父から教わった。体にハンディがある人や社会的に弱い立場にある人の笑顔の為、喜びの為に税金は使われているのを実感するからだ。

税金が介護保険制度を支え、老後を安心、安全なものにするのだ。調べていくと、スウェーデンなどの北欧諸国は全てに50%程の税金を払う。働けなくなった老後を保障する社会保障制度が進んでいるからだ。日本も少しずつ北欧に近づける様、制度の整備が毎年行われている。

介護をとりまく問題は、特に深刻である。高齢者虐待、殺人、介護疲れ、閉じこもり、ネグレクト（無視、放置）、認知症の方の増加、事故、老々介護（高齢者が高齢者を介護すること）、介護職員さんのお給料が安すぎる事…。挙げればきりが無い程、たくさん問題があるという。介護保険制度で、高齢者や家族が生き生きと生活出来るようになった反面、こういった暗い闇が生まれている事も知っておきたい。

人間は皆、年をとる。その時、自分が幸せに暮らしていくために払うのが税金なのだ。目の前の自分の財布からお金が出ていく事ばかり目を向けてはいけない。自分の人生を豊かにすることを目指して払うのが税である。私は、皆の税金で、税制度、介護保険制度を守り続け、笑顔があふれる社会が実現できることを強く願っている。

「税を納めていれば、将来大丈夫？」

奈良市立三笠中学校 3年 大西 愛海

先日母の会社のAさんという中国の人が、突然手足にしびれの症状が表れ、入院したそうだ。放置しておくとう手足が麻痺し、車イスで生活を余儀なくされるとのこと。脳の血管の一部が詰まり手術をするそうだ。中国の長沙の親が、日本に看病に来られるらしい。

入院しているAさんは以前から、給料明細を見るたびに、「日本は所得税や社会保険料など、いろいろ引かれる金額は大きい。私達外国人が、税金の義務だけ負わされ、保障なんかしてくれるのかな。」と言っていたとか。たぶんAさんの病気は、費用も大変だろう。

もし義務である決められた税を納めていなかったら、国や市からの援助の手は差しのべてもらえないだろう。今回の手術費用、医療費用等、莫大な金額になると思う。

生活に必要な物を買えば消費税がかかり、快適な生活に必要な物に対しても、当然税はかかる。所得を生じれば、所得税。家、土地に対しては固定資産税、たばこを吸う人にはたばこ税……。いろいろな物に、税を納めている。税を国民からとらなくてもやっつけていける中東の国もあるが、たぶん石油などの地下資源が豊富で、国民が税を納めなくても、あらゆる公共サービスを受けられるのだろう。うらやましい限りだ。

でも日本ではそうにはいかない。商品を外国に売る事で外貨を得、資源の乏しい分、国民が税を納める事で私達が、健康で文化的な生活を送ることができるのだ。

税を納める事は義務である。だからいろいろな権利も主張できる。国民どうしの助け合いをしている事になる。

町のあちこちにある公園、学校、病院など、公共サービスのおかげで私達は現在充実した生活が営まれているのだ。

しかしながら、わが国は少子高齢化が進んでいる。働き手と高齢者の比率はますます高まっていくだろう。そうなると、社会保障等今までのようにはいかなくなる。

国債を発行し続ける事にも疑問がある。いずれ返さなければならない借金だからだ。又、納めた税の株式への投資でも確実ではない。世界の影響をもろに受ける分、不透明である……。となると、私達の税率を上げるしかないのだろうか。

私達が代表に選んだ国、市町村の議員さん達も、税負担の方法や税の使いみちについて今以上に考えてもらわないといけないうだろう。

ところで、あれほど不安がゆえの悪口を言っていたAさんは、無事手術を終え、中国へは帰らないで日本で治療をするとの事だ。

「日本ほど、充実している医療国はない…。」
本人はそう言っているらしい。

原点は、納税です

和歌山県立桐蔭中学校3年 吉田 響

修学旅行二日目一僕達の班は、班別自主研修で気象庁を訪れた。東京・大手町の今日は透き通るくらいの青空が広がっていた。

気象庁の方が出迎えてくれ、奥へと案内してくれた。デスクには気象図が置かれ、職員の方が真剣に向き合い、話し合っていた。

「一番気をつけていることは何ですか。」

と問うと、

「国民の皆様に分かりやすく丁寧に気象状況をお伝えすることです。」

と答えてくれた。彼らは、頭の中に多くの知識を詰めこみ、その中で言葉を選び、分かりやすく的確に気象状況を私達国民に伝えてくれているのだ。

さらに、近年は、気象技術の精度が上がった。「ひまわり8号」は、日本だけでなく東南アジア諸国にも情報が提供されているようだ。

このように税は、国民の暮らしを高い精度の技術によっていっそう豊かにしている。そこには、気象庁職員の方々のように多くの人々の不断の努力によって成り立っているのを忘れてはならないのだと感じた。

そして、彼らの仕事はそれだけではない。海外へ派遣された彼らは、途上国の技術支援に貢献している。税は、日本を豊かにするだけでなく、途上国の暮らしにも大きく関わっている。社会の時間で習った「南北問題」や「南南問題」を解決するべく、これからの時代は国境を越えて先進国がお金を出し合い貢献していく必要がある。そのためにも、税はその中で大きな役割を果たしていくことだろう。

私たちが納めた税が国を豊かにし、さらに海外にそれを広げていく力を持っている。これは今後も私たちの手できちんと続けていかなければならないのだ。

しかしながら、たびたびその税を納めることから逃れようとする人達がいる。それは、税金への関心の欠如とも言えよう。

だから、税への関心を持ってもらうべくこのような作文を通じてそんな人々に訴えかける必要がある、その重要性を認識して欲しい。

納税は、私達の豊かな社会を築き、支えてくれる人々への感謝の機会なのだ。だから、自己の利益追究だけに執着しているようでは未だ納税を「誇り」だとは思わないことであろう。

これまでも、そしてこれからも。豊かな社会を築く原点は、納税にある。私たちはそのバトンを未来へ渡せるよう、その認識を広げたい。

心の傷もいやす税金

福山市立至誠中学校3年 木村 舞香

私の住む福山市は今、大変なことになっています。先日におきた大雨によりあちらこちらで土砂崩れがおきているのです。主要道路も通行止めや交通規制のため多くの人が困っています。私の母も今までより一時間近く早く家を出ています。バスも通常ルートを通ることができず、通勤通学に困っている人もいます。さらに救急車も通行止めで遠回りをしないといけなくなり、今まで以上に時間がかかります。

この災害を通して私は「税」の存在を知りました。私からすると税は他人事のように思えて、知っているのは「消費税」ぐらいでした。しかしその税は私たちの暮らしの中で大きな大きな役割を果たしていました。ごみ出しをすればきれいに処理してくれるし、事件がおきればすぐに警察がかけつけてくれる。小学校・中学校では無償で授業を受けることができる。私たちの“あたりまえ”のような生活も税なしでは成り立ちません。

今回の災害も税のおかげで復旧が進んでいます。以前は土砂で道全体がふさがっていた所も、木や土などがきれいに取り除かれ少しずつではありますが安心して通ることのできる道へとなってきています。さらに最近は山の斜面をコンクリートで固め二度とおこらないように！と工夫されています。

ではもしこの日本に「税」がないとします。するとどうなるでしょう。税がないと道を整備するお金がないので、土砂で埋めつくされた道路は二度と通れなくなります。それだけでなく、がれきの下じきとなった人達を助けてくれる人もいないため、たくさんの命を失うことになります。

こんなふうに考えてみて、私は思いました。やっぱり税金は必要だ！と。「税金なくして豊かな生活なし」だどつくづく思いました。高いけどちょっとのガマンで幸せで充実した生活をするか、ラクに税金なんて払わず苦しくつらい生活をするか。誰に聞いても迷わず幸せな生活と答えるでしょう。

税について調べる前は「ジュースやおかしが高くなってヤダー！！」と思っていました。でも今は違います。「税金ありがとう」と思っています。税金によって救われた命もたくさんあると思うので本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

私の近くでおきた災害でも税のおかげでもとのような大好きで自慢できる町へもどっています。それだけでなく、熊本の大地震・広島のと砂災害・東日本大震災などでも税金は大いに活躍しています。

税は目で見える災害時の復旧作業だけでなく、もともどった故郷をみることで被災者たちの心の傷をいやしているのだとあらためて感じました。私も人のために動けるようになりたいので、まずは税金をきちんと払って社会に貢献できる人になりたいです。

社会保障と税の一体改革

宇部フロンティア大学附属中学校3年 藤村 理史

今年の夏は、曾祖母が、亡くなって初めてのお盆だった。大正七年生まれ、九十六歳の生涯。老衰で亡くなった顔は安らかで、木彫りの人形の様だった。青春時代は、戦争一色で、その後も、農業と家事と子育てに追われ、苦勞も多く、働き詰めの人生だった。

そんな気丈な曾祖母も、亡くなる三年程前からは、介護施設に入所していた。入所のきっかけは、同居していた息子、すなわち、僕の祖父が、食道がんの発症で、緊急入院したことによるものだった。

そのとき、唯一、健康に問題のなかった祖母は、八方塞がりの状態だったという。それまでもデイケアやショートステイを利用して、認知症を患った曾祖母の介護の負担軽減を図っていたが、それに祖父の看病が重なり、日常生活が全く出来なくなっていたのだ。

親族と相談して曾祖母の入所が決まり、家族と離れて生活する事になった。祖母は、自分が介護出来ない事に、罪の意識を感じていたが、その代わりに、病魔と闘う祖父を看病するまでの時間、精一杯寄り添う事が出来た。

医療と介護の費用は、自己負担分よりも、公共負担分の方が圧倒的に大きい。これらは、税金によって支えられている。祖母は、自分一人では、到底この二重介護状態をこなす事は出来なかったと、法事の席で、しみじみと話していた。僕はこのときに、税は、経済的負担を軽減するだけでなく、家族の精神的負担の軽減という両面を支える為に、必要不可欠なのだと、あらためて認識した。

私達の健康や生活を守る為の社会保障関係費は、少子高齢社会の加速によって、将来的に、ますます深刻な状況になることは明らかだ。祖父の様に、親を看取る前に自分が病に倒れる状況も有り得るだろう。この意味からも、誰もが安心して生活出来る様に、システムを維持しながら、改善しなければならない。

僕は、消費税の増税が話題になる度に、自分の生活の損得ばかりが気になり、目先のことしか意識していなかった。だが、消費税は景気や人口構成の変化に左右されにくく、税収が安定している為、税率の引き上げによる増収分は、社会保障と税の一体改革によって全額、医療、介護、年金、子育ての財源に充てられる。僕はこの内容を知ってから、消費税に対する見方が、大きく変化した。

人は一生の間で、いつまでも健康で豊かな生活を過ごせれば良いと願う。ただ、どんなに長く健康に過ごしていても、老いや死は必ず誰にでも訪れる。そして、穏やかな日常は、いつどんな形で崩れてしまうか分からない非常に不確かなものだ。それを支える為の根幹が、税によって支えられている。

私は、消費税に関して、もっと自分たちの様な若い世代にも、意義や目的が浸透し、公平に負担する制度であると、認識して欲しいと思う、何故ならそこには、損得ではなく、人徳が溢れていると、理解することが出来たからだ。

税金で守られる安心・安全な暮らし

阿南市立阿南第二中学校 3年 外儀 初希

私の祖父母は、太平洋に面した海沿いの町に住んでいます。海岸から約三百メートル離れた平地に家があります。平成二十三年に発生した東日本大震災の時には、祖父母の住む町にも津波警報が出されました。その時、祖父母は、近くの山に登って避難したそうです。自宅近くには避難できる高い建物もなく、整備されていない山道を少しでも上へと登ったそうです。しかし、高齢で足の悪い祖父にとっては大変な道のりで、途中で断念し「津波が来ませんように。」と祈るしかなかったそうです。祖父母のその時の気持ちを考えると不安と恐怖でいっぱいだったのではないのでしょうか。それからもしばらくは、どこかで地震が発生するたびに、祖父母は不安な日々を過ごしていたのです。

しかし、東日本大震災を機に防災対策など色々なことが見直されました。祖父母の住む町でも津波避難タワーが建設されたり、山へ登る道も整備され手すりがつくなど、登りやすくなりました。この防災設備にかかる費用は全て税金だそうです。税金のおかげで、祖父母が安心して暮らせる町づくりが進められていることを知りました。

私は、「税」と聞くと「高い」「払いたくない」「何に使われているのかわからない」といった悪いイメージをもっていました。しかし、この祖父母の話きっかけに、税への考え方が変わりました。そこで、もっと税について正しい知識を持たなければならないと思い、税金について調べてみることにしました。すると、私たちの本当に身近なところで税金が使われていることがわかりました。私たちが受けている教育、私たちの安全を守るための警察や消防の活動、病気やけがで病院を受診した時の医療、ゴミの収集や処理、道路の整備など全て、税金によって支えられているのです。私たちの生活には、どれも欠かすことのできない大切なものばかりです。もし税金がなければどうなるのでしょうか。祖父母は、津波におびえながら毎日を過ごさなければならないでしょう。私たちは教育を受けることもできず、病気になっても十分な治療を受けることができないかもしれません。ゴミの回収には高額のお金を支払わなければならない、町中にゴミが散乱するかもしれません。

私たちの生活から税金がなくなれば、きっと不安を抱えながら不便な毎日を過ごさなければならないでしょう。税金のことを調べているうちに、税金は私たちが安全に安心して暮らしていくために、欠かすことのできない大切なものだと感じました。だからこそ、この税金を納めてくださっている人たちに感謝して、税金が使われている物や施設を大切にするという気持ちを忘れずになりたいと思います。そして、私が大人になって納税者になった時にも、大切な社会のために納税の義務を果たせられる大人になりたいと思います。

未来のためにまずは今

鹿島市立西部中学校3年 織田 くれは

三一四〇グラム。これは私が生まれた時の体重です。病院の待合室で、母に見せてもらった母子手帳に記されていました。これが、私と母子手帳の出会いです。ページをめくると健康診断の結果など私の知らない過去の足跡が、たくさん刻まれていて温かい気持ちになったのを覚えています。

しかし、その時はあまり深く考えていませんでしたが今回、税について作文を書くにあたり本などで調べていくと、母子手帳は戦後まもない子供達が栄養失調や、感染症の多い時代に妊娠中のお母さんと生まれた子供の健康を守る手段として、世界で初めて考えられたもので税金によって作られていると知り、生まれる前から税金によって守られていたと気付きました。

母子手帳は妊娠すると役場で交付してもらえ、生まれる前は胎児の成長の様子や妊婦検診、生まれてからも予防接種や母親学級など子供とお母さんの未来と健康を考え、母子手帳を作ってくださった当時の方々の思いやりに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

日常的な何気ない毎日の一コマにも税金は活かされています。毎日通る道路や図書館などの公共施設、ゴミ回収など多くの生活の中で私達は税金の恩恵をうけていて、私達の暮らしは税金なしでは成立せず、税金の必要性は大きなものだとして初めて知りました。

しかし、私達の暮らしに欠かせない税金、その税金の支出額が増えすぎているそうです。そのため国は、国営企業であった鉄道会社や郵便局を民営化にしたりするなど努力されてきました。その結果、当時は約五兆円減額することができましたが、現在はその当時から十兆円以上増額した約九十六兆円になってしまったそうです。私達にとっても決して無縁の問題ではありません。このまま続けていけば、私達の世代が大きな負担を負うことになっていくかもしれません。私達にできることはないのでしょうか。

私達が通う学校も税金で建てられていて普段使っている机やイス、教科書もたくさんの方々が苦勞して働き、得た収入の中から納めてくださった税金によって運営されています。ただ何となく過ごしたり、教科書に落書きしたりするのは税金が無駄になってしまうと思います。限られた大切な税金を何にどのように使うのか。大切なことは「皆が納得できる」ということかもしれません。その為には私達も日本を作っていく一員だと自覚をもち、税金について考え知ることだと思います。未来のことだからと思い、今を過ごすのではなく、今税金に対し関心をもち、知識を深めることで明日が、そして未来がより豊かになると思います。今、私達を支えてくださっている方々がお年寄りになった時は、私達がその人達を支えていき皆の笑顔と安全な暮らしを守っていけるように私達の責任の重大さを自覚することが何より大切だと思います。

支えられる命

学校法人活水学院活水中学校 3年 西 紀香

私の曾祖母は被爆者だ。一九四五年、八月九日、長崎の爆心地近くの兵器工場で被爆した。幸い、大きな怪我は無かったが、被爆直後は喉が渴いて、大量の放射能を含んだ油の浮いた水を幾度となく飲んだそうだ。そんな曾祖母も今や八十九歳となったが、特に大きな病気もしておらず、週一回のデイサービスを受けたり、ヘルパーの方にお世話になりながら、元気に暮らしている。私は、デイサービスの利点は、日帰りでありながら、とても充実した介護サービスを受けられることだと思う。施設の方の温かい笑顔に迎えられ、日常生活上の介護を受けながら、同じ施設の利用者の方々との会話に花を咲かせる。また、自宅への送迎もしてくださる。施設から帰ってきた時の曾祖母の笑顔を見ると、私達家族も本当に嬉しくなる。

今回、税について考えたことで改めて気付かされた。曾祖母のこの健康と笑顔は、デイサービス等の施設の方々によって支えられている。しかし、その基盤となっているものは、税金であるということ。曾祖母は、一般の人よりも、より税に支えられていると思う。被爆者手当を受けているからだ。曾祖母の持つ被爆者健康手帳。これを提示することで、医療費が免除される。また、介護サービスを受ける場合は、一部が免除となる。そして、毎月支給される原爆被爆者手当。これらの税の恵みが、被爆してもなお元気である曾祖母の命の糧となっているに違いない。

私は、正直、今まで「税とは義務付けられたもの」というイメージしか持っていなかった。しかし、曾祖母のことから税について考えたことで、税に対する意識を変えることができた。私が毎日、当たり前前に学校で勉学に励み、安全な登下校をできること。これも、税の恩恵だ。太古の昔、租、調、庸から始まった税は、時代に応じた形に変化しながら、また、納税者の負担になりながらも、どんな時も私達の生活を影から支えてきた。税は、私達の生活に欠かせないものだ実感した。

少し前の私のように、税について「義務付けられたもの」という意識を持つ人は、まだまだたくさんいるだろう。しかし、こうやって身近なことから税について少し考えるだけでも、税への意識は変わってくるはずだ。税とは、「私達の社会を潤す源」こういうものだと思ふ。私が納税する立場になった時、税について正しい知識と理解を持って納税できる大人になりたい。また、そのように考える人が多くいる社会であってほしい。そして、これからも、被爆した曾祖母が元気に暮らせていることに感謝しながら、日常の小さな幸せを大切に生活していこうと思う。

心の杖

福岡教育大学附属福岡中学校 2年 小井土 功太郎

僕の趣味は合唱です。歌は楽器がなくてもどこでも歌うことができ、時として人の心をいやし、和ませることができます。僕が歌を好きになったのは、きっと祖父と祖母の遺伝です。祖父と祖母の趣味は、懐メロを仲間と一緒にカラオケで歌うことです。僕は二人がいつまでも元気に歌を歌って幸せに暮らすものと思っていました。しかし、時間は非情なもので、祖母は今認知症を患い記憶が持続できない苦しみを抱えています。高齢となった祖父は、そんな祖母を一人で介護しています。なので、祖父がストレスを抱えて弱ってしまうのではないかと、とても心配でした。そんなとき、祖母が高齢者向けデイサービスを利用するようになりました。デイサービスとは、少しの自己負担額で、日帰りで施設に通い食事や入浴などの日常生活介護や、筋力アップ運動、計算などの脳のトレーニングをする機能訓練を受けることができるサービスです。そのサービスを受けるようになったおかげで、祖父は週二回自分の時間を過ごすことが出来るようになりました。また、祖母は友達も増えて、会話が多くなりました。そして、自宅で祖母が転ばないように、トイレに手すりを付けたときにも、介護保険から補助が出ました。病人を抱えた家族にとって精神面と経済面との負担が重くのしかかってくるのが現状ですが、この介護保険によって経済的負担が軽くなり、気持ちの負担も軽減されると感じました。この介護保険というものは、四十歳以上から負担する介護保険料と税金とでまかなわれています。介護認定を受けた方やその家族の負担が少しでも軽くなるように、みんなで支え合う素晴らしい制度だと思います。

少子化や高齢化社会、老々介護と言われる日本を支えていかなくては行けない僕たちには、とても重い責任があります。だけど、一人で責任を負っていかねばならないと思うと大変ですが、皆で支えるならなんとか頑張れると思います。今まで税金が、何に使われているのかよく学びもせず、ただ学生の自分にはありがたいものと感じながら、でも社会人になって給料から税金を払うようになれば負担だと思っていました。しかし、自分の祖父や祖母がその税金のおかげで、幸せに暮らせていることを考えると、税金は人の心の杖であり、僕の大好きな歌と同じで、病で苦しんでいる人をいやしてくれる。そして、人に生きる希望を与えるものだと思います。だからこそ、将来僕は人々の暮らしを支えているという自覚を持った、納税者になりたいです。人々の心の杖となるために。

はじめて考えた税

熊本市立西原中学校 1年 中山 夢香

小学校のときに「租税教室」があった。

そして、中学生になり「税についての作文」が夏休みの宿題で出された。

まだ義務教育の私にとって、「税」は難しく理解しがたいものである。私が知っている税金は、身近なもので「消費税」があるが、実際、必要な物は親が購入するため消費税を納めたという実感はない。ただ、みんなが納めた税が、私たちの普段の暮らしの中に様々な形で使われていることは学習した。そんな私はこの春、熊本地震を通じて、税の使われ方を目の当たりにし、その役割を痛感することとなった。

震災直後の警察官による避難誘導、けが人の救急搬送、避難している人への支援物資、仮設住宅の建設費用、通学路に置かれた震災ゴミやガレキの撤去費用、そして被災した学校や道路などの公共物の修復工事など、私たちの安全や普通の暮らしを守っているのが税である。

「普通の暮らし」とは何なのか。住むところがあり、食べるものがあり、着るものがあり、そして安心して通れる道路があるなど不安を感じない生活だと思う。震災までは感じたことのなかった不便さや不安が復興とともに徐々に安心に変化していることに気付いた。

同時に「今回の地震のように突然必要となる税金は、どこから出されるのだろうか。」という疑問を感じた。国の予算は前もって決められているはずである。親にたずねると「家が壊れたらどうする。お金が足りないときは借金してでも修理しないと生活できないよね。」と答え、国を守るためには税金だけでは足りないから、借金していることを教えてくれた。

ただ、この借金は、日本の国を守るための費用の約半分を占めていて、すぐに返済できるような金額ではないらしい。私たち親、私たち、そして私たちの子や孫と将来に渡って返済し続けたいといけなくらい、途方もない金額なのだ。

また、少子化といわれる今、私たちが大人になったとき、働き手は減り、お年寄りが増加すると言われている。そんな中、この借金を返済しながら多くのお年寄りを支えることができるのだろうか。今の日本が抱える税の問題は、決して大人たちだけの問題ではなく、私たち子供も正しく理解する必要があると思う。

今回の作文を書くことで税の問題や役割が少しだけではあるが、理解出来た。

最後に、今の私に出来ることは、教科書を大事に使うことと、入学の際に借りた机やイスを卒業までの三年間、大事に使い続けることだ。将来、私が社会人となったとき、この税の問題が少しでも解決していることを願いたい。

私の公約、聞いてください

鹿屋市立串良中学校3年 向井 優梨香

「君たちが選挙に出るとして、市民に公約を宣言するとしよう。さあ、どんな公約にする？」突然、先生が質問を私たちに投げかけた。この質問に最初に答えることとなったのは私だった。困った私は思わず眉間にしわを寄せる。そんな私を見た先生が「例えばの話なので、実現できそうにないことでも構いませんよ。」と言った。それを聞いた私は、パッと浮かんだことを述べた。「現在の消費税八パーセントを五パーセントに戻したいです。」「なるほどね、確かに八パーセントはきつい。」そう言って先生は私に同情すると、次の生徒に質問していったのだった。でも私はもう、他の意見を聞くことを途中でやめてしまった。なぜなら、自分の言ったことが正しいのかどうか頭の中でぐるぐると考えていたからだ。

「消費税って減らしていいんだっけ。」

「うわ、八パーセントになったっていうのに、まだ私たちに求めるの？十パーセントって多くない？千円買えば、百円玉を税金として払うなんて…。買い物する気がなくなる。」増税に関するニュースを伝えるテレビ画面に一人で文句を言い続ける。ついこの前、八パーセントになったばかりだというのに、さらに二パーセント要求されるのはうんざりだった。増えるのは検討して、減らすことには話がでない。当たり前だが、少し悲しい。「でも、税金のおかげで私たちの暮らしが支えられていると思うと何とも言えない…。」その考えが最もだった。増税は嫌だと言っても、税金が無くなればきっと私たちの生活は辛くなる。結局のところ、税金が減れば自分たちの安心で安全な現状が失われるのである。私たちとしてはそちらの方が恐ろしい。まだ、十円玉を払う方がいいかな、と思う。一人で考えながらもう一度、テレビ画面を見てみた。まだ増税に関するニュースを伝えていたようだった。ニュース記事を読み上げるキャスターの隣でコメンテーターだろうが、一人がつぶやいた。「増税は辛いですが、いつかまた近いうちに十パーセントになるでしょう。でも、私たちの将来を考えても税金は必要ですよ。」将来…？今までの私にはない考えだった。そうだ、私たちには「将来」というものがあるのだ。税金が使われるのは、現在だけではない。私たちが大人になっても使われるのであって、全てを今使うのではないのだ。私は増税という言葉にばかり気をとられ、税金の在り方について考えることをやめていた。「やっぱり、消費税は減らしてはいけない。」

「先生、訂正してもいいですか。公約についてです。」こんなカッコいいことはもちろん言えなかった。だから、ここで言うとおこうと思う。税を増やしたい、減らしたいでなく今ある税金について私は深く考え直したい。だから、みんなでもっと税金について考え、納得する案をつくりたい。

「以上が私の公約です。ご清聴ありがとうございました。」そう誇らしげにつぶやいた。

「腎不全」

二年前に亡くなった祖母の病名だ。祖母は子供の頃から腎臓が悪く、何度も入退院を繰り返していた。また、腎臓の濾過機能が低下しており、自力で血液中の老廃物や尿毒素を取り除けないため、一日置きに血液を濾過するための人工透析を二十五年間行っていた。

人工透析には一ヵ月五十万円、国民健康保険を適用しても十五万円の医療費が掛かる。その他にも手術代、入院費用を含めると医療費はとても高額で、払いきれたのだろうかと不安に思い、母に尋ねてみた。

「国民健康保険以外にも、特定疾病療養受療証という制度により医療費の自己負担額は一ヵ月で一万円、一年で十二万円となる。そして医療費を全額自己負担した場合に比べ、一年で五百八十八万円、二十五年間でなんと一億四千七百万円も税金で補助されている。」

そのことを知って私は、国が負担してくれた医療費のあまりの膨大さに愕然とした。また、「亡くなったのは悲しいが税金に支えられてからこそ最後まで治療を続け、穏やかな死を迎えることができた。」と母は言い、日本の医療制度に深く感謝していた。もしも税金による支援が無ければ、到底払い切れず満足のいく治療も受けられなかったかも知れない。

それでも、私は、税金は大人の払うものだと考えており、大きな病気にかかったことがないものも相まって、税金に支えられているという実感が湧かなかった。だがある時、ふと教科書の裏を見ると「この本は税金によって無償で支給されています。」という言葉が書かれていた。私達が何気無く使っている教科書も、税金で賄われている。私達はその言葉の意味を軽んじているのではないか。私達は普段から税金を浪費してはいないだろうか。「税金によって」という教科書の言葉が心に重くのしかかった。

周りを見渡せば、税金は様々な場所で様々な形で使われている。警察や消防は社会の安全を守り、医療費や、土木費、教育費など税金は様々な形で社会に還元される。もしも、税金が無ければ、当たり前の日常すら保障されないだろう。税金に支えられているからこそ、私達は何不自由なく生活していけるのではないか。

祖母は生前、琉球琴などの楽器をたしなみ時々演奏会を開催し、教室を開いて弟子をとっていた。長い闘病生活の中にあっても自分の趣味に興じることができたのは、税による医療制度の補助の支えあってのものだと思う。

税は国家への上納金ではなく、国民が快適に生活するための投資や、保険のようなものではないだろうか。税はまた、困っている人達を支え、社会をより良くするためにあるのだと思う。

「社会に還元する税金」税は私達に還ってきて、時には命を救う

小学校に喜びいっぱい入学した日以来、私は毎日楽しく学校に通っている。四月になれば進級し、新しい教科書をもらう。そして先生方は、その教科書を使って私たちに授業をしてくれる。校舎や学校の設備が古くなれば、修理してくれる。それは、私にとって「当たり前」のことで、それを支えてくれている人の存在など、それまで特に考えたことはなかった。

中学に入って、私は学習塾に通い始めた。私が「学習塾に行きたい」と話したとき、母は「いいけど、そこそこ高い授業料になるのだから、しっかり勉強してね。」という返事だった。そうか。「学ぶこと」にはお金がかかるのだ。では、どうして学習塾で学ぶには多額のお金が必要なのに、中学校で学ぶことは「タダ」なのだろう。

いや、小中学校で勉強させてもらうことは決して「タダ」ではない。それは、お父さんや、お母さんや、私の知らないたくさんの人たちが、一生懸命に仕事をし、税金を納め、そのお金で、私たち子どもは、学ぶ機会を与えてもらっているのだ。現在、私がこのように教育を受けて、毎日幸せに暮らしているのは、がんばって働いている人たちの税金に支えられているからなのである。小中学校だけではない。平成二十六年四月より、高等学校等就学支援金制度も導入され、公立の高等学校の授業料については、実質無償になっている。このような資金援助があることは、これから高校を受験する私たちにとって、本当に心強いことであり、子どもが教育を受ける機会が均等に与えられていることを実感する。このような教育関係に使われている税金は、日本の将来を担う私たちへの投資といえるだろう。

このように考えると、税とは、私たちの毎日の暮らしを豊かにしてくれるものであるといえる。私は、まだ中学生であり、自分でお金を稼いではない。しかし、私の生活は、働いている大人の人たちが支えてくれている。だから、私も大人になって仕事をするようになったら、たくさんの人が「誰かのために」という思いでつないできた「税金のバトン」を、次の世代へつないでいこう、と強く思う。今は、少子高齢化社会と言われ、自分たちが大人になったときには、働ける人だけで社会を支えていくのは大変だ、と言われていた。しかし、今、支えてもらっている分、次は、私たちが社会を支えていくために、自分にできることを見つけ、それをやりとげる責任があるのではないだろうか。

税金——それは、老いていく人たちから、働き盛りの人たちへと受け継がれ、そしてまた、未来を担う子どもたちへとつないでいく大切な「バトン」である。私もこのバトンをしっかり握って、次の世代へ届けよう。日本の明るい未来のために。

なにげなく見ていたテレビ画面に、十七歳の少年の姿があった。少年は実家に仕事がないため、五年前からガーナで暮らしながら働いている。ケーブルを燃焼し有毒ガスが出て、病気になっても五年間毎日続けている。もちろん働いているため学校にも行けず、日本だと小学六年生頃の幼い時期から、家族を養うため、自分が生きるために苦しみ、耐えながら働く姿がそこにはあった。

世界中には学校に行きたくても行けない人がたくさんいる。病気になっても薬が高くて買えず、苦しんでいる人。水が近くにないため、毎日何キロもの道のりを重い水を背負い歩く子供など、たくさんの困難と戦いながら今日を生きている人たちがたくさんいる。そういった人たちのことを考えるとき、私たち日本人は、恵まれすぎた環境で生活していると言わざるをえない。学校にも九年間義務教育で通える。蛇口をひねれば水がでて、夏は水遊びをする子供達の声が聞こえてくる。地域の安全を守ってくれる警察官や消防士がいて、病院では診察してくれる医者がそばにいる。こんな当たり前の生活が、海を渡って違う国に行くと、夢のような生活だと言う人もいるのだと思うと、胸が苦しくなった。それと共に日本に産まれてきて幸せだと痛感した。

この今の日本の生活を支えているのは、税金だ。正直つい最近まで、私は税金に対してあまりいいイメージをもっていなかった。一生懸命両親が働いた給料から税がひかれるからだ。でも両親は税金を「高い」とは言ったことはあっても、「いらぬ」とは言わない。その姿を見て、税金に対するイメージが少し変わってきた。私の両親は税は必要なものであることを知っているのだ。私が学校に通えるのも税金のおかげだ。父は仕事から帰ってからも、卓球部のコーチをしてくれる。もちろん税がないと部活動はできない。税金があるおかげで、私はきれいな体育館で三年間父とともに卓球をしてきた。税は私たちに喜びと豊かな生活をもたらしてくれる。私たちの生活と税は密接に結びついている。だからこそ、今安心して暮らせる社会ができているのではないだろうか。ガーナの十七歳の少年は、命の危機に晒されながら毎日働いているにも関わらず、日本円にしてわずか三〇〇円程度しかもらえない。その少ないお金で家族を養うため、頑張っている。彼は、将来についてどう考えているのか。そもそも考える余裕すらないだろうか。彼に未来は見えているのだろうか。

私はよく「夢があった方が良い」と言われるが、まだ決まっていない。しかし、夢について語るができるのは、今税金を支払ってくれている大人達のおかげであると私は考える。だから私は自分が払う側になった時、しっかり納税したい。そして、日本に生まれてきたこと、納税者への感謝の気持ちを忘れず、自分の夢をゆっくり探していきたい。

幸せに生活するために

加須市立加須北中学校 1年 高塚 誠

ぼくはゲームが好きです。好きなゲームの中に『シムシティ』というゲームがあります。この『シムシティ』というゲームは、プレイヤーがとある町の市長になって、市民から税金を徴収したり、その税金を使って市民に役立つ施設を作り、町を発展させていくゲームです。

税金は、ただ徴収するだけでは無く、その時の状況に応じて、税率を決め、市民が円滑に生活できるよう配慮しなければいけません。立派な市にしたいからといって、税率を高くし、市民に無茶をさせれば、信頼を失い他市へ引っ越ししてしまいます。また、税金を払わない人が増えてたりするかもしれません。その反対に税率を低くしすぎても、市に借金が増え、生活する上で必要な施設（例えば消防署や病院など）が建てられず、火災や事故・病気などでたくさんの命を失なうことになってしまいます。

ゲーム上のことではありますが、ぼくにとって税金とは、みんなが幸せに生活するために、なくてはならないものなんだと実感しています。

先日、社会の授業で、私たちの暮らしと税金というプリントをもらいました。ひととおり読んでみて、とても大きな金額だな…と思いました。その中には、ぼくの父や母が一生懸命働いた給料から徴収された所得税というものがあるのだなと感じました。また、ぼくが買う本や洋服・食べ物などに発生する消費税というものがあるのだなと思いました。

ぼくはお金が生活する上でとても大切だと思っていて、よく考えてお金を使うようにしています。なので政治家や政府の人にも、よく考えて大切に税金を使って欲しいと思います。こうして税金について考える中で、改めてお金や物を大切にすることは、幸せな生活を守ることにつながるのだと思いました。

また今後は高齢者が多くなり、今のような生活を維持するには大きな費用が必要になるとありました。ぼく達が大人になった頃には、2人で1人のお年寄りの生活を支えていかなければならなくなるそうです。年金などのしくみもあるけれど、目先の欲にとらわれ自分の事しか考えず、払わなければならない年金や税金を払っていない大人がたくさんいるそうです。ますますぼく達の負担が大きくなり、国のしくみが破綻してしまうかもしれません。もし日本の国が破綻してしまったら、現在のように暮らしていけるのでしょうか…？答えはノーだと思います。

『シムシティ』の町…、上手くいかなければリセットできます。でもぼくらの暮らしはそうじゃない。長い年月をかけ、町を立て直さなければいけなくなります。ぼくはきちんと税を納め、自分のため家族のためがんばりたいです。

日本には犯罪を犯し、逮捕後刑務所で生活をする受刑者という者が存在する。一見、受刑者、刑務所が税と関係のあるものには感じないが、私は現代社会の受刑者の更生に向けて税は深く関わりのあるものだと感じ、疑問を持った。

私が刑務所と税の関わりに対して興味を持ったきっかけは、姉が刑務官として刑務所で働いているからだ。刑務所では、重い罪でも軽い罪でも安定した食生活ができるという。調べてみると食事は三食与えられているようだ。そして、生活の半分は刑務官が世話をし、所内で作業を一日に八時間を超えない程度行うようだ。なぜ作業を行うのかというと、受刑者の社会復帰を促進させるという目的のため、主に社会貢献作業として椅子など様々な物を製作している。そして作業報奨金も受刑者に手渡される、と知って私は一番に驚きがあった。だが、考えてみると受刑者は食事や報奨金など、私達の消費税で生活をしているのではないかと疑問が出てきた。犯罪を犯し、違反な行為をして逮捕されたのに、なぜ私達の消費税で生活ができていいのか。受刑者の生活にも使われていると知り、疑問ばかりが頭の中で飛び交った。でもある日、学校で税理士の方が租税教室を開いて下さった。租税教室をきっかけに私の考えは変化した。租税教室では、税理士の方が税はどのように納めているか、や税のしくみなどをていねいに教えてくださった。税理士の方は「税金のしくみを考えることは、日本の未来を考えることと同じ。」と言っていた。その一言で受刑者に使われる税のしくみについての考え方が私の中で大きく変化した。私達の税は受刑者を更生を後押しするために使われているのだ、と前向きに受刑者と税の関わりについて考えることができた。刑務所に税が使われているということは、社会が受刑者に対して更生してほしいという期待の意味が込められていると私は思う。なのでその分、受刑者には、自分達の生活は消費税でできているんだ、ということをお忘れず感謝の気持ちを持ってもらいたい。また、受刑者には作業でもらえる報奨金も自分の物に使うのも良いが、家で待っている家族がいるのならば家族のために使ってもらいたい。そして家族のために、早く社会復帰を、という気持ちを持ち罪を償ってほしい。

私も、身近にある税が様々なことに使われていることをお忘れず、税をどう使うか意識を持ちながら生活していきたい。そして私も日本の未来に貢献できる活動を行い、税の使い方にしっかりとした考えを持っていきたいと思う。

私が税に対して思うこと

越前市南越中学校3年 永田 梨々香

町はごみであふれ返り、火事が起こってけが人が出ても消防車や救急車がなかなか来ない。学校では教科書を提供されず、一冊一冊買わなくてはいけない。警察官がいなくて町の安全が守れず、毎日不安になりながら生活をする。

今の日本で、そんな生活を想像することができるでしょうか。私はできません。私たちは当たり前のように学校へ行き、机や黒板、教科書などを使ったり、きれいな水道の水を飲んだりしています。しかし、こんな生活が送れているのは税金のおかげです。

私の祖父は、血圧の関係で救急車で運ばれたことがあります。私は運ばれた時にその場にいなかったのですが、その話を後で母から聞いた時はとても心配で不安な気持ちになりました。しかし、そんな不安な気持ちと同時に救急車がすぐにかけてくれて本当に良かったと思いました。祖父のように、救急車に助けられたという人はたくさんいると思います。多くの命を助ける救急車があるのは税金のおかげです。私は、税金のありがたさを感じました。

「税」といえば、所得税、法人税、たばこ税、消費税、酒税など、様々な種類の税がありますが、私たち中学生にとって身近で思いつきやすい税は消費税だと思います。消費税は現在八%で、少しずつ消費税率は引き上げられています。「お金に困っているから消費税率の引き上げは嫌だ!」と思う人もいますが、世界には消費税率が二十%をこえる国もあり、日本の八%は低い方だといえるのです。

消費税率が高いと、税金の負担は大きくなりますが嬉しいこともたくさんあります。例えば、デンマークは消費税率二十五%ですが医療費、教育、年金などは無料です。また、スウェーデンは福祉国家で税率は高いですが福祉が充実していて暮らしやすい国だといえます。

このように税金は、福祉や子育て、教育、町の安全などの面で国をよりよくするために使われています。二〇一七年、消費税率が十%に引き上げられるといわれていますが、私はよい国づくりのために良いことだと思います。今の安全で便利な生活が送れているのは税金のおかげだということを私たちは忘れてはいけません。そして、何か物を買う時に、「自分はよりよい国づくりに貢献している」と考えると税を良い気持ちで払うことができるのではないかと思います。「税」に対して感謝する、それが一番大切なことだと私は思います。

「自動車税の案内がきたぞ。」「固定資産税の支払い案内が届いたぞ。」と言いながら、準備を進める祖父。愛用の手帳には、きっちりと支払い期日と金額が記されている。隣でぼくが手帳に目をやると、祖父は税金について話し始めた。現職の頃、市役所の市民税課に勤めた経験のある祖父は、それは熱心に税金について教えてくれた。毎日使う愛車、家族と一緒に過ごす家や土地にも税金がかかり、毎年支払っていることを知った。また、母が仕事をして得る給料や祖父母が受け取る年金からも、所得税として税金が引かれていることを教わった。

身近なことでは、毎日の暮らしの衣食住に関わる様々なものを購入した時にも、消費税がかかっていることがわかった。実際にぼくが本屋で参考書や文具を買った時、レジで支払った代金は、商品の本体価格に税を足した金額だった。

そういえば去年の冬頃から、我が家にグランドピアノを買い替える話が持ち上がった。いくら予算で、いつ、どこで、どのタイプのをなどを、色々調べたり話し合ったりして購入することになった。何しろピアノ自体価格がとても高いので、それにかかる消費税の金額が大きいことにぼくは驚いた。今でもその時のことをよく覚えている。消費税の八パーセントが十パーセントに引き上げられる予定だったので、今のうちにと年内購入を決めたのだった。このような経験から、ぼくたちの暮らしは、様々な税金と深く関わり合っているのだと認識した。

ぼくや家族をはじめ、個人が得た利益や個人が持っている資産や財産。購入した商品や受けたサービスの消費等々には、すべて税金がかかるのだとわかった。それと同時に、ぼくたちが納めた税金がどのような形になって暮らしに巡り、生かされ役立っているのかを祖父に尋ねてみた。すると祖父は、「みんなが納める税金は、国や都道府県、市町村にそれぞれ区分され、大切な財源になって、みんなの暮らしを支えているんだよ。だから、納税は国民の義務なんだよ。」と教えてくれた。話を聞いて、ぼくは様々な形で、税金が広く世のために役立っていることを改めて知った。

税金は、医療や年金、福祉や介護等の社会保障のために使われたり、災害時の復興支援のための大切な財源になったりする。道路や学校等の公共事業の建設費や整備にも使われ、今話題になっている、二〇二〇年の東京オリンピックのメインスタジアムや各種競技会場の建設費にも、税金が使われる。このように、みんなが納めた税金は、社会の中で様々な形で循環し、巡り巡ってぼくたちの暮らしを、安全で安心なものにしてくれている。

祖父が教えてくれた「納税は国民の義務なんだよ」の言葉を心に留め、ぼくが成人になった時、その義務と責任を果たそうと思う。

オリンピックと税金

学校法人灘育英会灘中学校 3年 西原 薫

リオ五輪も終わり、次は四年後の東京となった。多くの名場面を生み、感動のうちに幕を閉じたリオだが、開催前には「税金の無駄遣いだ」「私たちの大切な税金をオリンピックより教育や医療に使ってほしい」と市民からは反対の声が大多数だった。ブラジル経済の急激な低迷により、競技会場建設の遅れ、反対のデモ、治安の悪化など開催自体が不安視されていたが、大きなトラブルもなく、「世界の先進国でなくてもオリンピックを開催できる成功例の『象徴』である（IOCバハ会長）」と評価されるオリンピックとなった。そして今、東京では、設備の追加や人件費、資材の高騰などが重なり招致段階より大会運営費が莫大に膨らんでいる。不足分には国民が納めた税金が投入されるとも聞く。限られた予算の中でいかに大会を運営していくか。リオの成功から学べるものは多い。

リオ五輪ではコスト削減のため様々な工夫がなされた。既存施設の活用や、プレハブの多用である。例えば大会後は解体され、二つの水泳場として活用される競泳会場の外壁はシートで覆っただけの仮設施設だったが、素晴らしいレースや新記録を生むことができた。多くの資材を再利用することで予算を圧縮したのだ。また、リオの開会式にかかった費用は、ロンドンの三三億円に対して三億円にまで抑えることができたという。東京でもこうした工夫は引き継ぐべきだ。

組織の見直しも必要だ。閉鎖的な組織委員会が積極的に予算の内訳等情報の一般公開をし、詳細について専門家の意見を広く取り入れることもコスト削減のために欠かせない。

東京都は今大会運営予算として四〇八八億円もの税金を積み立てている。オリンピックがなければこの巨額予算を高齢者施設や保育所など待ったなしの福祉に使うことができたのだ。だからこそ、一層オリンピックではこの税金を最大限に活かす必要がある。

一九六四年の東京オリンピックのように成長期ではなく、国が成熟し、人口減少社会で迎えるオリンピックである。お金をかけて、大きな施設をつくれればいいという訳ではない。借金大国でもある日本は効率的にお金を使いながら運営していく必要がある。まずは削れるところや改善すべきところを、広く意見を聞き入れて適正に対処する。その後で、リオでの閉会式のように日本のブランドを生かした演出を取り入れて日本での開催の価値を明確なものにする。これが税金を賢く使うベストな方法ではないだろうか。

国民の払う税金は年金、医療、福祉、教育など国民の安全で快適な暮らしを支えるさまざまな事業に使われる限られた貴重なものだ。納税者である国民が納得し、一丸となって各国の選手団をおもてなしできる東京オリンピックにするために税金がどういう風に使われているのか国民に対して内訳の情報を公開し、世論を反映していく必要があると考える。

ドイツの犬税は日本で必要か？

広島市立広島中等教育学校 1年 日高 永登

僕は、二歳から六歳まで、ドイツに住んでいた。日本に帰国した僕は、ショッピングセンターのとある光景に驚いた。ペットコーナーで、犬がモノと同じように販売されていたからだ。

ドイツでは、犬を飼いたい人は各犬種の犬協会等に予約をし、産まれてから初めて買うことができる。産まれても二か月以内の子犬を親犬から離すことも禁じられており、体長によって柵の大きさの規定もある。だから、店頭なんかで、犬は売られていないのだ。

やっと、犬を飼うことができるようになったドイツの家庭。それだけではない。散歩などで十分な運動をさせなければいけないという条例もある。さらには、「犬税」と言われる人間で言う市民税のような税金を支払う義務が生じる。この犬税は、無責任な飼い主を減らすことが目的で、地方自治体の税収となる。犬一頭で、年間七十から百四十ユーロを支払う。それでもドイツの人口八千万人に対し、飼い犬は五百万頭もいる。捨てられる犬は少なく、大事に飼われていることが理解できる。ある公園で、ポストのような物の中にビニール袋が備えつけられていたのを覚えている。散歩中の犬が糞をすると、誰でもそのビニール袋を使って処理して良いのだった。公園が綺麗なのも納得。こういったことも、犬税で整備されていたのかもしれない。犬税の有無は、その国全体の犬に対する思いに比例しているのではないだろうか。

捨てられたりしたドイツの犬達は、シェルターという施設で保護される。しかし、日本のように殺処分されるような施設ではなく、次の飼い主が見つかるまで、手厚く保護される場所なのだ。

日本ではどうだろうか。調べてみると年間十二万頭もの犬や猫が殺処分されている。なんと、設備の費用も殺すための道具も、殺処分を行う人の人件費も、全て税金。身勝手な飼い主や、営利目的の悪徳ブリーダーの後始末を税金を使って行うのだ。

犬はモノではなく、人間と同じ生き物だ。人間も介護が必要なのに放っておかれたり、家族から見捨てられたりしたら、どうだろうか。日本でもドイツのように、犬税を取り入れないと犬を上手に飼えないのだろうか。もちろん犬を家族同然に飼っている家もあるが、「ペットは家族」という考えがもっと普及するとともに、殺処分の意味するところを一人一人が理解していかなければならない。

今の僕には、犬税が必要かどうかという答えは出せない。もっと税のことを学び、人間や動物を含めた福祉と税の関係を知らなければいけない。ドイツの事情を見て、払った税金は自分達に戻ってくる事、つくづく実感した。人間も犬も他の動物達も、幸せに暮らすことができる日本でありますように。

無言のヒーロー

東みよし町立三加茂中学校3年 福原 佑樹乃

先日、池田法人会の方に租税教室を開いていただきました。私の知らない税の話の色々教えていただきました。これを機にもっと税金について知っておきたいと思い、家に帰り国税庁のホームページを閲覧しました。小・中・高と年齢に応じた学習ができるようになっていて、とてもわかりやすく書かれていました。そしてそこに、税金が一番多く使われているのは社会保障関係費だと書かれていました。

私の父は十一年前、くも膜下出血で倒れ、歩くことも話すこともできなくなり、昨年亡くなるまでずっと病院でお世話になりました。父が倒れてから、収入は母一人のお給料だけになってしまいましたが、今まで不自由だと感じたことはありませんでした。それは母がお給料をたくさんもらってくるからだと思っていました。ところがそれは大きな間違いで、我が家ほど税金のお世話になった家はないのではと思われるほどでした。

父がくも膜下出血で倒れた時、九時間に及ぶ手術を受け、その後しばらくはICUに入っていました。その月の医療費の支払いは百万円を超えていたそうです。でもその時支払ったお金は、高額療養費制度という制度のおかげで自己負担限度額を超えたお金が戻ってきたそうです。そして、半年ほどして障害認定を受け、昨年亡くなるまで障害年金を受け取ることができました。そして、亡くなってからは遺族年金を受け取っています。今まで私が知っている税金といえば、消費税くらいのもので、税金は納めればそれで終わり、その後の使われ方など知りもしませんでした。だから、中学生の私にはあまり関係のないものだと思っていました。ところが、知らないところでこんなにもお世話になっていようとは思ってもよかったです。この話を聞いたとき本当にありがたいと思いました。と同時に何だか申し訳ないと思いました。

税金を納めない人ができると、公平性に欠けるため、納税の義務は憲法で定められています。従って、ある程度の強制力があるためみんな税金に余り良いイメージを持っていません。税金は、色々に姿かたちを変えます。そして、「これはみんなが納めてくれた税金です。」と言ってはくれません。だから、知らないところで色々お世話になっているのに、私のように気付かない人が多いのです。我が家の家計を母一人が働いたお給料でまかないきれはるはずもなく、社会保障制度のおかげで今までも、そしてこれからも生活していけるのだということが分かった時、税金は我が家にとってまさに、『無言のヒーロー』だと思いました。

これからさらに高齢化が進み、年金に、医療費にと、ますます税金の重要性が叫ばれることだと思います。私が大人になったら一生懸命働いて、少しでも恩返しができるようにしっかり納税したいと思います。

なんで税金が必要なんだろう

菊池市立泗水中学校 2年 大賀 唯人

コンビニで百円のジュースを買う時、レジでは百八円を払います。これは消費税が8%だからです。僕はこの8円を今まで「たったの8円」と考えていました。8%の前は5%でした。この話を母としていると、その前は3%だったと聞きました。なぜ消費税は上がっているのでしょうか？買う商品の価格が変われば、消費税も変わります。十万円の商品では消費税は八千円となります。僕の中の「消費税8%」は「たった」という言葉で表せる数字ではないようです。

さて僕は今年の夏休みに『プラチナ未来人財育成塾』という事業に参加させて頂きました。これは、未来のリーダーを育み、リーダーとは何かを学ぶ機会でした。この事業の中の講義に税金に関する話もありました。その講義では、買い物をする時についてくる消費税や、仕事の給料から納められている税などが、みんなが利用する公共施設などにつかわれている事を学びました。僕が住んでいる菊池市には、14の小中学校をはじめ、文化ホールや公民館、図書館などたくさんの公共施設があります。これ以外にも、救急車を呼んだり、ゴミの収集も税金でまかなわれています。みんなが使っている教科書が税により無償であることは知っていました。では、もし税金を誰も納めなかったらどうなるでしょう。救急車を呼ぶ事も、ゴミの収集をしてもらう事も、全てにお金がかかってきます。教科書も買わなくてはなりません。今まで当たり前だと思っていた暮らしが一変してしまうでしょう。みんなの生活はどうなるのだろうかと考えただけで怖いと思いました。

僕は今まであまり深く税金を知ろうとしていませんでした。しかし今回、菊池市から中学生を千葉・福島へ派遣し、学ぶ機会を与えていただけたことで、税に関してや、リーダーとは何かを考える機会を得ました。この経験で学んだ事は、僕にとってとても有意義なものとなりました。この経験こそが税金により与えて頂いたのです。学びの機会を得て、全国各地の中学生に出逢いました。税金が更に近いものと感じ、有り難く思えました。「なんで税金が必要なんだろう」、この疑問は税金により学んだ時間で分かってきました。みんなが安全・安心に暮らすために分け合って納めているのが『税金』です。税金がある事によって、この社会の安定は保たれていると思います。

今後、消費税は10%になるようです。今までは何気なく払っていた消費税に、初めはただ嫌だと思っていましたが、僕が納める消費税がどのように使われていくのかを考えると、きちんと納めて、それを有効に運用してもらいたいと思いました。

消費税は子どもでも納められる税金です。僕も、みんなが安全・安心に暮らせるように、しっかりと税金を納めていこうと思います。

幸せを支える一人に

宮古島市立平良中学校3年 濱川 宗之

「税」についてはほとんど知識がなく、どちらかといえば、これまでマイナスなイメージしか持っていなかった私にとって、この夏その考えを一変させる出来事がありました。それは、今年の旧盆の送り日に祖母の待つ伊良部島へ渡った時のことです。

父母とともにたくさんのお供え物を車に乗せ、伊良部大橋に差し掛かった時、母がしみじみと「橋が架かって本当に良かったね。」と話し始めました。私は単に荷物を持って船に乗り降りする手間が省けたことを母が喜んでいるのだと思っていましたが、そればかりではありませんでした。

伊良部大橋は昨日一月に開通した宮古島と伊良部島を結ぶ全長三五四〇mの橋で、無料で渡れる日本最長の橋としても知られ、宮古の観光名所のひとつにもなっています。橋が開通した今でこそ、時間を気にすることになりましたが、それまでは船が唯一の交通手段でした。そのため、病気や事故といった緊急の際も船での搬送に時間がかかって命を落したり、台風などでしけが続くと船を出すことができず、食料にも事欠くなど不便な思いを強いられたりしたそうです。私の父母も苦い思いをした一人で、祖父が脳梗塞で倒れた際やはり、搬送に時間がかかって意識が戻ることなく亡くなってしまったこと、母方の祖母が亡くなった時、辛く悲しい思いで亡骸と一緒に暗い夜の海を小さな船で島に帰ったことなど、離島ゆえの苦しい体験を話してくれました。私が幼稚園に通う前のことで、ほとんど記憶なかったことだったので、話を聞き改めて離島の厳しさを考えさせられました。同時に、自由に行き来できるようになったことを心から喜ぶ両親の気持ちが痛いほど理解できた時間でした。

大橋の建設は宮古島・伊良部島の住民の悲願であり、構想から何十年もの長い年月と莫大な費用を費やしてようやく実現したと聞いています。そして、その建設費用が国民の納める税金であることを知り驚きました。宮古島には伊良部大橋のほかにも、池間大橋や来間大橋など離島を結ぶ橋が建設され、住民の大切な生活を支えています。橋だけではなく、道路や学校などの公共施設、台風などの災害補償もまた、私たちの税金で成り立っているそうです。つまり、私たちはお互いの暮らしを豊かに支え合うために税金を納めているのだということになります。そう考えると、これまで買い物に消費税がかかるのはいやだなとか、自動車にまで税金がかかるのは大変だなと思っていた自分自身が少し恥ずかしくなりました。

旧盆の行事を済ませた帰り道、伊良部大橋を渡りながら私は決意しました。「将来、社会人になった時、しっかり税を納められる人になろう。誰かの幸せを支えられる一人になろう」と。

人や未来を育てる税

西会津町立西会津中学校 2年 飯嶋 彩香

七月十四日、私の通う西会津中学校にチェアスキーヤーでソチパラリンピック金メダリストの鈴木猛史さんが講演にいらっしゃいました。それまでの私はチェアスキーはおろか、パラリンピックについてもよくわからなかったので、お話を聞くのがとても楽しみでした。

鈴木選手は世界を代表するチェアスキーヤーで私たちと同じ福島県出身でもあります。幼い頃、不慮の事故で脚を切断したこと、その後も同級生と同じように学校生活を送ったこと、チェアスキーに出会ったことなど、鈴木選手の今までの人生に起きたことを語ってくださった中で、ひとつ、気にかかることをおっしゃいました。

「パラリンピックには、国からたくさんの税金をいただいて、参加することができます。」

それまでの私は、税金といえば「お金を取られる」という認識ばかりで、「何に使われているのか」という点についてはよく知りませんでした。だから、これをきっかけに税金の使われ方について調べてみることにしました。

まず、納税には直接税と間接税があり、私が良く知っている消費税は間接税に当たります。しかし、消費税は歳入全体の十七%に過ぎず、所得税や法人税などの直接税が大きな収入の柱になっているということです。では、なぜ税を取るのかというと、税金で私たちの日本を動かすためです。集めた税金は社会保障や教育、公共事業、国の防衛、経済援助と、様々な用途に使われ、私たちの生活を支えていることが初めてわかりました。

なかでも教育に関することでは、私の通っている学校や、使っている教科書、そして生活を豊かにするための科学技術開発など、今現在から未来のことまで考えられ、たくさんのことに使われていることがわかりました。その中に鈴木選手のおっしゃった「たくさんの税金をいただいて参加することができる」、オリンピックなどの選手強化費が含まれていました。国を代表する選手が心配なく、思いっきりプレーできるように税金を使ってバックアップすることは、その人の可能性を育てることでもあると思います。こうして考えてみると、教育には今現在の子どもを育てる、という役割のほかに、「未来のために今を育てる」という大きな役割があるように思いました。国として税金を使って選手を応援することはすばらしいなと思います。

この講演の後、リオ・オリンピックがありました。たくさんの日本人選手が表彰台ではじけるような笑顔と喜びの涙を流している様子を見て、鈴木選手もこの表彰台を目指してがんばっているんだろうなと思いました。そんな選手のみなさんを私も応援したい。私の払う消費税がもしかして役に立っているかもしれないと思うと、とても誇らしい気持ちで買い物をすることができました。

支え合う税金

水戸市立飯富中学校 1年 小藺江 倅生

僕の祖父は、三月に緊急入院することになりました。今まで大きな病気やケガをしたこともなく元気だったので、家族は驚きとショックでいっぱいでした。検査結果によると、祖父の病気は、腎臓が命に関わるほど悪いということでした。すぐに人工透析をしなければ、あと数日の命だと言われたらしいですが、処置のおかげで一命を取り留めました。家族全員でほっと胸をなでおろしましたが、祖父はもう仕事を辞めなくてはならないという現実と直面しました。祖父と祖母は二人暮らしなので、祖母は生活面やこれからかかる治療費のことを、とても心配していました。医師から、人工透析をするためには、高額な医療費がかかるという説明を受けていたからです。

しかし、祖父の入院のために、意外なところで僕も社会保障制度について学ぶことになりました。祖父の場合は、身体障害者一級となり、通院や入院をした場合にも、自己負担金を無くしたり減らすことができます。また税金の免除や減免なども受けることができるのです。祖母や母も、このような制度を何となく知っていたつもりらしいですが、自分自身や家族がそのような立場にならないと、税金と制度について、深く考える機会はなかったかもしれないと言っていました。とてもありがたいことだけど、それだけみんなの税金を使うということなので、助かる反面、申し訳ないという気持ちにもなると話していました。

日本の社会保障給付費の割合は、年金が約五割、医療費が約三割、福祉その他が約二割であると、今日のニュース番組で見ました。高齢化率の上昇にともない、ゆるやかに社会保障給付費は年々増加しているようです。社会保障には、今後も巨額の費用がかかり、消費税などによって、その財源を確保しなくてはならないとのことでした。政府は、消費税収のすべてを原則、社会保障に使うと決めています。今の消費税率八パーセントでは、社会保障費をまかなうことはできないそうです。そのために、消費税率を十パーセントに引き上げることになっていますが、景気の状態を考えると難しい問題なのだということが僕にもわかりました。

僕は、このような問題を解決するには、若い人たちに、税金について理解を深めてもらうしかないと思います。病気やケガ、老齢や障害、失業などにより、自分の努力や責任だけでは対応できないリスクに対して、お互いに支え合っていくのが社会保障の役割です。社会保障制度は、生涯にわたって支え、安心を与えてくれます。みんなでみんなの生活や健康を守ろうとするこの制度を理解し、しっかり働いて、税金を納めることが将来の自分のためになるということ、しっかり知るべきだと思います。

大好きな部活動のかけには

船橋市立葛飾中学校 3年 今屋 海音

二年前、税についての作文を書こうと調べたことを思い出してみた。税のしくみのすばらしさに感心し、とりわけ充実した学校生活を送れていることが税のおかげだと感謝したことを思い出す。そして、あの時知った教科書の裏表紙にある¥0の文字と「税金によって無償で支給されています」の文章を再び確認した。さらに今回、学校生活で税に感謝せずにはいられないことに気付いた。

学校で夢中になっていることがある。それは管弦楽部の部活動だ。私が担当しているのはチェロ。何事にも飽きっぽい私が好きでい続けている唯一の物と言える。チェロは小学校で入部した合奏部で出会い、それ以来、楽器を貸与され使っていた。でも、少し上達し夢中になった私を見て、祖父母と両親が私に自分用の楽器を買ってくれた。うれしかったが、同時に驚いてしまった。楽器の値段に。どの楽器も高価なのに部員が百人いようと一人一人に貸与されている。さて、それはどこから？

すると、楽器は税金で購入され市が各学校にふり分けて貸与されるしくみだった。立派な楽器での練習、よりよい音が奏でられるよう指導して下さる先生方、その成果を発揮しに行く市のホール。部活動に関わるほとんどが税のおかげだと改めて認識した。私は何て幸せなんだろう。税に支えられ、大好きなチェロを部活動で楽しみ、恵まれた学校生活を送っているのだから。一生懸命働いて、税を納めている人々に感謝の気持ちでいっぱいだ。前回調べた時よりさらに身近に税のありがたみを感じている。

さて、こうして考えてみると、国民の三大義務「教育・勤労・納税」は、どれか一つ欠けても社会のしくみがうまく成り立たないように思う。当たり前のように学校で教育を受け、少しでも豊かな暮らしをするために働き、得た収入から税を納める。教育と勤労は実感があっても納税したその先にその税がどう活かされているか無関心な大人もたくさんいるかもしれない。

中学三年生。義務教育最後の年だ。私は幸い税のありがたさを知る機会を得た。少しずつ大人へと近付き、あと数年したら私も働くことだろう。まだまだ国や社会のしくみなど知らないことだらけだ。とりあえずは、残りわずかな中学生生活、大好きな部活動を悔いのないよう頑張りたい。税が活かされた環境に感謝を忘れず。今はまだほんのわずかな消費税くらいしか税は納められないけれど、今度は今の私のような誰かの役に立つように、税を納める大人になりたいと思う。

「子育て・教育と税金」

大野市陽明中学校3年 中西 花穂

私は今、中学三年生になりました。そして、この学年は、義務教育の最高学年です。このような、大きな節目を迎えるにあたって、自分が生まれてから今日までの暮らしの中で、特に、子育てや教育の面について、税金と結びつけて考えてみようと思いました。

まず、生まれた時に戻って考えてみました。自分では分からず、親に話を聞いてみました。そこで、母が言うには、生まれた時からではなく、すでに生まれる前から税金によるサービスは始まっているのだということでした。妊婦さんは、必ず、市で母子健康手帳の交付を受けます。自分の母子手帳を眺める時、まず、税金と結びつく様な発想を持ったことがなく、改めて母と一緒に見直すと、無料券・公費・無償・提供・助成・一時金・手当金等々、多くの言葉が載っていました。このようなサービスが受けられると言うことは、つまり、税金が投入されていると言うことです。生まれてからも、母子手帳にはたくさんの成長が記録されていて、健診や予防接種など、こちらもちろん、税金のサービスを受けた証拠でした。保育園や幼稚園に入園すると、ここからも、税金によるサービスが大きな役割を果たし、手厚い支援を頂いて成長します。待機児童の課題等にも恵まれていて、さらに、保育料の減額制度を受け、とてもありがたかったと母が話していました。

次に、小学一年生で入学をし、義務教育が始まります。九年間、まず、教科書をお金を払って買うことはありません。新学期の、一番最初に頂く教科書には、必ず、一枚の紙がはさまれています。その紙には、国から頂く教科書で大切に学ぶと言った旨の文章が、ちゃんと記されています。九年間で利用する教科書は、一体、何十冊になるのでしょうか。私は、一冊も無くさずに大事に片付けてありますが、数えきれず、かなりのスペースと重さであるのは間違いありません。教科書は、学習を教わる大切な物としての役割に留まらず、義務教育九年間の貴重な足跡そのものなのです。義務教育に授業料はかかりません。公立学校で、児童生徒一人当たり、年間約九十万円前後の負担額になると計算されるそうです。健康面でも、忘れてはならないこととして、医療費の助成制度があります。途中、一部内容が切り替わった時もありましたが、今では、生まれてから中学三年生までの間、切れ目なく利用ができ、安心して病院を受診することができます。

私たち子どもの成長も、このように貴重な財源、「税金」で支えられていて、何気なく暮らしていますが、改めて感謝しなければなりません。幸福度一位の福井県に生まれ、大野っ子・福井っ子として学校に通えることに誇りを持ち、これからも成長を続けていきたいです。そして、税金について知ったことに感謝するだけでなく、将来は、しっかりとした納税者になりたいと思いました。

国の命と笑顔を守る税金

御嵩町立向陽中学校3年 伊藤 詩菜

生まれた以上、誰もが持つ義務である納税。大人に近づくほど負担が重くなり、納められない人も多くいる。本当にこれが自分のためになっているのかと考えることもある。そこで私は実際に自分と税金との関わりをたどっていくと二つの出来事を思い出した。

今から六年前の夏、大きな集中豪雨によって私の家から約二百メートル先の山で激しい土砂崩れが起こった。家の前は濁った泥水が川のように流れ、恐怖のあまり急いで家族で祖父の家に避難した。家が心配でなかなか眠れなかった。翌朝、恐る恐る帰ってみると信じられない光景に目を疑った。山の上から大きな岩が落ちてきたように木は押し倒され、下には泥が積もっていた。さらに山の目の前にある友達の家の上階の壁に泥がとんでいた。現実を見せられた。昨日山が崩れる瞬間を想像するだけでもひやひやして、本当に命が助かってよかったと思った。となると、残るは大量の土と二次災害を防ぐ作業だ。早く安心したい。そう思っているとすぐに動いたのは役場の方々だった。真夏でも着々と工事が進み、ついに山には柵ができて安心した。実はこれも国からの税金によるものだと後で知った。災害だから、タダかなと思っていただけ、タダでできることなんてない。みんなの税金で、あの怖い経験から一歩置くことができた。

私は小学五年生の夏に亜炭鉱に入った。こんなに立派な炭鉱を人の手だけで掘るといふのはすごいことだなと感じた。しかし今、そのせいでこの御嵩町は、地下の空洞が多くとても危険な状態だ。いつ、どこで沈没が起こるかと思うと不安で仕方がない。なぜなら実際に、地面に大きな穴があく事故が近くで何件も起きているからだ。テレビや新聞で見るたび、私の家や学校、通学路は大丈夫なのか、と心配する気持ちと正直迷惑だなとまで思ってしまった。しかし、そんな気持ちも少しは救われた。それが昨年度行なわれた学校の地下にあった亜炭鉱を埋める大工事だった。それによって危険にさらされた命が安心できる環境に預けられるものと変わった。本当によかったなと思えた。話を聞くと私の学校の工事だけで四億円もの国からの支援があったという。つまり全て税金のおかげだった。こんなに大きな額を出して、今借金大国の日本に影響はないのか。だからこそ感謝して生活していきたい。

税金、それは人の命を預かるものだ。税金が一切ない世界を想像できますか。一つ分かるのは、危険であり、いつでもどこでも明るい日常は送れないこと。納税することで自分の知らない間に税金の力を借りて生きている。国民で集め国民で使う、それは協力という形に見えてくる。考えれば考えるほど素晴らしいと思った。だから私は税金について理解し、社会に貢献できるようになりたい。一人一人が国の命と笑顔を守る日々が来るように。

お金より大切なもの

茨木市立太田中学校 3年 村田 詩織

私は、税の作文を書くために、税についていろいろ調べました。税にはたくさん種類があり、私たちの暮らしを豊かにするものばかりでした。

私が特に気になったのは、人間たちに捨てられた動物たちの殺処分にかかる税金です。人間の身勝手な都合により保健所につれてこられた動物たちは、引き取り手がこなければ殺されてしまいます。その中の多くは、炭酸ガスによる窒息死です。犠牲になる動物たちの数は10万匹以上にのぼります。

動物たちを収容している保健所では、えさのお金や、動物たちを殺処分するためのドリームボックスと呼ばれるガス室、殺処分後に遺体を焼却する焼却炉などの設備のお金も税金が使われています。そのために使われる税金は数億という額になります。

私は思いました。動物たちも、人間とおなじように毎日、いっしょうけんめい生きています。それなのに、「処分」という形で、まるでゴミのようにあつかわれてしまうのはとても悲しいことです。その動物たちは、灰になるために生まれてきたのではありません。殺されていく動物たちに罪はないのです。全て人間の責任にあります。もしも、動物の命を無責任にあつかう人がいなくなれば、不幸な命も、多額な税金も生まれません。だから今使われているこの税金はもったいないお金です。でも、そのお金をなくすことは難しいことではないと思います。ひとりひとりの意識で今を大きく変えることができます。

みんなの心が変われば、無責任に殺されてしまう命も、不幸に使うお金もなくすることができるのです。このような社会を実現させたいです。実現することができれば、今よりも、もっと良い暮らしになると思います。そして税も良いことに使うことができます。人間と動物、全ての生き物が仲良く暮らせる生活をつくっていきたいと思います。

税金は、普段の暮らしを支えてくれるものだけど、その中には、悲しい使われ方をするものもありました。そのことを知って、私も悲しくなりました。あまり人に知られていないところでも税金が多く使われていることを知りました。このことを、多くの人にも知ってほしいと思います。命の尊さについても、もう一度見つめ直すことが大切だと感じました。ひとりひとりの心で社会をより豊かに変えられるということも分かりました。

税金の必要性

学校法人鶴学園広島なぎさ中学校 1年 森田 涼楓

「税金が無ければ・・・」

皆さんは、この文の続きをどのように考えますか。この文の続きは、人によって大きく二つに分かれます。

一つ目は、「税金が無ければ、無駄なお金を使わなくても済む。」というような意見です。このような意見を持っている多くの方は、税金を納めることを負担に感じているからだと思います。私も前までは、一つ目の意見に賛成でした。なぜなら、税金が無かったら色々な物が安い値段で買うことができるようになるからです。それに、物を買う時の消費税があると、ほとんどの物は区切りの良い数字にならないため、お金を払うときに時間がかかってしまうからです。

しかし今の私は、別の意見を持っています。それは、二つ目の「税金が無ければ、安心・安全に暮らせなくなる。」というような意見です。なぜなら、税金が無くなってしまうと、横断歩道や信号機が無くなり、危険な道路が増えてしまいます。それに、警察や消防車や救急車を呼ぶだけでとても高い金額を請求されたり、ゴミの収集がされなくなったりしてしまいます。世界には、税金を徴収されていない国がいくつかあります。その中の一つに「ナウル共和国」という国があります。その国では、リン鉱石の採掘によって栄えていたため、税金はありませんでした。しかし、今ではリン鉱石を採掘し過ぎてしまい、鉱石が枯渇し、深刻な経済崩壊が発生しています。このように、私達が安心して「当たり前」の生活を送ることができるのは、税金の支えがあるからです。

ところが、税金にも限りがあります。今では、少子高齢化が進み二〇〇〇年には高齢者一人あたりを二〇～六四歳の人の三・六人分の税金でまかなっていましたが、二〇五〇年には、高齢者一人あたりを一・二人の税金でまかなわれると予想されています。そのため、このままの税金の暮らしを続けていくと、国の借金が増えていきます。だから、豊かで安心して暮らすために社会保障制度や持続可能な税の仕組みを構築していくことが必要になります。そのために、消費税や所得税などの様々な税金を国民の一人一人が正確に納めなければなりません。これからの税金は徐々に金額が上がっていきってしまうと思いますが、税金を納める一人一人が税金について理解し、税の必要性を知ることによって、税金への関心は深まっていくと思います。

今まで、「税金が無ければ、無駄なお金を使わなくても済む。」というような考え方だった人でも、国税庁のホームページを訪問してみたり、国税庁の動画を見てみたりしてみてください。きっと、今以上に税金への関心が深まり、日本の政治にも関わっているのだと実感できると思います。そして、「税金が無ければ、安心・安全に暮らせなくなる。」ということを理解できるようにして下さい。

「税」への感謝

島原市立第三中学校 3年 松本 梨瑚

私は、消費税が5%から8%へ増税することに反対だった。なぜなら、買い物をする時消費税が5%の方が安い値段で手に入れることができるからだ。しかし、この考え方を見直す出来事があった。

私は三歳の頃、頭の中に腫瘍があることを知った。四回も手術をした。そのおかげで、現在は右目を失明するという後遺症はあるものの、普通に生活を送ることができている。そして三ヶ月に一度、通院している。受診日の日、いつものように病院へ行った。その時の精算金額に私は驚いた。病院では、採血検査や尿検査、年に一度、MRI検査をし、検査の後は診察を受ける。そして、薬は三ヶ月分もらう。病院までは、片道二時間半かかるため、薬もまとめてもらっている。それなのに、払う金額が、「五千元」と私が思っていたより安かった。私は、二万円ぐらいはするだろうと思っていた。そこで、本来ならば私が払わなければならない金額、自己負担額を見てみると「百五十万」という金額だった。この金額にも私は驚いた。十一年間病院に通っていたが、受診料や薬の金額などがどのくらいかかるのか、今までの私は気にもとめていなかった。初めて見た自己負担額と、いつも払っている金額の差があまりにも大きく、開いた口がふさがらないぐらい驚いた。将来私は、きっと死ぬまで自分の病気と向き合わなければならない。そして、今の薬を飲み続けるだろう。百五十万円という大金を、自己負担しなければならない日がもしもやってきたらと思うと、私は鳥肌が立った。一回の受診に高額な医療費を払わなければならないなかったら、私さえいなければ私の家族は幸せになると考え、この世からいなくなっていたかもしれない。現在、安くて病院へ通うことができるのも、「税」のおかげであると感じた。

このようなことから私は、「税」のありがたさを知った。消費税などは、年齢に関係なくとられてしまうが、その「税」は私たちの生活を支えている。医療費に関わる「税」の力は大きいものである。「税」があるからこそ、私は生きていっても過言ではない。私は病気を抱えているが、普通に生活することができている。私は、「税」に感謝している。日本に生まれてきて良かったと思う。だから私は、これからもしっかりと勉強し、将来は、職に就いて人の役に立てるよう働きたい。そして、私は「税」に支えられているのだから、日本に恩返しをしなければならないと思う。「税」を納めるということは、日本国民の豊かな生活の実現へつながっていくのではないだろうか。私たちが社会で生活していくために必要な「税」を、私はしっかりと納めたいと思う。そして、より良い日本になることを期待している。

「何で税金を払わないといけないのかな。」それが少し前までの私の考えでした。消費税が八パーセントに上がってから、商品の代金を払う時に、「えっこんなに。」となることがありました。

しかし、その考えが変わる出来事がありました。それは熊本地震です。別府でも大きな揺れを感じました。その後父が仕事場の様子を見に行くと言ったので、母と私、妹は近くの公民館に避難しました。妹はその時体調が悪く、公民館の職員の方にそれを伝えると、市の保健師の方が来てくれて、診察をしてくれました。

私はこの体験を通して「税って大切。」と思いました。一つ目は公民館の存在です。公民館は税金によって支えられています。また、避難した時に貸してくれた毛布、マットなども税金が無ければ、自分でお金を払って借りなければならぬのだなと思いました。二つ目は、市の保健師の方です。早朝にも関わらずすぐに来てくれて病院と違い無料で診察してくれました。私は税がこんな風に使われているのを初めて知ってとても温かい気持ちになりました。三つ目は、学校に行けることのありがたみです。この日は部活も休みになりはやくみんなに会いたいという気持ちが強くなりました。私たちが普段学校で安心して過ごしているのは税金のおかげなのだなと思いました。

学校が税金によって支えられているところはたくさんあります。まず無償で配布される教科書。校舎、体育館、部活で使うテニスコートだってそうです。授業だってお金を払う必要はありません。義務教育を受けられる小学校・中学校はたくさんの人々の税金の支えによって成り立っています。義務教育の最後の一年間、私は感謝の気持ちを忘れずに登校したいと思います。

税金を払うことについて、初めは否定的な考えでした。しかし、熊本地震を通して考えが変わり、今では税金を払うことを誇らしく感じます。両親は共働きで毎日一生けん命働いています。たくさん税金を払わないといけないから大変といいながらも、一生けん命働いて税金を払っている両親はとても尊敬できます。一生けん命働いて払った税と、手を抜いて払った税は金額は一緒でも価値は全然違うと思います。

私は将来、教員になろうと思っています。教員になって、税金で支えられている学校をよりよくしていきたいと思っています。そして両親のように一生けん命働いて、税を払っていきたいと思っています。

待って下さい。未来のみなさん。私は大人になって税を払いみなさんの役に立てるように頑張りますから。

振り返ることで見えてくる感謝

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校附属中学校 3年 玉城 理奈

皆さんは、税金がどういった事に使われているか知っていますか？税金があつて良かったと思つたことはありますか？

私の従姉には子供が二人います。どちらも男の子で、下の子は先月産まれたばかりです。上の子を妊娠している時に従姉はお腹にはりを感じたり、腹痛がたびたびあつたらしく、最初は痛み止めを服用していたのですが、あまりの痛さに入院してその間に上の子が産まれてしまいました。本来なら四十週の間には赤ちゃんは産まれてくるのですが、彼は二十二週という早さで産まれてきました。体重も七百五十グラムという小ささだったので、従姉が出産した小さなクリニックでは対応ができずに、救急車を呼んで県の大きな病院に運ばれることになりました。産まれた後も半年の間は保育器で過ごし、退院した後も当分は人工呼吸器を使つていました。それでも超未熟児で産まれた彼ですが、何の障がいを負う事もなく、今では元気に過ごしています。体に異常はないのですが、早く産まれてきた分、頭の発達は他の人より遅れていてまだ話す事ができません。「あ」とか「う」などは発音するのですが、言葉を単語にして言うのはできていません。ですが、半年後には県が運営している療育センターという所で発音の練習をするそうなので、練習を重ねていけばきっとできるようになると思います。そこでは、専門の先生が彼のように未熟児で産まれた子や障がいを持った子たちを中心に、しっかりと指導してくれるらしいのです。

もし税金がなかったら彼はこんなふうに健やかに育っていなかったかもしれません。救急車がすぐにかけてくれたり、高度な医療技術が備わった病院、無料で子ども達を支援してくれる療育センター。これらも全て税金で運営され、様々な人たちの役に立っています。他にも、人工呼吸器を使用するなら何百万もお金がかかるそうなのですが、健康保険税というものを納めているので、何十万で済むそうです。何百万という金額は普通の家庭ですぐに支払えるものではありません。これも税金のおかげだと思います。

多くの人々が、税金を支払うことを「もったいない」と感じていることでしょう。実際私も思つていましたが、従姉の子どもの件があつて以来、税金のありがたさを実感し、税金があつて良かったと思つました。この事がなければ税金の大切さに気づくことはなかったかもしれません。人は、何かの出来事に遭遇して恩恵を受けないとその大切さに気づけないと思います。税金に関して、私は、多くの人に税金がどういった事に使われて役立っているのか教える必要があると思います。税金に関わらず、どんな事も当たり前にかゝっているとせず、振り返つてみて感謝することも大切なことでしょう。

助け合いの心

釧路町立富原中学校 2年 阿部 倫歩

「私たちの納める税は何に使う？」私は買い物で消費税を支払う時ふと疑問を持ちました。自分の少ないお小遣いで物を買うときでも消費税を支払わないといけないので大変だからです。今まで買い物をする時答えがわからないままなんとなく税金を支払ってきましたが今回この作文で税について調べる機会ができました。

私たちの納める税金は主に公共施設や道路・福祉・医療・教育などに役立っていることがわかりました。そして自分の身近なところでは学校の維持費・教材費やいつも通る道路の整備、皆が使う公園の遊具など毎日日常の中で使う物見ることが税金で支えられていました。

最近私の学校では体育館が新しくなり、トイレも綺麗になりました。このように私達の学校生活がより快適になったのは税金のおかげと知りました。毎日当たり前のように行く学校も実は様々な税金によって助けられていて学校に行けることに感謝しなければと思いました。

父から税金に助けられた話を聞きました。昔、私の父が転職し収入が安定しない時期があったそうです。そのときに我が家の教育費の補助や私の医療費の免除などを税金で補ってくれ、とても助かったそうです。今では収入が安定し、誰かの役に立つようしっかりと納税しています。これは相互扶助といってお金をお互い出し合って助け合う考え方だそうです。

税金についての調べを進めていくと復興特別所得税という東日本大震災復興のための新たな税金を知りました。国民は相互扶助と連帯の精神に基づいて被災者への支援その他の助け合いに努めるものとするという理念のもと制度化されたもので、これにも相互扶助が唱われています。

復興特別所得税は自分達の暮らしを豊かにするためには直接的には関連性の無い税金ですが、だからといって自分達だけが得をするような考えは違うと思います。同じ日本人として被害を受けた人々へその税金が少しでも役立ってくれればいいと私は思います。

今後消費税が八パーセントから十パーセントへ変わろうとしています。消費税が増税されることに正直抵抗はあります。しかし、かつて私達家族を助けてくれた分、次は私達が誰かのために税を納めようと思います。そして私たちの納める税金が人々の暮らしのために使われるのなら、今より税金が増えても快く納めようと思います。

私は税金の相互扶助の考え方を知り税に対する考え方が変わりました。今後も税金の使い道を意識することで心を豊かにしていこうと思います。

なぜ税金なんて払わなければならないんだろう。レシートを見ながらいつも思っていた。消費税増税が来年の四月に先送りになったことにも、私はこころの中でほっとしていた。消費税は買い物をするたびに払わなくてはならないし、一回の額は少なくとも合計すれば、それなりの金額になってしまう。

そんな私の考えが少し変わったのは、社会で「もし税金がなくなったら、どんな世の中になってしまうのだろうか」をテーマにした動画を見たからだ。火事なのにお金がかかるからと消防署に通報しない人。公園は荒れ果て、橋や道路は壊れっぱなしに……。でも私にとって一番衝撃的だったのは、授業料を払えない子供は、教育を受けられないということだった。

私は教員をしている母の影響もあって教育に興味があり、将来は小学校の先生になりたいと考えている。だから教育を受ける権利は、等しく全ての人に与えられなければならないと信じているし、教育こそが様々な問題を解決する最も根本的な手段であると思っている。だから「税金がなくなれば教育の平等もなくなる」という事実には、愕然としたのだ。

テレビなどで、紛争地で暮らしている子供たちや難民になった子供たちの姿を目にすることは、これまで何回もあった。しかし私は「かわいそう。食べる物はあるのだろうか。」と思うことはあっても、彼らが「教育を受けていない」ということには思い至らなかった。適切な時期に適切な教育を受けないでしまう、ということは、人間の一生に大きなダメージを与えるのではないかと思う。教育は人に夢や希望を持つ力を与える。教育を受けずに、彼らはどうやって国を再建していくのだろうか。

振り返って自分の置かれた状況を見てみると、私たち日本の若者はとても恵まれていることに気付く。教育の平等は保証され、安全な社会で、安心して生活することができる。火事になれば消防車が何台も駆けつけてくれるし、美しく整備された公園で遊んだりくつろいだりすることもできる。若者は未来への夢や展望を持ち、勉強やスポーツに打ち込むことが許されている。これらは全て税金が正しく納められ、正しく使われているからこそ、実現されていることなのである。

夢が実現し小学校の先生になったら、私は子供たちに「教育を受けられることの幸せ」を伝えていきたい。夢や希望を持ち、それに向かって生きていくことは教育の力なくしてはありえないのだということ。そしてそのためには、みんなが納める税金が必要だということも。

税について考えることで、私は世界について、また自分の未来について考えることができたと思う。今回気付いたことは、おそらくこれからの私の生き方に大きな影響を与えるに違いない。このことを忘れず、生きていくつもりである。

大切な一票のために

常陸太田市立瑞竜中学校 3年 柴田 真歩

「一〇八〇円です。」

私はこの春、修学旅行で京都へ行った。両親や祖父母からお小遣いをもらっていたので、お礼に様々なお店でお土産を購入した。購入する物には全て8%の消費税がかかる。この消費税とは、物を買った時に納める間接税を意味している。三日間の修学旅行中使えるお金は、学校の決まりで全員同じ額に決められている。お土産の他に班別行動で寺院なども見学して回るので、消費税分も考えながら計画的に使わないと、みんながアイスを食べ続けていても我慢することになる。しかし、毎月お小遣いをやりくりしている経験を活かして、みんなとアイスを食べたりジュースを飲んだりすることが出来た。

毎年この時期に、税のことを学び、税金の作文を書く。今年は税の使い方について、自分に置き換えて考えてみた。私の一カ月のお小遣いは、三〇〇〇円。少ない額かも知れないが、これが私に与えられた予算額となる。使い方は、好きなアイドル雑誌を二冊購入して一〇〇〇円、文房具を買うのに一〇八〇円、学校で読む本を五〇〇円、お菓子四二〇円。その他にどうしても買いたい物がある月は、母に頼んで、お小遣いを前借りし、翌月分から返すこととなる。これは借金となる国債発行と同じで、公債金と言えられる。国税庁のホームページで調べると、今の日本はこの公債残高がウナギ上りで約八三八兆円。国民一人あたり約六六四万円になる。毎月三〇〇〇円をやりくりしている私にとって、想像をはるかに超えた金額。そしてそれは私も背負っている借金。

最近、東京都の知事が家族旅行やマンガ本購入などに政治資金を使っていたことが分かり、多くの批判的な声を受け辞任した。この報道を聞く度に、政治家に対して疑念と不安の想いが募る。

私は中学三年生になり、社会科の授業で公民を学び始めている。父からは「公民は社会の仕組みとルールを学べるとても大事な授業。憲法や政治や税制についても学ぶので、大人になるには必要なことばかりだ。」と、言われている。その公民では、日本国民の三大義務は「教育・勤労・納税」であることも学ぶ。国民に公平な教育の場を提供し、働いて、税金を納め、社会を持続させる。このお陰で私は義務教育最終年を迎えることが出来ている。

今年から十八才で選挙権を持つようになり、参議院選挙の投票が行われた。私が選挙権を持つまでに後四年。しっかりこの国の歴史と文化を学ぶと共に、「ひと・もの・こと」に積極的に関わり、社会を知り、将来を考えられるようになり、自分の一票を大事にしたい。

そして、公平・公正に集められた税金が正しく使われ、公債金を減らしながら持続可能で明るい社会を作り上げていきたい。

「計算が面倒になった。」

私は税金が八パーセントに引き上げられたとき、そうとしか思わなかった。正直、私は税金についての関心があまりなかった。小学生の頃に社会の授業で、税金は国民の暮らしを支え、豊かにするためのサービスの提供に必要なものだと習った。しかし、具体的に何が行われているのか、どんなことに役立っているのか、深く考えていなかった。

そんな私を変えてくれたのは、オーストラリアへのホームステイだ。私は今夏、練馬区が国際理解教育を一層推進するために毎年主催している「練馬区市中学校生徒海外派遣団」の一人として、一週間オーストラリアでホームステイをした。海外へ行くとなると、通常は多額の出費を伴うはずだが、この海外派遣は、区が費用の大半を税金で負担してくれた。母にも海外派遣に応募するときに「あなたは税金でオーストラリアに行かせてもらうのだから、中途半端な気持ちでは絶対にだめなんだよ。感謝の気持ちを忘れてはいけないよ。」

と言われた。私はそう言われたとき、果たして自分は税金で行かせてもらってよいのか、とためらった。しかし、行かせてもらったからこそ、その喜びや感謝の気持ちが強くなったと思う。オーストラリアでのホームステイは言葉と文化の壁を越え、たくさんの友情を築くことができた。このような素晴らしい経験ができたのは、税金のおかげでもあるのだと思うと、居ても立っても居られなくなり、私は帰国後、税金について調べてみた。

医療などの社会保障、教育や警察、消防といった公的サービスは、私たちの暮らしに必要不可欠だが、その提供には莫大なコストを要する。その費用を広く公平に賄い、公的サービスを充実させるためには、国民が連携し合うことが必要であるのだ。私はこの連携の中心こそ、まさに税金ではないか、と考えた。つまり「税金の本質はみんなが互いに支え合い、共によりよい社会を作っていくことではないか」私はそのことに気が付いたとき、まるで将棋で王手をとったかのような興奮に襲われた。

私の通う学校では、バリアフリーに配慮した、スロープや階段昇降機が設置されている。また、教科書は毎年、新しい物が配布される。病院や薬局では、医療費の補助を受けられる。このように、私の周辺でも様々な取り組みが税金によって行われている。少しずつ納め続けた税金が、やがて大きな力を持ち、必要としている人たちのもとへ形となって届く。その恩恵は、誰もが必ず受けているはずだ。

このように考えると、私は以前のように税金に無関心ではいられない。だから、今後はよりよい社会、即ち「全ての人が暮らしやすい社会」の実現のために、税金の使われ方や意味について考え、自分に出来ることを探したい。そして、税金について正しく説明ができ、考えをしっかりと持った大人になりたい。

私たちにとっての税金

魚津市立西部中学校 3年 北野 風生

私たちにとっての税金とは何でしょうか。

税金とは、「納めなければならないもの」というイメージが私の中で強く、その後の使い道について深く考えたことがありませんでした。しかし、よく考えてみれば身の周りには税金でまかなわれているものがたくさんあり、私たちの「豊かな生活」には欠かせないものだ気がつきました。

私の母は会社員で、父は大工です。給料から払う税金、所得税などは母の場合給料をもらうときにすでにひかれています。父の場合はそうではありません。毎年二月、三月になると、自分で確定申告をしています。母は、給与明細で税額を確認しているし、父は確定申告の書類作成のときに収入や経費に基づいて税額を計算するので、いくら税金を納めているのか、いくら納めなければならないのかがよく分かると言っています。両親が一生懸命働いている姿を知っているので、その両親が納めた税金は大切に使うって欲しいという思いがわいてきました。

身の周りの税金の使い道に、福祉関係があります。私は昨年魚津市社会福祉協議会ヘルパーステーションで、一週間職業体験をさせてもらい、その現場を見てきました。自分のかわりに買い物や掃除をしてもらったりする人もいれば、すぐ近くのデイサービスセンターを利用し、楽しい時間を過ごしに来られる人などたくさんいらっしゃって、笑顔があふれる場でした。このヘルパーさんや施設を利用するお金は、介護認定の度合にもよりますが、大部分を国や地方公共団体が税金で負担しているそうです。その一週間で介護を必要とする人やその人の家族にとって、ヘルパーさんがどれだけ必要なのか、それがどれだけ支えになっているのかを目の当たりにしてきました。多くの人が介護サービスを利用できるのも、税金があるからです。私たちが納める税金によって笑顔になる人がいる、豊かな生活を送れる人がいる、ということを知って、税金の大切さを再確認した機会でもありました。

次は逆に、税金によって自分が助けられていることについて書きます。私が今、十分な学習を家計に負担なく受けられているのは、国が教科書や授業料などを税金で負担しているからだと思います。その他にも、綺麗な校舎で学べることや補整された道路を歩けることなど、全てが税金のおかげなのです。

自分たちが納めた税金が誰かの役に立っている、逆に誰かが納めた税金が自分たちを助けてくれている、そんな持ちつ持たれつを生み出しているのが「税金」です。税金は私たちがお互いに助け合うためのものなのです。税金の使い道にきちんと目を向け、一人一人が意識して納める、そのことがとても大切だと思います。そして、より豊かな生活、豊かな国になるように私たちの世代も努力していかなければならないと感じています。

今、14歳の私が考える税

桑名市立光風中学校3年 水谷 日向子

以前、私の友達のスリランカ人から、スリランカでは小学校から大学まで教育費は無料と聞き、驚いた記憶があります。高校・大学は今よりずっとお金がかかるようになるね、と私の両親が話しているのを聞いたことがあったからです。中学生の私にとって身近な税と言えば消費税ですが、その他の税金についてもほとんど知識がなかったので、国税庁のホームページを訪問しました。まず驚いたのが、日本の2015年度歳出総額96兆3420億円のうち教育や科学技術の発展のために使われるお金『文教及び科学振興費』が、5.5パーセントの5兆3580億円だということでした。これが多いのか少ないのか、世界の国々と比べてどうなのか、すぐには想像が付きませんでした。しかし円グラフを見つめると、なんだか少ないような気がします。小学校の校内掃除の時、トイレの修繕がなかなか思うように進まない、と校長先生が嘆いていたことを思い出しました。又、歳出のうち、一番大きなウエートを占めるものが、私たちが安心して生活していくために必要な「医療」「福祉」「介護」「生活保護」などの公的サービスである『社会保障関係費』です。私は自分の立場から、つついまず文教費に目が行ってしまいましたが、一般歳出の50パーセントを超えている『社会保障関係費』の意味を考えました。私たちは病気になれば、保険証を持って病院へ行き、医療費の一部を払って診てもらうことができます。長く難病を患っていた祖父も大変この恩恵を受けていたことを改めて知りました。高額医療の補助を受けたり、介護保険により、不自由ではあったでしょうが、最期まで自宅で生活することができました。国民が納めた税金をどのように分配するのか足りないお金をどうするか、今まで気にも留めたことがありませんでした。私の月2000円のお小遣いをどう使おうかとひとり悩んでいるのは次元の違う話です。

安心して学校へ毎日通えるのも、病院へ行けるのも、人間らしく最期を迎えられるのもすべて納められた税金のおかげです。もっと〇〇の予算を増やしてほしい、と言うのは簡単なことですが、今の日本が抱える問題は山積みで、かつそれらが複雑に入り組んでいます。納税の意義、分配する政府の責任の重大さを認識するとともに、今、私ができることは何だろうか。

「足るを知りなさい」

と祖母は時々言います。無いことを嘆くだけでなく、有るもの、有ることに感謝しなさい、という意味だと思います。自分の豊かな暮らしを追い求めるだけでなく、互いを理解し受け入れ、社会全体の助け合いのしくみを支えていく、それが国民に求められているのだと思います。

今はしっかり勉強をして、将来誇りを持って税金が納められる大人になりたいと思います。

増税は何のため

神戸海星女子学院中学校3年 小菅 葉月

七月十日に選挙権年齢が「十八歳以上」に引き下げられて初の国政選挙が行われた。そして三年後、私が「十八歳」になった年の十月には消費税が十パーセントになる。その年に行われる参院選に投票しに行く気満々の私だが、今の私の浅はかな税金の知識のままでは国政を担う代表者を選ぶことなどできないので、私は税金について学びたいと思った。

そこで私は図書館に行き、面白くて分かりやすそうな税金に関する本を数冊借りてきた。早速、税金の恩恵を感じる。パラパラと読んでいく中で私の目にとまったのは、政府が税金などの収入を得て、様々な用途に支出していく活動である。財政についてだ。ここで私は主に三つの役割があるということを知った。一つ、社会資本を整備し、公共サービスを提供する。二つ、所得の差を縮める。三つ、景気を安定させる。三つ目は具体的にどのようにするのだろうか。

「不景気のときに減税を行ったり公共事業を増やしたりして、景気を安定させるための政策（敗政政策）を行う。」と書いてある。私はここで疑問が湧いた。不景気だと言う人も多い中、安倍首相はどうして増税するのだろうか。理由は財務省のホームページに簡単に見つかった。「少子高齢化により、現役世代が急なスピードで減っていく一方で、高齢者は増えている。社会保険料など、一層現役世代に負担が集中することとならないためには、高齢者を含めて国民全体で広く負担する消費税が、高齢化社会における社会保障の財源にふさわしいと考えられるため。」といった内容である。また、日本は全国でも群を抜いて債務残高が高いことが多くの本で述べられていた。

高齢化のために社会保障は増え続けていて、しかも国債を返済しなければならぬ。増税も無理はないのかもしれない。ここで所得税や法人税などを増税してしまうと、私の父などの現役世代にもう既に高まっている負担がさらに集中してしまう。高齢者も含めて国民全体で広く負担する消費税の増税は、所得高によって負担が変わるとはいえ、所得税や法人税の増税に比べたら、私は公平である気がする。また、国債は国の信用を左右する。その返済のための増税なら、日本の国力を上げるための投資だと思っていいのかもしれない。

税金に興味を持って調べることで、増税がなぜ行われるかを知ることが出来た。日本の未来のために増税は欠かせないものだと思ふことも出来た。

アメリカでは、こんな言い回しがあるらしい。「人間、一生で避けられない物が二つある。死と税金。」そんな税金なのだから、私は、賢い有権者となるためにも、これからも税金に関心を持ち続けていきたい。

税がくれた学びの場

広島市立井口台中学校3年 前山 由紀美

今年の四月、担当の先生は、私たちにおっしゃった。

「学校で過ごす時間を大切にしてくれ。義務教育を受けることができる、最後の一年だから。」

ざわついていた教室は、一瞬にして静まった。初めて言われた、「義務教育、最後の一年」という言葉にどこか寂しさを覚えた。同時に、自分は学校が好きなのだ、と気づく。心の通う友達、高め合えるライバル、尊敬する先生方、そして立派な校舎。私にとって、掛けがえのない学びの場だ。

そんな、私の通う学校で、先月「租税教室」というものが行われた。税というと、まず第一に浮かんでくるのは消費税だ。8%に引き上げられたのは、二〇一四年四月一日。私が中学生になろうとしていたときだった。消費税が高くなる前に、制服や通学カバンを購入しておこうという母親たちの動きがあった。税金について初めて感想を持ったのはこのときだ。「なぜ、税金なんか払わないといけないんだろう」という感想を…。

しかし、たった一時間の「租税教室」で、この思いはくつがえされた。中学生一人に対し、一ヵ月で約八万二千円の税金が教育のために使われていること。さらに、義務教育九年間で、一人あたり一千万円以上が税金によって賄われていること。初めて知る税金のゆくえに、何度も息を呑んだ。私たちの学びは、税金によって支えられているのだ——私があんな感想を持ってしまっていた税金によって。

義務教育、九年間。今まで、用意されていた道を進んできたが、来年の春から歩む道は、自分でつくっていかなければならない。勉強に疲れ、教科書をパタンと閉じてしまうとき、いつも裏表紙に書かれている言葉が目にとまる。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、税金によって無償で支給されています。」

この言葉に、ぐっと胸が熱くなるたび、あきらめずに励もうと思うことができる。だからこそもっとはやく知っておきたかった…税金によって学ぶことができる、という日常へのありがたみを。

私は将来、学校という最高の学びの場で、教師になりたい。中学校に入学したときの私のように、「なぜ税金なんてあるのか」と感じている子どもたちに、一刻も早く伝えたいことがあるから。

昨年未、祖母は突然、旅立った。あの日からやがて八か月が経とうとしているが、祖母の死をなかなか受け入れることのできない、毎日である。

八十一歳の祖母は、いつも元気であった。高齢のため、少しずつ足腰が弱ってはいたが、出掛けることは好きだった。しかし、大変残念なことに、急に体調を崩し、救急車で住み慣れた家を後にした。祖母にとって、そして私たち家族にとって、ありえない最後の「出掛ける」ことであった。

救急車でまず近くの病院に搬送され、重篤な状態であったため再度、救急車で救命センターに運ばれた。緊急手術のかわりに、優しい微笑みを残して、逝ってしまった。

祖母が亡くなり、悲しみをこらえて、母は祖母がお世話になった病院やデイサービス、介護タクシー等の支払いに行っていた。いくつか支払いを済ませた母に

「救急車に、二回もお世話になったのに、支払って来なくてもいいの。」

と、たずねた。すると母は

「救急車は、有難いことに、無料で利用できるの。それは、税金のおかげよ。」と、教えてくれた。私はこの母の言葉に、ハッと息を飲むほど驚き、そして、救急車にお世話になったことに対し、感謝の気持ちで、胸がいっぱいになった。

外国では、救急車は有料で大変高額であるようだ。しかし、日本では救急車の費用は、自治体が負担していることを知った。全国的に一回、救急車が出動すると約四万五千円の費用がかかることが、調べて分かったことである。これらの費用が、税金で賄われているということは、私たちの「命」を税金が守ってくれているように思った。

そして、祖母が亡くなってから六か月余り経った頃、「後期高齢者医療給付支給決定通知書」というハガキが届いた。これは、祖母が救命センターで手術や治療等をしてもらい病院で支払った医療費に対し「高額療養費」と認められた分が、母の銀行口座に振り込まれたということだ。亡くなった後でも、このように税金をもとにした制度で遺族に支払われることに、改めて「税金」の大切さを知った。

このように、私はかけがえのない大切な家族を突然亡くすという経験をし、悲しみの渦に巻かれたような気持ちになったが「税金」に対して、新たな発見があり、その重みを知った。今でも、救急車のサイレンを聞くと、祖母のことを思い出し、胸がいっぱいになる。それと同時に、税金で助かる命がありますように・・・と、祈る思いで救急車を見る。

私も将来、働いて税金を納める立場になるが、納めるだけでなく、税金の大切さを正しく伝えていける社会人になりたい。そうすることが、安定した、幸せな日本の基盤となり、世界になることだろう。命を守るためにも。

「税金」と「家族」

吉富町外一市中学校組合立吉富中学校 2年 是木 愛海

私は今まで、「税金」は大人が払うもので子どもにはあまり関係ないものだと思っていたが、国税庁のパンフレットを見て、中学生一人当たり、年間約百万弱もの税金が使われていたことを知り、とても驚き、私には関係ないものだとは思えなくなりました。そして、もっと税金のことをよく知りたいと思いました。

税金って何だろうと考えて、まず初めに思いついたことは、お金を払わなければいけないという嫌なイメージでした。次に、税金は私達が安全に安心して暮らせるように支えてくれている大事なもの、そして、税金が無くなると、救急車、ゴミ処理、教科書などが有料化になり医療費などの社会保障費や、公共サービスが受けられなくなるということがわかりました。

こんなふうに、嫌な所、良い所、無くては困ることを考えていると、「税金」というものが「家族」と似ている気がしてきました。

「家族」は、たまに口うるさいと思うこともあるけれど、一緒に泣いて、笑って、ときには強く叱ってくれたり、どんなときでも、側にいて、見守り、励まし、応援してくれている存在です。そして、家族がもし無くなってしまうと、日常生活も学校生活も、今のように行えなくなります。

「税金」を管理する国税庁は、私達の暮らしを支えるため、税金の期限内収納を確保するためや、滞納を未然に防ぐために、広報や納付指導をしたり、納税者個々の実情を踏まえながら滞納整理を実施したりして、滞納残高を、平成十年度のピーク時より、十七年連続減少という状況を保っています。

「家族」は、「体調はどう?」「宿題はすんだ?」など声かけをしてくれ、日常生活をいつも気にかけてくれて、うっかり忘れそうになった提出物を思い出すことがあります。そうして、精神的にも身体的にも、落ち着いた状態で学校生活や部活、遊びが充実したものになるようにしてくれています。

すごくよく似た特徴を持つこの二つは、私にとって、とても大切なものであるということがわかりました。

それと同時に、私は「税金」や「家族」の当たり前存在に甘えすぎていたことに気がつきました。今まで、当たり前にあったことが無くなるととても困ります。「だから大切にしなければいけない」というのも少し違うような気がします。「税金」も「家族」も、私には何の見返りも期待せずに、私を守るために存在している、当たり前のように当たり前ではないことに気がつき、感謝することが大切だと思います。だから私は、そんな「税金」と「家族」を、今の何倍も大切にできる大人になりたいです。

「ワランチャドゥ島ぬ宝」私の住む沖永良部島や奄美群島では、子は宝として大切に育てられている。沖永良部島は、出生率が徳之島に続き四位だそうだ。このように、離島は子どもを出産し、育てやすいというイメージがある。私の友だちにも五人から七人の兄弟がいて、いつも賑やかで楽しそうだ。

しかし、中学生になり、進路のことや将来の夢のことを友達と話す度に、離島ならではの課題も大きいことを感じる。それは、兄弟が多いが故に、一家庭の収入に対して、一人当たりの教育費が大きくなりすぎてしまうということである。

私は、教員をしている伯母と一緒に沖永良部島に転校してきた。実家は鹿児島市にあるため、帰省に飛行機や船を利用することが多い。しかし、大人料金になった私たちの運賃は、冷や汗が出るほどに高額である。そのため、帰省するのもにも勇気がいる。それは、私だけではないことが、部活を始めて分かった。島外での大会の参加費が、鹿児島市では考えられないほどの金額になってしまうため、参加できない人も少なくないのだ。そんな中、島民の想いを救う画期的な対策が打ち出された。それが、平成二十六年度から始まった、「奄美群島振興交付金事業」の中の「離島航路補助事業」である。町民は、離島割引カードを交付してもらうことで、以前よりかなり負担が軽減された。このおかげで、離島間や本土との行き来が、ぐっとしやすくなった。しかし、この事業も平成三十年で打ち切られると聞いた。その後はどうなるのだろうか。

今年受験生になってみて、進学も本土とは条件が違うことを知った。本土では、ほとんどの高校生が、自宅から通学している。しかし、離島の場合、夢を叶えるために高校から島を離れなくてはならない人も少なくない。その場合、学費や寮費など、かなりの金額がかかると聞く。そのため子どもが多い離島では夢をあきらめなければいけないこともあるということだ。そういう話を聞く度に、同じ受験生として胸が締め付けられるような思いがする。

どうすれば、子どもたちが夢を持ち、それを実現するために本土と変わらない教育を受けることができるようになるのだろうか。

私も私の友だちも沖永良部島が大好きだ。高校や大学は島を離れなくてはならないとしても、いつか立派な社会人として島に帰ってきて、島の発展のために働きたいと話している。そして大好きなこの島で家庭を持ち、今度は自分が親として子どもを産み、育てたいと願っている。

そのためには、まずは自分が社会人となり、しっかりと税金を納め、納税者として、島の子どもたちのため、そして島の発展のために、税金の使い道について、地域の声を発信していきたいと思っている。

感謝の気持ちを忘れずに

竹富町立大原中学校 2年 赤嶺 真菜

私達の大原中学校は、校舎改築が終わり、夏休み前に一人一人自分の机を持って、新しい教室に移動することができました。

新しい校舎は、プレハブ校舎とは大違いで教室もとても広々としています。各学年の教室は2階にあり、そこから広がる景色は海が一望できて、すごくきれいです。屋上もあり、津波の時の避難場所に使われるそうです。こんな立派な校舎、本当にありがたいと思います。なんと費用は、約四億四千万円以上かかっているそうです。想像できないくらいあまりにも大きなお金で、驚きました。それは、全部税金で作られているそうです。

税金とは、国民が国または地方公共団体に租税として納付する金銭のことで、色々な種類があります。使われ道も社会保障、公共事業、教育や科学、防衛などと数多くあります。

私達は、その税金として集めたお金で、塾とは違ってお金を払っていないのに、先生方に勉強を教えてもらうことができるし、教科書も毎年無料でもらえるし、図書館の本も無料で借りることができます。学校にある備品も全部税金で揃えてもらっているものだそうです。あたり前に生活している中で、特に学校は、ほとんどが税金にお世話になっているということに新しい校舎で過ごしながらかめて、気づきました。

昨年十二月に合唱の代表として、県の発表会に参加した時も町からの補助金で大原中学校全員で参加させてもらいました。また、私が昨年度から受講している東大生とテレビ通信を使つてのICTの塾も無料で受けさせてもらっています。

このように、離島に住む私達にもできるだけ平等に色々な学ぶチャンスがあるようにと応援してもらえる税金は、本当にありがたいなと思います。

ジャイカで西表島を訪れた外国の方が、離島の隅々まで教育が平等に行き届いている日本の国は、すばらしいと驚いて視察して帰ったと聞きました。見回してみると、あたり前に使っている道路、公園、病院、図書館などの公のものは、平等な幸せのためにみんなの支払った税金で作られているのです。

税金というと、何か堅いイメージで私の生活と身近に感じられませんでした。税金が多く生活に関係してくる事を改めて知り、その大切さを実感できた今、使い道が無駄づかいせずみんな平等で幸せのために使ってほしいという願いが強くなりました。消費税が8%から10%に上がるかもしれないというニュースを聞いてもピンときませんでした。これからは、税金の中身や使い方についてももう少し勉強していきたいなと思います。新しい校舎にもこれまで以上に感謝して大切に使いしていきたいです。

「税でつながる」

旭川市立春光台中学校 3年 阪井 愛結

あなたは、税金についてどう思いますか。私は今まで、働き盛りの人々が税金を払うことで、子どもや高齢者を社会全体で支え合う制度だと思っていました。しかし、ある体験から、税金を納めている現役世代の人も、税金に助けられることがあると知りました。

この春、母が、好酸球性多発血管炎性肉芽腫症という病気で、入院することになりました。この病気は、簡単に言うとアレルギー性の血管炎です。母の場合、手足にしびれや運動障害が起きました。そのため、仕事をするのは難しく、やむなく退職することになりました。収入が無くなる一方で、治療費は増えていく現実に、途方に暮れていました。そんな時に、特定疾患医療制度というものを知りました。母の病気は、この制度の対象となっていました。そのため、治療費の負担は大幅に軽減されました。この軽減された分は、税金によってまかなわれています。誰でも、病気になる可能性はあります。特定疾患は、現在約三百種類もあります。この中には、重篤な病気もあります。また、働き盛りの人が病気になったとき、その家族は、これからの生活に大きな不安を抱えることとなります。そんな時に、この制度があることで、助けられる人がたくさんいるはずです。この他にも未熟児養育医療制度や、小児慢性特定疾病制度などがあります。このように、税金制度があることで、誰もが平等に医療を受けられる環境が整っています。しかし、少子高齢化により、医療費を含めた社会保障費は、年々増加しています。そのため、二〇一九年には消費税が増税され、社会保障費に当てられる予定です。これに対して反対の意見も聞かれます。しかし、今まで通りの医療サービスを受けるためには、増税もやむを得ないと私は思います。

私は、この体験を通して、改めて税金の大切さを知ることができました。税金は、自分や他の人にもしものことがあった時の、貯金のようなものでもあります。あなたの納めた税金が、今、誰かの役に立っているかも知れません。あるいは、誰かの税金が、あなたを助けてくれるかも知れません。そう考えると私達は、会った事のない人とも、税金によって支え合っているのです。私は、今、税金によって支えられています。私が大人になったら、支えてくれた人達への感謝の気持ちも込めて、立派に税金を納めたいです。

変わった税金へのイメージと私の将来像

石川町立石川中学校3年 佐藤 萌香

どうして税金があるのだろうか。
一番身近に納めているのは消費税だが、何に使われているかはよく分からない。

これが、私の率直な税金のイメージだった。

税金のイメージを変えた衝撃的な出来事が訪れたのはそんな時だった。

弟が突然のケガにより、救急車で病院に運ばれたのだ。

あいにく、弟がケガをした日は週末で休みのところが多く、いろいろな病院に電話している慌てた父の姿を今でも鮮明に覚えている。

困った父は消防署に連絡し、救急車を呼び、救急救命士さん達が一生懸命泣いている弟を励ましながら救急車で病院へ運んでくれた。

その後、弟は事なきを得、今は元気に走り回っている。

ふと、当時の私の心の中を思い出した。

もちろん弟がケガをしたことは一番心配だったが、救急車のお金って、いくらかかるのだろうかと考えていた。三〇万円ぐらいかなと・・・。

その時は不謹慎さを感じて聞けなかったが、喉に何かがかえるような感じがあり、勇気を振り絞って、後になって父に聞いてみた。

私が思っていた父の反応とは真逆で、父は笑いながら、「無料だよ。救急車はね、税金でまかなわれているんだよ。」と話してくれた。

「えっ、無料？」

「そう、救急車だけじゃなく、今、立っているその道路も毎日通っている学校もいつも安全を守ってくれる警察も全部無料だよ。」

この父の答えが小学校のときの「租税教室」と繋がった。身近な公共のものは税金でまかなわれているのだと。

改めて、自分なりに税金の使われ方について調べてみた。

公立学校の教育費も税金で負担されており、平成二四年度の統計で見ると、小学生は年間約八六万三千円、中学生は約九九万三千円となっている。

私は今、中学三年生。合計すると、約八一五万七千円もの税金が私の教育のために使われていたことになる。

ほかにも、東日本大震災などにおける災害復旧費や、公共事業費、警察・消防費、社会保障費、そしてゴミ処理費に至るまで様々な社会資本・公共サービスが税金でまかなわれているのだ。

税金の使われ方を調べて分かったことがある。

私はまだ将来の目指すべき仕事を決め兼ねているが、しっかり税金を納めることができる大人にだけはなりたいと思う。

今の私の税金のイメージは、「国民一人ひとりが笑顔で生活するための会費」だ。

命を守るための税

行田市立西中学校 2年 根岸 玲佳

十二月中旬、祖母が急に歩けなくなった。今までも腰の調子が悪く杖を付いていた。トイレに入るのも介助が必要だった。一緒に住んでいる私は、祖母がトイレに入るときは介助するために呼ばれることもあった。その度に祖母は、「ありがとう。いつもすまないね。」

と申し訳なさそうに言った。いつも、私の学校の様子を心配して聴いてくれる祖母だった。祖母が歩けないという父の話を聞いて、祖母に会いに行くと、足に力が入らないどころか、話しかけても、通じない様子だった。

それから数日後、祖母は入院した。パーキンソン病という診断だった。パーキンソン病とは完治しない病気だそうだ。私は病気というと治療すれば治ると思っていたので驚いた。また、入院にかかる費用や退院後の介護がどうなるのかが心配になった。

日本の税金の内訳を調べると社会保障費が全体の1/3を占めていてトップだった。祖母の病気は国の定める特定疾患に入っていたため医療費の助成を受けられることになった。この医療費は国の税金から支払われている。これから、何百万円もかかる医療費の助成を受けられることは我が家の家計にとっても助かる。祖母の命が助かるということにもつながる。税金で命が助かることの重大さを知った。他にも調べてみると、難病の医療費は小児も成人も指定された疾患については医療費が助成されていることがわかった。祖母と同じように税金で命が助かっている人も多くいることに安心した。なぜかという、病気になるということは医療費はもちろんだが、介護するために家族がたいへんになるということだからだ。祖母でいうと、トイレの世話、歩くとき、食事をするとき生活のすべての場面で介助が必要となり、その介助を祖父がやってくれていた。祖父はとても疲れていたし、手伝えるところは私もやろうと思った。もし、祖父が健康でなかったら、私の父か母が仕事を辞めて介助することになるだろう。そうしたら収入が減ってしまう。つまり、健康であることが大事なことなのだと思う。

しかし、日本は高齢者が増えていることで社会保障が必要になり、今後もますます増えることが見込まれる。高齢者になれば病気になる確率は高くなる。だから、医療や介護のお金がかかるのはしかたないが、国の支出の1/3が社会保障費というのは、多すぎるのではないだろうか。そして、国の支出を国債でまかなっていることも問題だ。いわゆる借金だからだ。

社会保障の税金で命は助かっている。この社会保障費を減らすためには、健康であることが大切である。病気になるリスクを減らし、病気にならないために食生活を見直したり運動したりして元気に生活すること。それが、日本の税金を大切に遣うことだと思う。

所得税、消費税、法人税、都民税、事業税、自動車税、住民税、固定資産税、不動産取得税、贈与税、相続税……ざっと数え上げてもキリのない程の税の種類。あまりの多さに驚いた。

僕はこれまで、税の事など深く考えたことがなかった。強いて言えば、コンビニ等で買い物をする時、消費税の計算が面倒臭いと感じる程度の関心しかなかった。

僕の祖父母は会社を経営している。そこで税について教えて貰った。

四十年程前、今もお世話になっている会計事務所との顧問契約を交わす際、所長さんの言葉に衝撃を受けたと、祖母は話してくれた。

「我々は全力で御社の為に働きます。『あなたのお役に立つことがわたくし達の喜びです。』

これが当事務所のモットーです。」

と話され、

「その為には御社も正確な経理処理をして下さい。悪質な税金逃れなどの行為が判明した場合には、その時点で顧問契約は解消致します。適正な納税は社会人の義務です。税を正しく納めない人は、道路を歩かないで下さい。公共の施設を利用しないで下さい。」

と、キッパリ言い切ったそうだ。

この言葉を聞いた祖母は『まさにその通り』と納得したと話していた。

以来、勤勉に事業を営み、数年前の税務調査の折にも、所轄の税務署長より『貴社の法人税等について調査した結果、問題とすべき事項はなく、適正な申告と認められます。』との報告書を見せて貰った。

より良い社会生活を送るには、皆が公平に税負担をしなくてはならない。税によって、教育や福祉、地域の安全及び防犯、産業の発展などが賄われ、我々の暮らしが成り立っていることを学んだ。

日本は四人に一人は65歳以上という深刻な高齢化社会を支え、安心して老後を過ごす事が出来るようにしなくてはならない。更に、二〇二〇年の東京オリンピックを成功に導く為にも、ひとりひとりが気を引き締め、より一層の自覚と認識が必要とされる。

納税者が精一杯働いて納付した税金、これを血税という。

皆が幸福になる為、大切に心して適正に活用して社会全体が豊かになることを心から願っている。

この先、勉学を重ね、社会に羽ばたく僕達も当り前のように生活していただける今の自分の立場に感謝して、良心に恥じない生き方を次世代に繋げる努力をしなくてはと、改めて己を戒める良い機会となった。

今年の七月、選挙があった日の事です。父と母が帰ってきて「おばあちゃんは選挙に行けないなあ。」と、話しているのです。聞いてみると投票所に大きな段差があり、車イスの祖母はそこが上がれない、ということでした。私はなんだか悲しく、そして不公平だなと思いました。

税金の作文を書く為に税金のことを調べていたら、公共施設に税金が使われている事を知り、この事を書きたい、と考えたのです。

税金は高い！税金を払わされている！と感じる人は少なくないようですが、税金はとても役立っています。例えば私達の通う中学校は税金で建てられています。通学する道も橋も、大好きな海へ早く行ける高速道路もです。公共の施設はみんな税金があるから作る事が出来るのです。

今年の春、熊本で地震がありました。沢山の人が被災し、建造物が壊れました。その復興にも税金が使われます。あれだけの被害を自分で立て直す事は不可能でしょう。衣食住を失った人を支援し、瓦礫を撤去する事から始まり、元通りの熊本になる為には税金が欠かせない、と思います。もし自分が災害にあったとしたら、税金をととてもありがたい物だと実感できるでしょうね。

それ以外でも、例えば自分が納める税金を自分の望む用途で使ってもらえたら、税金を“とられている”ではなく“納める”気持ちに変われるのではないのでしょうか？私なら、選挙の投票所に使用される公共の建物をバリアフリーにする為に使ってください、と提案したいと思います。祖母も大事な一票を無駄にしないで済みます。

最近有名な政治家が、税金を無駄遣いして辞職する事件がありましたが、とても残念で悔しい気持ちになりました。国民が平等に納めている税金です。お年寄りから私達子供までが毎日消費税を納めていますよね。税金を大切に、そして本当に必要なものに使ってほしい。それを見守ってゆくのも私達の役目だと考えます。

～もし、税金がなくなれば～

ゴミ収集車が来なくて街がゴミだらけになります。事件や事故がおこっても警察官は来てくれません。病気やケガをしたら莫大な医療費を請求されます。そして学校で勉強するのに、大金を払わなければならないでしょう。

このように、社会のために、未来のために、自分達のために、税金はとても大切です。

今の私はまだ消費税を払う位ですが、年月が経ち、労働者になり納税者となった時は、今までの恩恵を恩返しできるよう、未来の子供達が夢を持てる快適な空間で勉強が出来るよう、そして赤ちゃんからお年寄りまでが幸せに暮らせる社会になるよう、大切な税金を納めていきたいと思います。

「私にだってできる」

福井大学教育学部附属中学校 3年 河野 富貴乃

「三億円!?!」私はこの金額に驚いた。そして、今まで税金の使われ方、いや税金そのものにも無関心だった自分を恥ずかしく思った。

この夏、私が住む町の清掃センターを初めて訪れる機会があり、日頃何気なく出しているゴミについて考えることができた。毎週二回、自宅近くのゴミステーションいっぱいに出され、当たり前のように回収してくれるゴミの焼却は、税金も充てられていると知った。それまで私は、ゴミの回収や焼却の費用は、有料の指定ゴミ袋に入れているから、その代金だけで全てまかなわれているのだろうなあぐらいに思っていた。

そこで、市役所の生活環境課で私の市の昨年一年間のゴミの量とその回収、焼却費用を聞いてみた。担当者から「量は一万八十t。」そして費用は、「三億六千万円」と聞き、私は聞き返すほど驚いた。このうち私が思っていたゴミ袋の売り上げ代金が充てられるのは六千万円だった。ということは、残りの三億円は税金ということだ。両親達が一生懸命働き納めている税金が、私達がちゅうちょすることなく捨てているゴミの処分に使われていると知り、なんでもゴミにしていることを申し訳なく思った。

これが国規模になると、平成二十五年度では総額二兆千三百七十四億円。国民一人当たりだと約一万六千七百九十一円になると知り、何も残らないのにこれだけの税金が投じられていることに落胆した。

私は、私にできることを考えた。まずは、自分の生活を振り返り、今まで言葉だけは知っていたゴミ減量のための「5R運動」に真剣に取り組んでみようと思った。不要な物は買わない「リフューズ」、発生を減らす「リデュース」、繰り返し使う「リユース」、資源として再利用する「リサイクル」、修理して長く使う「リペア」だ。そして、私から家族へこの運動を広げ、まずは家庭ゴミから、次は学校や地域のゴミを減らし、無駄に税金が使われないよう、私も力になりたいと思った。

そして私達一人ひとりが税に関心を持つということは、税の使い道を監視することにもつながると思う。ゴミの他にも教育や警察、消防、福祉など、たくさんの公共施設や公共サービスに大切な税金が使われている。今まではそのことが当たり前だと思ってきたが、先人達が支払ってきた税金を使わせてもらっているのだから、私達や後世の人達が将来、安心して豊かに暮らせるために、正しく納め、使われ方に関心を持つこと。私にはまだ直接、納税義務はない。しかし、お小遣いで買い物をした時は消費税も払っている。有意義な中学校生活を送れているのも税金のお陰だ。これからいつも税にアンテナを張りたい、それが私にだってできることだ。

税で勉強ができる幸せを学ぶ

浜松市立天竜中学校3年 村松 あづみ

¥00000

私は小学生の時から疑問を持っていた。教科書にはバーコードはついているのに、なぜお金がかからないのか。教科書の裏表紙には

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

と書かれている。「税金」の意味を理解していなかった私は「無償か、ラッキー」くらいにしか思っていなかった。でも、中三になった今、やっと教科書を作るためにはお金がかかり、そのお金をカバーしてくれているのが税金であるということを理解した。義務教育九年目にして、初めて私たちはなんて恵まれているのだろうと感じた。

私たち中学生の生活は数多くの税金によって助けられている。教科書だけではなく、学校のいすや机、校舎、先生のお給料など私たちの身の回りのものは国の補助によって成り立っている。また、中学生一人あたり一年間にかかる教育費のうち約九十七万九千円も税による補助金で賄われている。この事実を知り、驚いた。私たちはよく

「勉強が嫌い。」

と口にするが、それは勉強する環境が整っているからこそ言える贅沢なのだと思います。教科書が欲しくても買えない、字を読みたくても読めない、勉強したくてもできない、そういった子供たちは世界にたくさんいる。「勉強できる幸せ」を私は学んだ。

私たちはさまざまな大人から期待されて生きている。その期待に応えるためには、今できることを精一杯やりきり、成長することが大切だと思う。この作文を書くにあたって多くのことを学んだ。「これからの日本を担う」教科書の裏表紙に書かれた言葉だけを見たときスケールが大きすぎてまるで実感が湧かなかった。でも、こうやって税金について、日本について考え、さまざまなことを学んだだけでも「日本を担う」につながったのではないかと思う。これからは今の勉強できる環境に感謝しながら、日本に、そして世界に目を向けていきたい。税の大切さを国民全員が知り、しっかり納税する社会、税が正しく使われる社会が実現してほしい。そして、勉強できる幸せを忘れずに生きていきたい。

一年当たり、一人に九十九万三千円。私はこの金額と使われる道を見た時、とても驚きました。これは、中学生一人当たりを支払われている年間教育費負担額で、一日に換算すると、約二千七百二十円です。これを知ったのが、税金に対する興味を持ったきっかけでした。

税金と言っても色々な種類があり、様々な使い道のある中で、身近な税の使われ方に特に興味を持ちました。税がないと困るということはよく耳にします。ですが、どんな風に困るのかは知りませんでした。校舎が税金で建てられていることは知っていましたが、水道や電気、給食などが税金でまかなわれていることまでは考えてもいませんでした。小学校や中学校の教科書に記載されている「この教科書は税金によって無償で支給されています」の意味は税金のことを知っていなければありがたみが分かりません。この意味を初めて知ったとき、「私は税によってたくさんの人に支えられている」という実感が沸きました。他にも、病院に行って診察を受けたり、薬を処方されたときに、全額支払わなくて済むのも税金のおかげだったことに気付きました。

もしも税金が無かったら、学校の教科書はもちろん、水道も、電気も、給食などの学校で必要とする全てのものを親が納税者の代わりに支払う義務が発生するのではないのでしょうか。そこから生まれる貧富の差で、学校へ通えなくなる生徒も続出すると思います。そればかりか、病院も全額負担となり、受診を遠慮したせいで救えた命も亡くなってしまう可能性もあります。したがって、子どもや高齢者、障がい者に配慮の無い、生きにくい社会になると思います。

日本の税金の歳出で最も多いのは社会保障です。国の支出で三分の一を占めていて、興味があったので調べてみると、年金や医療、介護、社会福祉など色々なことに使われていることが分かりました。また、高齢者が増加の割合にある一方で、働き手の割合が減少の一途を辿っていることについて、私は、定年を少しだけ引き上げれば良いと思います。なぜなら、地域のおじいちゃんおばあちゃんはとても元気で、祖父も祖母も七十歳近いですが働いているからです。定年して認知症になる高齢者も多いとよく聞くので、一石二鳥になると思います。それに、定年を過ぎても働いて税金を納めている祖父母を本当にすごいと思うからです。祖父母や父母、周りの大人が口々に「勉強をなさい」と言うのを、私は今まで鬱陶しいとしか思っていませんでした。でも、今考えると、国民が納めた税金を無駄にしてほしくないと思っていたから、その言葉を言っていたのかなと思えるようになりました。

だから、一日二千七百二十円を日々大切に、少しずつ様々な面で邁進していきたいです。

税金の存在に感謝して

四国中央市立三島南中学校3年 保田 音萌

身近にあるものだが、どのようなものなのか、よく分からない。私にとって、その存在に当てはまるのが「税金」というものです。私は、これまでの約十数年間、特に税金に対する疑問もほとんど持つことなく、義務があるがままに様々な形で支払ってきました。今となっては、そんな過去の自分の姿に羞恥心を感じるばかりです。そんなとき、私に税金の重みを感じさせられたできごとがありました。

昨年十二月のこと。私はサッカーのゲームをしている最中に男性とぶつかり、腰を痛め、病院を訪れました。そのとき、母が受付で係員の方に預けていたものは、保険証と診察券、そして一枚の紙きれ。私は初めて見るその紙きれに疑問を持ち、とっさに母に、「これ何やらか。」と質問しました。すると、母は、「これは、こども医療費受給者証っていうてね……。小学一年生から中学三年生までの九年間分の子供の医療費は市の税金が負担してくれるようになったんよ。だいぶ助かる。」と教えてくれました。私は、それを耳にしたとき、「税金にそんな大きい力があるんや」と感動しました。改めて、税金の身近さを感じた貴重なひとときでした。

「こども医療費受給者証」に興味を持ち出した私は、インターネットでさらに詳しく調べてみることにしました。そこで明らかになったのは、このようなこどもの医療費無料化が推進され、実行されている市は愛媛県内で四国中央市が初めてだということです。またこの取り組みには「子育て環境をより良いものにするにより、町の活力を向上させたい」という市の強い思いが込められていることも知りました。県内初という言葉には驚いたけれど、こんな素晴らしい環境で生きられていることが誇らしく、そして、ありがたく感じました。こうした感情を持てるのも税金があってこそこのことです。税金には頭が下がります。

昨年の経験をきっかけに税金を支払う意味を知りました。私だって、日本の今後を担う一員なのだから、税金を支払うことは当たり前です。また支払った税金は、いつか自分の元に「幸」となって返ってきます。だから、私は、税金は単に支払っているものではなく、支払わせて頂いているんだという考えを日本人誰もが持たなければいけないなと思いました。私の願いは、私たちの街は私たちが守り抜きたいということです。その願い実現のためにも、まずは、確実に税金を納めることから始めてみませんか。私は、これが今の世の中に欠かせないことだと思います。

父の入院と税金

福津市立福間中学校 3年 右田 風音

私は、これまで税金について深く考えたことはありませんでした。でも、税の作文をきっかけに調べていくうちに、税金があることで私たちの暮らしが守られていることが分かりました。そして、税金の一部が医療にも使われていることを知り、私は今年一番私達家族が税金のありがたさを知った出来事を思い出しました。

今年の一月、父が脳幹梗塞で救急車に運ばれて二週間入院し、一か月の自宅療養となりました。家族みんなが心配し、私も不安で学校の帰りに毎日面会時間ぎりぎりまで父に会いに行きました。病名をインターネットで調べては、不安になっていました。そんな中、病院の先生、看護師さんのおかげで無事に退院し、後遺症も残ることなく、今は仕事にも行けるようになりました。入院中にはリハビリの方が来てくれて、言語や歩行訓練などのリハビリをしてくれました。でも、もし税金がなければ、こんなに充実した治療は受けられていません。救急車を呼ぶにもお金がかかり、とても大変だったはずです。だから、私達家族は多くの人たちの税金で助けられたのです。それで私は、税金の大切さが改めて分かりました。

病院には、後遺症が残り退院してからも介護やリハビリが必要であろう方たちもたくさんいらっしゃいました。退院後も家族だけでは難しいことも、たくさんあると思います。そういった面のサポートにも税金が使われているのです。

最近では、消費税の値上げが先送りされましたが、私は消費税増税に賛成です。消費税だと、広い範囲の人からまんべんなく税金を徴収できるからです。そして、その税金で父のような病気で困っている人を助けてほしいです。みんなが納めている税金を意味のあることに使ってほしい、そう思いました。

でも世界に目を向ければ、私達家族が助けられたような医療が当たり前ではない国がまだまだたくさんあります。日本という恵まれた国で勉強できる私は本当に幸せなのです。それで私は、そのことに感謝すると同時に、そういう国のための支援にももっと税金を使ってほしいなと思いました。

選挙権が十八歳に引き下げられ、私も三年後には投票できるようになります。税金をどう使うかを決めるのが政治家なのだから、十八歳になるまでに多くのことを学び、この人ならいい税金の使い方をしてくれそうだという人をえらんで投票したいです。そして大人になったら、父のような病気になって困っている人を税金を払うことで、助けたいです。税金を払うことは当たり前のことだけど、とても大切なことなのです。

税金で笑顔を取り戻す

熊本県立玉名高等学校附属中学校 2年 松山 実音

四月十四日。夕食後、ゆっくり過ごしていたときだった。突然大きな揺れが襲ってきて、私は突作に机につかまった。携帯が地震を知らせるアラームを発している。母が急いでテレビをつけると、その画面には目を疑うような文字が映し出されていた。

「熊本県熊本地方を震源とする震度7の地震発生」

四月十六日未明にも震度7の地震が起きた。連日のニュースで目にする、倒壊した家々や道路、家からがら避難所に逃げてきた人々。それらは私の心を痛ませた。そんなときに、がれきを撤去したり、被災者のためにお風呂を設営している自衛隊の方たちの姿があった。久方の入浴に頬をゆるませて話す被災者の笑顔が印象的だった。

地震などの自然災害が起きたとき、人命救助やがれきの撤去、被災者の生活支援のため自衛隊や消防の方々が迅速に活動されている。この活動も税金によって支えられているのだ。税金は公共設備だけでなく、人的活動にも使われていて、そのことで救われる人命があるということを、私達は忘れてはならない。

熊本市近くに暮らすおじが話してくれた。

「断水、停電、家の壁にはひびが入った。正直、これからどうなるやろて思ったよ。給水車まで水をもらいに行った時、自衛隊の人があたたかく声をかけてくれたのが嬉しかった。復興はそげん簡単なことじゃなかろうけど、支えてくれる人たちがいることがどんなにありがたくて力になるか、今回身にしてみた。」

税金の使われ方について、改めて考える。日常生活をより快適で安心、安全なものにするために使われることは広く知られていると思う。しかし、税金はそれだけでなく、今回の地震のように災害が起きたときも私たちをしっかりと支えてくれている。

被災地の復興のための、水道、電気、ガスなどライフラインの整備、そして被災者の生活を支援する様々な制度。いざというとき私たちの不安を和らげ、また新たな一歩を踏み出そうとする手助けをするためにも税金は使われているのだ。

「別に税金なんて必要ないのではないか？」「面倒だし税金を納めなくても大丈夫だろう。」

そう考える人も世の中にはいるだろう。しかし、税について学び、税について知れば知るほど、私たちのくらしがどんなに税の恩恵を受けているかに気付くだろう。

私たち一人ひとりの税によって、世の中が安心して生活できるものになり、災害時も復興に役立てられる。決して不要ではないのだ。

我が家が納めている税金が今回の震災に役立ててもらえたのなら、とても誇らしい。おじが話してくれたように、熊本の復興は簡単なものではないかもしれない。だからこそ、私たちの気持ちをこめた税金を熊本の自然や町並み、人々のあの笑顔を取り戻すために有効に使ってほしいと強く思う。

曾祖母を通して考えたこと

琉球大学教育学部附属中学校3年 普久原 美音

私には、百七歳になる曾祖母がいる。曾祖母は現在、国頭村にある特別養護老人ホームで暮らしているが、百歳までは国頭村与那で一人暮らしをしていた。曾祖母には私の祖母を含め三人の子供がいるが、住み慣れた地域で暮らすことを希望し、一人暮らしを続けていたのだ。

しっかり者の曾祖母ではあったが、九十歳を過ぎると次第に毎日の生活の中で手伝いが必要になってきていた。

そんな時、離れて住む家族に代わって曾祖母の生活を助けてくれたのが、デイサービスやヘルパー等の福祉サービスだった。

今回、「税の作文」を書くために国税庁のホームページを調べたのだが、そこで初めて、納められた税金の使いみちとして一番多いのは「社会保障」だと知った。「社会保障」とは、私達が安心して生活していくために必要な「医療」「年金」「介護」「福祉」などの公的サービス（国や地方がする仕事）のことだ。

つまり、私の曾祖母の自宅を訪ね、食事の用意をしてくれたり掃除や風呂の手伝いをしてくれたりしたヘルパーさんの派遣費用や週三回のデイサービス等の送迎を含めた費用などがこれにあたるのであろう。現在は老人ホームで生活している曾祖母であるが、そのホームの運営費や建設費なども同じかもしれない。曾祖母の生活費は、二か月に一度振り込まれる年金に支えられている。年金もまた、「社会保障」の一つである。

こうして考えると、曾祖母の生活がいかに公的サービスに支えられていたかということに気付かされる。住み慣れた場所でできるだけ自分の力で暮らしたいという曾祖母の願いは、公的サービスがあるからこそ実現できたものだった。税金が必要なところに適切に使われているからこそ、曾祖母を含めた高齢者の生活が成り立っているのだとも言えるかもしれない。

消費税の引き上げ等税金が増えることについては、不満の声もよく耳にする。しかし、税金のおかげで助かる人々もたくさんいるということは事実だ。

曾祖母のように、公的サービスを必要としている人は少なくないだろう。必要なところに必要なサービスが十分に行き届くような社会になってほしいと心から思う。そのためにも、私は、社会人になったらしっかりと働き立派な納税者の一人になりたいと思う。